

サトウとシオ

イラスト和狸ナオ

たとえば

少年  
★が  
序盤の街で暮らす  
ような  
物語

ラスト  
ジョー

前の村の





## プロローグ

お前には無理だと村の人々は口々に言いました。  
ロイド・ベラドンナのことです。

彼は柔和な笑みが印象的な好青年で、その見た  
目通り荒事も炊事や掃除、洗濯が得意で自他  
ともに認める「村一番のか弱い男」です。村の娘  
たちに「いいお嫁さんになれるね」なんて言われ  
るのはもはや日課の域でした。

川に潜っても魚を捕れたことは一度もなく、薪

を集めるのも日が暮れるまで時間をかけては人並み以下、戯たわむれに村の男おとこたちと組手くみてなんぞしたら次の日は丸一日寝込んでしまった——などなどその逸話を上げれば枚挙まいきよに暇いとまがありません。

そんな彼が突然、村を出て王都の軍人になりたいたいと言うものですから……加えてとても素直でお人よしな上騙だまされやすい性格なので村の中には軍人志望は疎おろか村から出て行くことすら反対の人間も少なくありませんでした。

ただいつでもだったら日ひよりみ和見で周りに流されやすいロイドですが今回ばかりは違いました。その素朴な

顔立ちの奥から、ある種の気迫をにじませて下唇したくちびるを噛み締めながら己が決意を語るのです。

初めて見せる彼の一面に村の人間も困り果て、遂ついには村長に説得してもらおうと会合が行われるまでとなりました。村の行事や政まつりごとを決める以外では滅多にないことです。彼が村のみんなに大事にされている証拠でしょう。

ロイドが軍人になりたいと言った数日後、昼下がりに一仕事終えた村の顔役たちに彼は村長の屋敷へと連れて行かれました。

村の北側にある小麦畑が一望できる風通しのよい広間の上に、まるで悪いことをした子犬のよう

にロイドは縮こまって座ります。傍らかたわに育ての親のお爺さんじい、そしてそれを困こむように村の顔役たちちんざが鎮座し心配やら苛いらだ立ちやら、思い思いの顔を向けています。

緊張し汗が浮いたロイドの額を、まだ青い小麦畑の香りとともに春風が撫なでていきます。

その風に揺れる麻の暖簾のれんの奥から玉のようなかわいいい声が響いてきました。

「すまぬみなの衆、待たせたの」

そしてほどなくして、ひよっこりと木綿もめんの口くちを羽織はった黒髪ツインテールの女の子お——ぱつと見齡十二歳前後——が姿を現しました。



広間に響きました。間をおいて彼女はロイドに子か孫に尋ねるような声こわね音で話しかけます。

「ロイドや……王都の軍人になりたいのかえ？」  
その瞬間、ロイドが返事をする間もなく、お爺さんが反応しました。

「村長からも説得してください！ お前には無理だと！ こいつ昔から変なところで頑固がんこなんですわ」

たまらずロイドが反論します。

「無理って……やってみなきゃ……わかからないよ……」

「って何言ってんだこのバカモン！ 薪もろくに



集められない、川の魚なんて捕ったことすらないお前に軍人なんて勤まるわけないだろう！」

「た、確かに魚を捕れたことは一度もないよ。でも王都じゃ魚以外の食料だってきつとあるはずだし大丈夫だよ……それと潜るのが苦手なだけだから……都会で水に潜る機会なんてそうそうないはずだよ」

その言葉に口を開いたのはふくよかなおばさんです。彼女は我が子をたしなめるようにロイドを説得します。

「ロイド、お爺さんが言っているのはそういうことじゃないの。あなたの体力のなさを心配してい



るのよ」

ごもつともと、お爺さんは大げさに首を振ってはうんうんと唸うなるのでした。

「んだんだ。そんなこともできねえで軍人なんてなれっこねえべ。それにな、苦手って言っても限度があるじやろ」

今度は腰に古めかしい剣を携たづさえた精悍せいかんな顔つきの青年がぶつきらぼうに言い放ちます。

「屁理屈こねて言い訳してんじやねーっての。いつまでも苦手なのを克服できないうお前が悪いんだぜ」

「うう」

落ち込むロイドに青年は露骨に顔をしかめながら「いやらしそうに付け足します。」

「―だいたいよ、水中に一時間しか潜れないなんて話にならないぜ」

「そうね最低でも三時間は潜れないと、お爺さんの若い頃なんか三日は潜ってたわよ」

「四日じゃ」

自慢げにお爺さんは四本指を立てるのでした。

―ちなみに素潜りのプロとも呼べる海女あまさんは平均約五分ほど、世界記録は二十二分超だそうです。参考までに。

お爺さんはいつと「おーすげー」「さっすが爺

さん」と他の村人からの賞賛を浴び若干ニヤケ顔になります。すが、すぐに取り繕つくろい元の威厳たつぷりの顔つきに戻し、ロイドのほうへ向き直るのでした。

「ええかロイドや、それにたかだか牙きばや角が生えた魚程度で苦戦してどうする。きつと海なんかもつとやばい魚がいるに決まってるぞい」

「でも小説とかじゃ牙とか角のない魚もいて都会じゃそれを食べているって」

「馬鹿ばかこくでねえ！ 牙も角もない魚がどうやって生き残っていきけるんだ！ そんなおったら根こそぎ捕られて全滅待ったなしじゃ」

「う、たしかに……」



―ちなみに彼らの言う魚とは『キラ―ピラニア』  
というれつきとしたモンスターです。頑強な角と、  
牛すら三口<sup>みくち</sup>で食べきってしまっほどの大きな口と  
牙を持ち手練<sup>てだ</sup>れの戦士ですら水中では手も足も出  
ない代物<sup>しろもの</sup>です。  
ぐうの音も出ないロイドに追い打ちをかけるよ  
うに、次は作業着に身を包んだ木こりが声をかけ  
ます。  
「泳ぎが苦手だとしてもだ、木を切ったりだとか  
薪を集めるくらいはもう少しでできるようになった  
ほうがいいと思うが……」  
静かに、ゆっくりと悟<sup>さと</sup>す木こりに続いてお爺さ

んが斧おのを振る仕草を見せました。

「そうだ、『トレント』に気付かれねえように近づいて一発で仕留められねーと一人前とは呼べねえよ」

ブンブンと振り下ろす仕草のお爺さんに異議ありと言わんばかりに身を前に出しロイドは反論するのでした。

「でもさじいちゃん、本とか小説じゃ王都は『トレント』じゃなくて普通のブナとか杉の木を薪にしているって書いてあるよ」

「はあ……お前小説のことを信じておるのか」  
額の汗を手ぬぐいで拭ふきながら呆あきれるお爺さん。

横から木こりがそれは聞き捨てならんと口をはさみます。

「ロイド、そんな普通の木を薪にしたってせいぜい三時間くらいしか燃えない。トレントは丸三日間は燃え続ける。言いたいことはわかるな？」

「んだ、どっちがいいかは馬鹿でもわかるで、普通の木なんて使ったら冬こせねーだよ」

「確かにトレントのほうが断然いいけど……」

「ちなみにトレントとは木の姿をしたモンスターのことです。近づいた人間に木の根を突き立て養分を吸ってしまおう恐ろしい魔物です。大体は倒したら消えてしまいが気が付かずに倒したり運



がよかったりすると形が残りそれは貴重品として大金で取引される代物です。普通は薪の代わりにしません。そんな様子を見たら商人だったら声をからして喚わめくでしょう。

木こりは部屋の柱に背を預け腕を組むと自分の仕事について話し出します。

「木こりってのは村の家屋や冬の暖の為、汗水たらして働く大変な職業なんだ。それに薪だけじゃない、魚だって『買えばいい』のひと言で済ませるにはだめだ。そんな気構えでは軍人なんてとてもなれないぞ」

強い口調で忠告する木こりに、ロイドの顔が陰かげ

りました。そして思った以上に落ち込む彼を見て慌ててフオローします。

「あゝいや、何もロイドに木こりの技術を身につけてから都会に行けと言っているわけじゃないんだ。音を立てずに忍び寄る歩行も、森に完全に溶け込む迷彩技術も、都会では必要ないかも知れない」

木こりでも必要ないと思います。

「……すまない、強く言いすぎた」

謝る木こり、そして叱咤しつたされたロイドは下を向きながら安直な考えを猛省していました。

そこに先ほどの青年がトゲのある言い方で声を

投げかけます。

「そんな魚がいるとか気構えとか問題じゃねーんだよ。ロイドが弱いくせに軍人様になろうってのが一番問題だろ」

「それはあんちゃんが強いから」

「こないだの剣の手合わせん時もかなり手加減したんだぜ。それでも次の日、丸一日寝込みやがって……いじめでもしたんじゃないかって、すげー悪者扱いだったんだぞ」

「うう……」

嘆息を一つはさんでから青年は苦笑交じりで続けます。



「ハア……だいたいな、骨折ぐらい一時間で治せよ」

「全身だったんだよあの時！ 全身複雑骨折じゃ丸一日くらいかかつちやうよ！」

「何言ってるんだ！ 骨折なんてせいぜい長くて三時間だろ！ 爺さんなんか『やー』のかけ声一つで治したぞ」

——ちなみに骨折は一般的に重症の部類です。一か月はギプスと付き合う羽目に……つて言わなくてもわかりますよね。

そして青年は腰元の柄に二匹の蛇へびが彫られた古めかしい剣を抜き放ちながら、ロイドに説教を続

けます。

「そもそもだ！　こんな古ぼけた剣が当たったくらいで骨折なんてしてんじゃないかねー！　何だっけこのなまぐらの名前？　ガールズバーだっけか？」

「何じゃったかな？　カレバーとかエクスカリバー……いやガリガリバーじゃったかな」

——ちなみにこの古めかしい剣の名前は『エクスカリバー』かの有名なアーサー王の伝承における神秘の剣で実に九百六十人もを切り倒したと言われ、またカリバーンやコールブランドなど様々な異称があることで有名です。

「そうそう、ガリガリバーだ。なんか氷菓子みた

いな名前だつたなコレ」

神秘の剣が身も蓋ふたもありませんでした。一回正解はさんだのにスルーです。

「つたく、俺おれもオヤジから譲られなかつたらこんなまくら使つてねーつての……とにかくこんなでイチイチ怪け我がしていたら埒らちがあかねーつてことだよ」

その流れに乗つてお爺さんが今度は別のことでロイドを説得します。

「それにロイドや、おめえさん体力もそうだが魔法だつてろくなもん唱えられねえだろ」

「あーそういやお前なんか唱えられたっけ」



魔法と聞き、少しばつの悪そうな顔をしてロイドは答えました。

「んつと術式は色々知っているけど……使えるのは雨を降らせる魔法とか……」

ロイドの搾り出すような声を聞いた青年は大きさに首を振りました。

「雨なんざほつときゃ勝手に降るだろ……せめて村長みたいに空から岩を降らせるとかよ……何だっけ、隕石いんせきだっただっけ」

「隕石いんせきじゃな。懐かしいのお、昔裏手の山に出たモンスターを追おっ払はらった時のことを思い出すわい」

「あん時の魔物は傑作だったぜ 『世界を滅ぼす』

とか『人間は増えすぎた』とかわけのわからんことをグチグチと言ってたな、ハハハ」

おや、徐々に思い出話に花が咲き始めてしまったようです。ね。

「聞いてくれよ！ ついこの間なんか人間の姿してくつちやべって来てさ、いざ追い詰められたら『この姿になるのも久しぶりだ』なんていってトカゲに変わってさ。いやー笑った笑った」

「だったら最初からその姿で来いってな、結局村長呼んでる間おばちゃんがのしたんだっけ？」

「そうなのよ。一、二、三発ホウキではたいたら動かなくなっちやって、後片付けが大変でー」

話が脱線し、酒の席のような雰囲気になっ  
てしまったこの場をアルカが手をパンパンと鳴らし空  
気を戻します。

打ち水を打った後のような静けさがまた広間に  
漂いました。

「思い出話はこのくらいにして……のおロイドや」

「は、はい」

「みんなの意見を聞いてもまだ決心は変わらない  
のじゃない？」

「ハイ」

静かに燃える眼を向けロイドは彼女を見つめま  
す。対してアルカはとうとうと、

（ついにこの時が来たんじゃない……ロイドが軍人に興味を持つように軍人が活躍する小説をしこたま読ませたかいたわい）

なにやら意味ありげなことを考えていました。そして思惑通り事が運んだことを気<sup>けど</sup>取られぬよう優しい笑みを携えロイドに言いました。

「――よかろう。この村を出て王都で軍人を目指すことを許可する」

「村長！」

周りの大合唱にやおら立ち上がりアルカは「静まれ」と手を掲げます。

「――外を知る、ということとは成長にも繋<sup>つな</sup>がること

じゃ。見聞を広げることがロイドに必要なだと思うぞい」

「しかし村長」

「それに男が一度決めたことよ。口出しするのも野暮やぼつてもものじゃよ」

そう言うつとアルカはくるつとロイドのほうに顔を向けます。母親が子に向けるような顔でした。

「でも、辛つらくなつたらすぐ戻つてくるんじゃよ

……ここはお主の村なんだからのお」

「は、ハイ！」

みんなはその顔を見て「一番辛つらいのは村長なんだな」と察してなにも言えなくなつてしまつたので



した。

さて、そんなアルカはというと、

（ロイドと毎日会えなくなるのは辛いのが  
……ま、瞬間移動でこっそり会いに行けば万事オ  
ツケーじゃしな……むしろ村人の制止がなくなり  
イチャイチャチャンス！）

……この脳内を村の人間にさらしたら別の意味  
でなにも言えなくなってしまううでしょうね。

かくしてロイドの上京は晴れて許可されたので  
した。

ロイドの上京の件が決まっからというものの、

月日が経つのは早く、それはロイドがこの村を好きで村の人たちもロイドのことを大事に思っていたことを確かめるような、愛<sup>いと</sup>おしくほんのり切ない日々でした。

そして遂に出発の日。空はロイドの門出<sup>かどで</sup>を祝うかのように端<sup>はじ</sup>から端まで青々と澄<sup>す</sup>んでいます。

その青天の下、厚いテント地の丈夫なズボンと動きやすい麻のシャツ、そして小ぶりのナツプザツクといった――正直「え？ 日帰り旅行？」と勘ぐってしまったかのような格好のロイドがそこにいました。なんとも申し訳なさそうな表情です。

それもおの、村の人間全員が各々の仕

事を後回しにしてロイドを見送りに来たのですから。立派なアーチのかかった木造（トレント）の門が村人たちで埋め尽くされていました。

その中心にいる村長のアルカは一步前に出ると。しげしげとロイドの顔を見つめます。

「本当は途中まで一緒に行きたいのじゃが……これも一つの勉強じゃ、一人で行くがよい」

実際は村長と一緒にするとそのままついて行って帰らなくなることを村の人々が危惧きぐしたためです。『ロリババアの溺愛できあひここに極まれり』は村の共通認識なのでした。そんな思惑さみなど知らずロイドはさわやかに、そしてどこか寂さみしげに「はい」と

返事をします。

そして親代わりのお爺さんが近づきロイドの肩をバンバンと叩きます。

「王都はこの大陸の南端じゃったろ？ 走って二日かの、トレーニング感覚で行ってこい」

「あはは、じいちゃんの若い頃と比べないでよー  
大体一週間かな」

「そんなのんきなこと言っておると都会の流れについていけないぞ。都会の人間はみな忙せわしないと聞くからの」

「うゝん。頑がんば張るよ！」

少し上ずった声のロイドに「泣くなよ！」なん

て野次が飛んできます。場が小さな笑いに包み込まれました。

「おおそうじやロイド。王都についたら『イーストサイドの魔女』まじよって奴に世話になりなさい。この水晶を見せたらきつと協力してくれるはずじゃ」アルカが手渡したこぶし大の水晶をナツプザツクに詰め込むとロイドは柔和な笑みを浮かべ、「ありがと村長。ありがとみんな。——行ってきます！」

何度も振り返りながら山道を降りていくのでした。その姿を見届けたお爺さんはついつい不安をつぶやきます。



「ふう……しかし大丈夫かのロイドの奴は」  
その言葉にアルカはぽろっと本音をこぼしてしましました。

「全然余裕じゃろーってゲフン！ なんでもないぞい！ さあみんな仕事に戻るんじゃない！」  
アルカはちよつと「やっちやつた」という顔を咳せきばら払いをしてごまかすとみんなを村の中へと誘導するのでした。

（ほんとは弱くもなんともないのに周りが輪をかけて強いせいで自分を卑ひげ下しているからのお。この旅で自信を付けてほしい次第じゃ……そして——）  
アルカはもういなくなつたロイドのほうを向き

ました。暖かい春風が頬ほおに触れ、遠くの山脈を見  
る目が細くなります。

（ワシの悲願のために……頑張って軍人になるん  
じゃよ、愛しいロイド）

ここは最果ての村『コンロン』  
いにしえ

古の英雄たちが世界を救った後、世俗を離れ安  
らぎを求めた集落。

この村の人間はみな、英雄の子孫にあたります。  
そんな人外の集う村つどの中で最も弱く最も素直な  
少年『ロイド・ベラドンナ』

この物語は彼と、その周囲の織りなす『勘違い』

で綴<sup>つづ</sup>られていく、そんなお話です。

—そうですね、今風に例えるならラストダンジョン前の村の少年が都会にあこがれ序盤の街で暮らすような物語……といったところでしょうか。

第一章 たとえば新らしい部下が社長の息子だと発覚した時のような手のひらの返しよう

さて、ではこの物語の舞台『アザミ王国』についてお話しましょう。

この国は大陸の南端に位置し暖かい気候に恵まれた過ごしやすい地域です。加えて海産物豊かで穏やかな海に面し、大陸を縦断する大河が国へと繋つながっているため物流に関しては近隣諸国と比べ頭一つ抜けていました。

そんな交易の盛んなアザミ王国は大きく五つの区にわかかれております。王家や貴族が住まい軍部が駐屯する中央区、国の玄関とも言える様々な商店が集うノースサイド、整理されたベッドタウンとも呼ばれるウエストサイド、交易の要である港に一番近くノースサイドとはまた違った活気を見せるサウスサイド。

そしてロイドが向かうイーストサイドはというと、身も蓋もない言い方をすれば王国の吹き溜まりというような場所です。

王国内にあって王国とは言い難い治安で、まるで急な来客の際のとりあえず見栄えだけでもなん



とかする為にあれやこれや無理やり押し込んだ感のあるタンスの中身のよう<sup>わいざつ</sup>に猥雑とした区、それがイーストサイドです。

中流から下流の家庭が大半ですが、ちよつと奥まった所に行くと多種多様な人間による独自の法が存在する別世界が広がっています。

ヒビの走った何年も手入れされない石畳、ゴミなのか商品なのかわからない何かに木切れの値札が無造作に引っ付いている家屋の軒下、無駄に露出の多い妙齡——いや、高齡に片足突っ込んだ女性たちが気<sup>け</sup>だるげに談笑していたり……と、寂<sup>さび</sup>れた光景が来るものを迎え入れます。

そんなイーストサイドの裏通りを夜半、小さなナ

ツプザツクを肩にかけ田舎者丸出しでロイドはキヨロキヨロしながら目的地へ向かっていったのです。

無論そのような出で立ちで裏通りを歩くなど「カツアゲおなしやす」と言わんばかりですね。早速勤勉なチンピラたちが足早にロイドのそばへと寄ってきました。

チンピラは威嚇しながら歩いてきますがロイドは意に介さず素通りしようとしています。

「無視ってか……へえ、じゃあこの手で絡んでやるか」

先頭を歩くチンピラは肩を思い切りぶつけてき

ました。俗ぞくに言う『当たり屋』という手口です。どういいう手口かというところ……

「あああ痛いてえええええ！」

このように自らぶつかり痛がる素振そぶりを見せ、  
「あゝ兄貴あにき！ てめえどう落とし前つけてくれるんだ小僧！」

と、因縁をつけて小銭をせしめるといったやり方です。みなさんも繁華街などでは十分お気を付けてくださいね。そして不運にも当たり屋に絡まれたロイドは呆ほうけるばかりです。

「へ？」

「へ？ じゃねえよコラ！」

兄貴の肩イカレちま

「つてんじやねえかコレ！」

「痛え！マジ痛てえ！ 医者！ 骨イってる！」

「でも軽くぶつかっただけですよ？」

「医者！ 医者！」

脂汗をにじませ身をよじり、兄貴と呼ばれる男は迫真の演技？を続けます。「今日の兄貴はノってるなあ」と思った弟分も熱演にあてられ気合が入ります。

「なわけあるか！ 慰謝料いしやりようだ慰謝料！ 有り金！

身ぐるみ！ 全部おいてけ！ もちろんパンツも脱いでいきやがれコラ！」

「いしやあ………」

弟分が金銭とパンツを要求している最中も兄貴分は悶もだえ苦しんでいました。そして次第に弟分も彼が演技ではなく素すであることに気が付きます。

「え？ 兄貴？ ……ガチですか？」

「ガチじゃあ！ 腫はれてるだろうが、こんダボスケがああ！ い、医者じゃこらあ！ ……あ、これマジでダメなやつツ」

その悲痛の叫びを見て、弟分はしばし呆然ぼうぜんとした後、先ほど以上に血走った眼まなこでロイドを睨にらむのでした。

「あゝ兄貴いい！ てんめえええ！ どう落とし前付けてくれるんだ小僧おおお！」



「あの、さつきも同じこと言われましたけど」  
「うっせえ！ 今度はマジじゃあ！ こっちは早

く兄貴を医者に診せなきやなんねえんだ！ グダ  
グダ言っでねえでバシツと誠意を見せたらんかコ  
ラ！」

そう言いながらサツと手を差し出し金品を要求  
するチンピラを見ても未だロイドは小首をかしげ  
たままです。

（えっ……バシツと？ 誠意？ うーんタツチ  
でもすればいいのかな？）

そう思いチンピラの手をひらを「バシツと」軽  
く叩きました。彼にとつての『軽く』、みなさんお

察しの通りです。

バツシイイイイイン！ と耳をつんざくような音が裏通りに響きます。軽く叩かれたチンピラの手ひらは三回転ほど肩の周りをぐるぐる回り地面に不時着……墜落つらくしました。

「ほんぎゃあああああ！」

今度は肩と手のひらがイカれた弟分がのたうち回る形と相成りました。チンピラは二人仲良く泥まみれです。

「え？ 何ですか？ 軽く叩いただけなのに？」

その大げさを超えたチンピラのリアクションにロイドは戸惑いを隠せません。心配し近寄ると彼

らはゴキブリのように這<sup>は</sup>つて彼から距離を取りま  
す。

「お、覚えてやが……いやっ！ 忘れてくださ  
い！」

テンプレートな捨<sup>す</sup>て台詞<sup>ぜりふ</sup>すら卑屈<sup>ひくつ</sup>になるほど心  
の折れた二人はお互いを支えあいながらよろよろ  
とこの場を去って行くのでした。

「ああ……大道芸の人か何かかな？ 都会だし」

呆気<sup>あっけ</sup>にとられたロイドは『都会』という魔法の  
言葉で無理やり解釈<sup>かいしゃく</sup>するに至ったのでした。

そんなこんなで彼はなだらかな坂道の途中にある雑貨屋  
にたどり着きました。店の軒下<sup>のきした</sup>には古くさい薬ツボが数点、

そして小さな看板には申し訳程度に「薬ありマス」と書かれていました。

明らかに胡散臭うさんくさそうな雰囲気が逆に魔女っぽさを演出……そんな店構えです。

「ここがイーストサイドの魔女さんの所か」  
ノックをするのもためらわれるくらい古びた扉の隙間すきまから明かりがこぼれています。中に人がいることを確認したロイドは控えめに「ごめんください」とひとひと言添えて中へと入りました。

錆びた蝶番ちようつがいのせいでやたら重々しい扉の先には全身黒のローブにつばの広いとんがり帽子、ふちななしメガネでばっちり決めた『いかにも魔女』な

亜<sup>あ</sup>麻<sup>ま</sup>色の髪の女性がコーヒ―を片手に本を読んでいました。年齢はロイドと同じくらいに見えますが、それを感じさせない空気を纏<sup>まと</sup>っています。

店内もまた『いかにも魔女』で作りかけの薬と乳鉢<sup>にゆうばち</sup>、見たこともない毒々しい色合いの植物の鉢、古めかしい書物が床に積まれており「らしさ」を強調しているのです。

「……………」

彼女は手に持っている分厚い本に落とした視線をかけたるそうにこちらに向けるとしばしロイドを眺めた後、また視線を本へと戻しました。本をめぐめる音だけが部屋に響いています。

あまりの対応にどうしたらいいのかわからなくなつたロイドはただ立ち尽くすだけです。それにしびれを切らせたのか黒づくめの女性はセミロングの髪を耳にかけ、

「何かしら」

とぶつきらぼうな言葉を浴びせました。ゆつたりとしたローブの上からもはつきりわかる豊満な胸が発した声で震えます。

「あゝの……イーストサイドの魔女を訪ねると言われてここに来ました」

「ふうん、誰かの言伝ことづつてかしら少年？」

「あゝいえ。使いの者ではなくて……」



「へえ、じゃあ私を『魔女』と知ってのおお客様ね」  
コーヒ―をすすり、本を閉じると魔女は向き直りメガネの奥の妖艶ようえんな視線で睨ねめ付けます。

「君みたいなきが魔女にものを頼むということ、それがどんなことかわかっているのかしら？」

あまりにも仰々ぎょうぎょうしいことを言われロイドは気後きおくれしながら答えます。

「いえ、僕はそのただ訪ねろと言われたただけで」  
呆あきれた顔で魔女はため息をつくと諭さとすように返しました。

「――古来より魔女とは対価を求め望みに応えるもので、相応の贄にえを出す覚悟が必要よ。それを知っ

てもなお求める望みは何なのかしら？ どのよう  
な無理難題でもこの魔女マリーが導いてあげるわ  
—後悔のないようにね」

半ば脅しにも似たセリフ、ロイドはゴクリと唾  
を飲み込むと意を決し伝えます。

「ぐ、軍人になりたくて田舎から上京してきまし  
た！ ちよつとの間お世話になります！」

しばし間があつた後、魔女は咳払い一つ。

「コホン……古来より魔女とは—」

「あ、それさつきも聞きましたけど」

「とつとと宿探して広場の募集要項でも見てこい  
こんちくしようめ！」

先ほどもまでのエキゾチックな雰囲気たつぷりの魔女は、一転して弟を叱しかる姉のように椅子いすから立ち上がって怒りました。シユンとするロイド、続けざまに魔女は悪態をつきます。

「まったく……魔女を便利屋か慈善事業か宿屋とでも勘違いしているのかしら！ そんな風に伝わっているの？ どこの田舎出身よもう！」

「えっとコンロンって村です……」

「あっそう。じゃあ村に帰ったらちゃんとして伝えてちょうだい、古来より魔女は……ん？ こんろん？

コンロン？」

椅子に座り直した魔女は顎あごに手を当てなにやら

思い出す仕草を見せます。そして次の瞬間大事な忘れ物を思い出したかのような血の気の引いた顔になりました。

「えっと……少年、ちなみに、ですが、村長様のお名前は？」

「え？ アルカですけど？」

その名前を聞いた瞬間魔女の背筋がビシツとなり顔面は蒼白そうはくのまま汗だくになりました。手なんか軽く握って膝上に乗せまるで面接を受ける就活生のようです。

そしてそのまま「いやしかし同名という線も捨てがたく今更いまさらいったい何の用だろ……」と呪文の

ようにぶつぶつぶつぶ言い始める始末です。そんな魔女を眺めていたロイドは何かを思い出し、小ぶりのナツプザツクの紐ひもを解ほどき、中あそを漁あそりました。

「そうだと思います。これ見せたらいいと言われたんですが……」

おずおずとロイドがこぶし大の水晶をテーブルの上に置いた瞬間、

「望つみが潰つぶえた！ あの人で間違いない！」

魔女はシュートを外したフットボール選手のごとく天を仰ぎます。

一方ロイドはその様子をつぶさに見つめ「コミカルな人だな」と感心しきりです。

その視線に気が付いたのか、魔女はというと急いで帽子を脱ぎ、先ほどまでの余裕などなかったかのような俊敏しゅんびんな動きで亜麻色の髪を振り乱しながらコーヒ―を淹いれ始めました。

「すいません気が利かなくて！ で、本当に言伝とかないんですか？ もしかして今、村長様が一緒に来ているとかそんな恐ろしいことは」

「いえ、言伝はありませんし自分一人で来ました」  
一人という言葉に魔女は「しゃオラア！」と雄叫おたけびを上げ豪快にガッツポーズを決めます。大人びた雰囲気はどこやら。そしてその姿勢のままロイドに尋ねます。



「えーではマジで宿代わりに私の家を……」

「と、とりあえず水晶を見せればわかるって言われたので」

二人の視線が件の水晶くだんへと向けられた次の瞬間でした。オーロラのような粒子を纏まとった光が水晶の奥から広がっていき人の形を作り出していきま  
す。

徐々に輪郭を現すその人物はロイドのよく知る  
コンロン村の村長、アルカでした。そしてそのツ  
インテールのよく似合う幼い容姿を目の当たりに  
した魔女はというと、

「フヘー」

よどみのない動きで土下座どげざをしていました。そして額ひたいを惜しげもなく床に擦こすり付けながら「勘弁してください——」と繰り返し繰り返し口から発しています。

そろそろ床から煙でも出るんじゃないかと思つたタイミングで水晶から映し出されたアルカが喋しゃべり出しました。

「——久しぶりじゃのマリー、お主の師匠ししょうのアルカじゃ。覚えているかい？」

「フヘー」

古来より魔女うんぬん云々と言っていた彼女の威厳いげんはすでにどこぞへと消えていました。

「何年かぶりであんななお願ひするのもあるんじゃない  
やが、私の大事な大事な村の子供のロイドが王国  
の軍人になりたいたいなんて言い出してな……ま、普  
通に合格すると思ふんじやがそれまで王都での面  
倒を見てほしいんじやよ」

魔女は土下座を維持したまま質問を始めます。  
胸が窮屈きゆうくつそうです。

「フヘー……失礼ながらお聞きしたいことがいく  
つか……」

「あ、そうそうちなみにこの水晶の映像は録画  
だからの、そつちの質問には答えられないのじや、  
すまん」

その言葉を聞いた魔女は次の瞬間、

「なーによ脅おどかしちやっつてこのちんちくりん！

相変わらず成長してないわねーへっへー」

豪快に立ち上がると、ころりと表情を変え水晶をぺちぺち叩きながら笑い出すのでした。

で、その録画であるはずの映像はひと通り魔女の手のひら返しを見た後、口の端をにんまりと歪ゆがめながら彼女に視線を向け直します。

「ーなーんて言ったらすぐぼろを出すのは相変わらずじゃなマリーちゃん」

「フヘー」

黒のケープを翻ひるがえしながら魔女は瞬時に床に突っ

伏ふしました。土下どげ寝ねです。その様子を氷の微笑びしょうで見届けた後、アルカは興味をなくしたようであれ口調で言いました。

「まあよい、久しぶりにお主の無様ぶざまな姿も見られ  
たしの……とにかくよろしく頼むぞ。仮に試験に  
落ちてしまっても主ならなんとかしてくれるはず  
よな、マリーちゃん。んじやヨロシク……ロイド  
や！寂しかったらいつでもワシが添い寝してや  
るぞい！」

そしてその言葉と同時に映像は光の粒子となり消えていきました。残されたのは棒立ちのロイドと胸が潰つぶれるほど突っ伏す幼き魔女、なんともシ

ユールな光景でした。

ロイドは添い寝と言われ恥<sup>は</sup>ずかしい顔を浮かべています。その足元ではもぞもぞと魔女が起き上がります。ロイド以上の「やっちまった」感溢<sup>あふ</sup>れる恥ずかしい表情でした。

黒ずくめの服装を整え、灰色のホコリをアクセントに添えた髪の毛を手櫛<sup>てぐし</sup>で整え、メガネを直す<sup>せき</sup>と、堰<sup>せき</sup>を切ったかのように大声で叫び出します。

「——ちくしよめええええ！ やつと解放されたと思っただのに！ 急に変なこと頼みやがってあん口リババア！ ロリバツバア！」  
そして憎<sup>にく</sup>しみを込めクローゼットの中に水晶を





なっ  
てしまっ  
て、自  
分にで  
きるこ  
となら  
なん  
でも  
しま  
すか  
ら」

その眉根まゆねの寄った困り顔に毒気が抜かれたマリ  
ーは優しい口調になります。

「ま、別にそんなに畏かしこまらなくてもいいわよ。と  
りあえず奥の部屋貸してあげるから荷物置いてき  
なさいな。泊まり客が来ると思ってなかっただから  
汚きたないし、もう遅いから今から片付けないと寝る時  
間ないわよ。テキトーに隅すみっここに寄せるだけでも  
いいから」

そう言っ  
てマリ  
ーは奥  
の部屋  
を指さ  
しまし  
た。

「あ、ハイ！」

ナツプザツクを抱えるとロイドはそそくさと部屋に向かいます。途中くるりとマリーアのほうを向いて柔にゆうわ和な笑えみを浮かべながら「これからよろしくお願いします」と律儀に一礼して部屋へと向かいました。

一方、急に同年代の同居人が増えたマリーアはその後姿を見て、「コンロンの村の……あのロリババアの関係者だけれど素直でいい奴ね……意外だわ」そう漏らすとすっかり冷たくなったコーヒースズリ直します。

「ま、あのバカ師匠が頭のネジ二つか三つぶっ飛んでいるんでしよっけど」

そして「どこまで読んだっけかなー」としおりを挟まず閉じた本をめくっていると。

「ああそうそう、いくらかわいくていい子でも手なんか出したらお主を一生カエルにでもするからそのつもりでの」

クローゼットから映像ではない本物のアルカがひよっこり現れたのです。

「フンブ！」

盛大に噴出された褐色かつしよくの液体で本はどこまで読んだどころか何が書いてあるのかすらわかりにく

くなつてしまいました。

「どーしてクローゼットからあんたが出てくる！」  
鼻から黒い液をだだ漏れさせたマリリーはアルカ  
に詰め寄ります。彼女は悪びれもしません。

「ん？ 決まっとするじゃろ。瞬間移動じゃよ、こ  
の水晶をゲートにして……」

「さも当然のように人外じんがいの技使わないでくださ  
い！ほんと相変わらずですね師匠、あといくら  
なんでも会って数時間の男の子に手は出しません  
て」

「ん？ そうかえ？」

「当たり前です！ 私をなんだと思っているんで

すか！」

アルカはせせら笑います。

「どの口が抜かすか。この前なんか繁華街のホストクラブの前で入ろうかどうかどうろろして結局断念してたではないか。動きが童貞どうていそのものじゃったぞ」

「どーてーちやうわ！　しよ……つてあんだドコまで知ってんの？　つてか何？　監視されてたの？　ここバレてたの？」

「ま、踏みとどまったのは褒ほめてやろう……自分の立場を忘れていなかっただようじゃの、だから預けるのさね。改めてよろしくの、マリーちゃん」



「……ハイヨロコNDER」

マリーは苦虫を嚙かんだかのような表情で返事をしました。いえ、苦虫を嚙かんだどころか嚙かみ砕きはぐき歯茎はぐきにすり込んだくらいくじゆうの苦渋くじゆうの表情です。

言いたいことを言った後、モソモソとクローゼットの中に入ろうとするアルカは思い出したように背中せなかで喋り出しました。

「あ、そうそう。お主、今日かなりロリババア連呼よびよしていたから罰ばつとして古代ルーン文字で小さな不幸ふしちが降りかかる呪のろい掛かけいたぞ」

「何してんの！ 古代人の叡えい智ちを駆使くししてメチャクチャくだらないことしないでください！」

そんなアルカに猛抗議しようかと詰め寄った瞬間です。

ガツン！

「ふぐ！」

テーブルの脚に足の小指をぶつけ、マリーは悶絶もんぜつするのでした。アルカはその様を見て目の端に涙を浮かべるほどケタケタ笑うとクローゼットの中に消えていきました。

さて、心の折れたマリーはというと、テーブルに突っ伏してチクシヨウメチクシヨウメと恨み節を繰り返しそのまま寝てしまったのでした。

豪快にテーブルの木目を顔半分につけたマリィはトントンという規則正しい音に反応して目を覚まします。

古めかしい木枠の窓から注ぐ朝の日差しを鬱陶うつとうしく感じながら根気よく見つめたその先には、  
「ルールルルルルルルリラー」

昨夜、急に現れた軍人志願の少年ロイドが鼻歌を歌いながら台所に立っていました。慣れた手つきで青菜を刻んでは火にくべた鍋の中に放っていきまます。

「あー……あのまま寝ちゃったのか」  
ミシミシと音を鳴らしながらゆっくりと起こし

た体からするつと毛布もうふがずり落ちます。マリーがあの少年ロイドがかけてくれたのだろうと察した時、その音に気がついたのか彼は柔和な笑みで声をかけてきました。

「あ、おはようございます……すいません。お台所お借りして 있습니다」

「はよぎーす……あーいいのよいいのよ、それよりも毛布ありがとね」

「本当はお部屋に運びたかったんですけど女性の部屋に勝手に入るのはちよつと気が引けたので……」

マリーはその言葉を聞いて自分の女性らしから

ぬイーストサイドめいた寢室の惨状さんじょうを思い出し、  
ホツと胸をなでおろします。

彼女は「紳士しんしねー」とごまかすように口に出し  
ながら亜麻色の髪を手櫛で直し、ロイドの手元を  
覗き込みます。彼はつまみ食いをしようとする子  
供をたしなめるように声をかけました。

「ちよつと待ってくださいね、今パンケーキ焼き  
ますから」

今度は平鍋を火にかけて油をひくと溶いた小麦  
で手際よくパンケーキを焼き上げます。小麦の香  
ばしい香りに食欲をそそられたマリーは寝起きと  
は思えないくらい機敏に皿とはちみつをテーブル

に並べました。

パンケーキともう一品、青菜のコンソメスープを添えた朝食にマリーは言葉を失いました。

「簡単なものしかできなくてすいません」

「……いえ」

朝起きたら朝食ができているという状況は独り身にとって至高の喜びです。加えて昨夜、あの角と金棒がないだけで本質は地獄じごくの鬼おにと大差ない元師匠の横暴を受けた後です。さりげない気遣いとコンソメスープの香りが心に染み入りました。

「——これならずっといってくれてもいいくらいね」  
「はい？」



「ああなんでもないわ……んじやゴチになりまーす」

そう言っつてマリーは豪快にパンケーキにかじりつきます。香ばしい香りのパンケーキにはちみつを浸すほどぶっかけては口に頬張りリスのように頬を膨らませて、コンソメスープで流し込みました。

「美味<sup>おい</sup>しいわーあ！ 最近缶詰しか食べてなかつたからこういうのサイコーね」

「え？ 缶詰ばっかですか」

「ええ。魔女だからね」

古来から伝わる魔女のイメージに喧嘩<sup>けんか</sup>を売るイーストサイドの魔女はパンケーキを三枚ぺロリと

平らげた後優雅にコーヒーを淹れすすり始めました。

その満足げな顔を見て柔和な笑顔でロイドは後片付けを始めます。一方マリィはその軍人志望らしからぬ自然ないいお嫁よめさんっぷりに思わず素直な疑問を口にしてしまっただけでした。

「え？ ロイド君、本当に軍人志望なの？」

「あゝはい………すいません」

皿を洗いながら律儀にこちらを振り向くと、ロイドは小さく頭を下げます。

「あゝいやいや謝らなくていいんだけれど」

そこでマリィはこの少年がコンロンの村の人間

だということのを思い出しました。「愚問ね」と彼女は失念していたことを自責した後、皿洗いをする少年の背中に向けて試験について話し始めるのでした。

「アザミ王都士官学校一般募集試験は今月の中旬だからまだ先ね、試験内容は知ってる？」

「えっと武術試験と魔法に関する筆記試験、あと面接つてくらいしか」

「ええ、毎回ちよつとずつ変わるけど大体はそうね。一番大事なのは武術試験だから」

「あ、やっぱそうですか」

「そうそう、魔法は得<sup>えて</sup>手不<sup>ふ</sup>得<sup>えて</sup>手あるしある程度知

識があればいいくらい。軍人の仕事は基本警備とか力仕事。結局は体力がなきゃね」

「うう」

「加えて最近では責任者のメルトファン大佐がかなり気合入っているらしく、色々な場所に募集をかけているそうね……明確な定員はないけど倍率は高いわよ」

そしてマリィは「今回は武勲ぶくんで名を馳はせたリドカイン家の長男、噂うわさのベルト姫、悪名あくみ高い女傭兵ようへい……」と次々に口にしませんが大陸最果ての村から来たロイドにはいずれもピンときません。

「はあ………詳しいんですね」

「魔女だから、ってわけでもないけど雑貨屋だからなんでも扱っているって感じよ。特にここイーストサイドじゃお金持っていない人間が多いから薬の対価として情報をもらっているわけ」

得意げになりコーヒーをすすするマリイとは対照的にロイドの顔は曇りっぱなしです。

「やっぱ体力とかメインですか……うう……自信ないなあ」

その言葉にマリイはコーヒーカップに口を付けたままピクリと眉を動かします。そして怪訝けげんな顔をロイドに向けるのでした。

「何言ってるの、あのアルカ師匠の村の人間でしょ。

むしろ面接とか一般常識が心配よ」

「いえ……あの僕、本当に体力に自信がなくて」  
そう言いながらロイドは頬をポリポリかきなが  
らうつむき加減になり続けます。

「ここ来るのに六日もかかりましたし」  
マリーは何言っているんだこの子はと即座に思  
いました。あの最果ての村から馬車や汽車を乗り  
繋いで六日で王都に来た……そのことと体力に一  
体何の関連性があるのだらうと。

（ハハハ、まさか徒歩で六日とかそんなバカな話  
——）

笑いながらコーヒーをすすろうとした瞬間、



「ありうるっつ!!」

褐色のコーヒーが容赦なく飛び散りました。それを拭きもせず、まさかという顔で念のためにマリーはロイドに聞いたただします。

「……汽車の話よね？」

「え？ 走ってですけど？ そうですよね……六日じゃ遅いほうですよね……うちのじいちゃんなら二日で十分って言っていましたし」

沈黙が部屋を支配します。

「いやいやいやいや！ ロイド君！ あなた強いわよ！」

「あ……励ましてくれてありがとうございます

……根性だけはあるって言われていきますけど、自分の体力のなさは自分が知っていますから……」

マリーは冗談言っただけじゃないわよといった顔でロイドを覗き込みますが、当の本人は変わらぬ純粹無垢な困り顔のままでした。情報も扱っていい手前、マリーにはそれがウソかホントかを見抜く自信がありました。

（ウソはついていないみたい……ってことはマジか……）

人外魔境……コンロンの村から出てきた村一番の優男……かの村を基準にしたとあっては常識など雲散霧消してしまいます。

確かめるように……いえ、悟さとすようにマリーは質問を続けました。

「でもここに来る道中、モンスターとかに会わなかったかしら？ あそこから来たら結構ヤバイモンスターもいるはずだけど？ あれ倒せたら相当な力の持ち主よ」

「いえ、運がよかったのかモンスターには一度も出会いませんでした」

「……そう」

「でも動物には沢山出会いました。大きなイナゴとか火を噴ふくトカゲとか」

「それモンスター！ しかもヤバイ奴！」

その言葉を聞いてロイドは冗談ですよねと笑いながら返します。

「アハハ。いくら僕でもモンスターと動物の区別くらいは付きますよ。モンスターってアレですよ。

『世界を我が物に』なんて言いながら第二第三形態とか色々変形する……」

なんかとんでもない背筋が凍<sup>こお</sup>る話を聞いてマリ―は脱力しその場にへたり込むのでした。

（ちよつと！　なんでこんな奴を王都に送り込んできたロリババア！　とんでもない代物送ってきて！）

常識について、モンスターについて、説教でも

かましてやりたいところですがロイドは純粹無垢な好青年です。本当に弱いと思いついでいるのかと思うと、責めるに責められずどうしたもんかともマリーは頭を抱かかえました。

「僕の特技と言ったら家事くらいです……あ、掃除そうじは村一番って言われていきますね」

「ああ掃除ね……何？ 敵の始末とか？ 侵入者の死体の処理とか？」

「敵？ 処理？ いえ、普通の掃除ですけど」  
その反応に「そう言われてみれば」とマリーは台所のほうに視線を向けます。思い起こせばそこもプチイーストサイドと名乗れるほど空き缶と空

き瓶びんと調合薬のカスやらで埋め尽くされていたはずでした。

しかしなんとということでしょう、ロイドの手によって台所は陽の光をまばゆく反射させるほどの輝きを取り戻していました。

（気弱で家庭的な優しい少年……あの師匠が気にかけるのも無理ないわ、モロタイプじゃない）

タイプの件はひとまず置いて、マリーは素直に「すごいわね」と口にしめます。その言葉を聞きロイドは「そんなことないですよ」と謙遜けんそんはしますが満更まんげうでもない御様子です。自信に満ちた表情全開でした。



「えへへ。実はこれ、コツがあるんですよ」

「なになに？ 家庭の知恵つてやつ？」

「多分そんな感じですよ」

マリーは是非ともご教授願いたいとロイドのそばに立ち彼の手元を眺めます。そしてロイドは実演販売のように颯爽と雑巾ざつそつを取り出しました。

「この雑巾にですね」

「うんうん」

「古代ルーン文字で一筆したためてから拭くとさつと汚れが落ちるんです」

「そんな家庭の知恵あるか！」

まさか古代の叡智を家庭の知恵扱いするとはと

思い、マリーは盛大に声を荒あつらげました。それに驚いたロイドはいつもの自信なさげな顔に逆戻りです。

「だ、ダメですか」

「ダメじゃないけどダメでしょー！」

言い放った後、マリーは壁に頭を打ち据え始めるのでした。

（しかもさーそれさー『解かい呪じゆ』のルーン文字じゃない……あたしはそれを習得するために何年もあのアルカ師匠の下で頑がん張ばって使えるようになったっていうのに！）

大工仕事をしているかのように壁にゴンゴン頭

を打ち据えているマリ―にロイドは無意識に追い打ちをかけます。

「なんか知らないんですが、なんかの副作用でなんか汚れもホコリも一緒に落ちるみたいで」

「なんかかって！ あたしの努力をなんかかって！」  
混乱しきりのマリ―は涙を浮かべ壁にもたれかかりました。もしこの時ロイドが約三か月でこの古代ルーン文字を習得したと聞かされていたら、きつと頭を打ち据えまくって壁には人間大の穴ができてあがっていたでしょう。

で、ロイドはその様子をどうしたらいいのかと眺め、謝るばかりです。

「ごめんなさい……大したことないですよね……  
あとは雨を降らせる魔法ぐらいしか……」

壁に人間大の穴が空きました。

「——やっぱりあの村の人間ね……常識ってなんだっ  
け……」

ロイドが魔女の雑貨屋に居候いそくろうすることになって  
から早数日が経ちました。

雑貨屋……とは言っても商品が並んでいるわけ  
でもなく、お客は近所の顔なじみがお喋りしたり  
するついでに薬をもらっていく、なんて場合がほ  
とんどです。

というわけでお店は基本的に開店休業です。マリリー一人でまわるのでロイドは専ら掃除や洗濯といった家事や買い物などに従事していました。王都でもいいお嫁さんっぷりですね。

さして、ロイドが買い物に出かけたある日のことです。マリリーの店に近所の大工の棟梁が来ていました。

「うっし終わったぞマリリーちゃん」

彼はシワだらけの細腕から繰り出される熟練の槌捌きで、壁に空いた穴の修理をあっという間に終え、道具を片付け始めているところでした。マリリーは笑顔で労います。

「ありがとね棟梁」

「いいってことよ、マリーちゃんにや女房の薬を何度かタダでもらってっからな。こんぐらいサービスだ。しかし一体なんでこんな穴空いたんだ？何かぶつけたか？」

「アハハ……そんなことよりお茶淹れたから少し休んでいってよ。もう年なんだから」

棟梁は「すまねえな」と椅子に腰かけると、一気にお茶を飲み干しました。

「うめえ！ 久しぶりだなあお茶。最近ちやは茶ばつ葉ばも高くなつちまったからな白湯さゆばかりだよ」

「そうよね、値上がりする前にたくさん買い置き



しててラッキーだったわ。でも一体どうしちゃったのかしら？」

嗜好品しこうや食品などの物価が最近じわじわ上がってきていることにマリーは小首をかしげます。

その傍かたわらでお茶を飲み干した棟梁は口の滑りがよくなったのか色々と話し出しました。

「いやー聞いた話によるとな、商人がよく通る西の街道が落盤事故とかあつて封鎖されちまつたよ  
うなんだ」

棟梁が言うには何日か前に商業用の街道が崖崩れで通るのが困難になつていそうです。

「あの道封鎖されたら馬車は遠回りすることにな

るわね」

「それだけじゃねーんだ。中央の街道に迂回<sup>うかい</sup>してもよ、そつちじゃ最近はいナゴみてーなモンスタ―が活発で、商売になんねーみたいだ。だから今は街じゃジオウ帝国の産物が多く出回ってるそう  
だ」

「だからか……そりゃ割高にもなるわね」

近年、仲のよろしくないこの国の北に位置するジオウ帝国からの輸入品です。足元を見られて高く売りつけられても仕方のないことでしょう。

「んだからよ、街の人間はジオウ帝国が街道を爆破したんじゃないかと噂してるな。もしかしたら

モンスターも連中が仕向けてるんじゃないかって……この前なんか町中にもでっけえイナゴが出たんだ。数年前じゃ考えられねえ、お国の警備は何やってんだって話だ」

「……ホントお国の考えることはわからないわね」  
まるで実感のこもったかのようにマリィは相槌あいづちを打つとお茶に口をつけます。

「……ってなわけであザミの商人の間じゃ戦争を望んでる奴が増えてきているそうだ……戦争したがってる王様の後押しになりそうだな……いやだねえ戦争なんざ」

弁士のように喋り倒す棟梁の前で、マリィはこ

の偶然にしてはできすぎている一連の流れに疑問を抱いている御様子です。

（落盤事故とモンスターに戦争……本当にジオウ帝国の仕業なのかしら？）

マリーが顎に手を当てて考えている間も棟梁の王家への不満は止まりません。

「まったく王家はロクなことしやがらねー、イーストサイドの治安ほっぼってるしよ。中央区の王様の銅像知ってっか？ あの実物の小太りこぶととは別人みてーなモデル体型の奴、あんなの作る暇あったら警備に金回せってんだ」

「それは同意ね、まるで別人だもの」

「加えて王女様は数年前から行方不明。どうなるんだかこの国は……ってマリリーちゃんに愚痴ぐち言ってもしようがねえな、ハハハ」

そして棟梁が「また何かあったら呼べよ」と手を振って店を出ていこうとしたその時です。古めかしい扉が軽快に開くと純朴そうな少年——ロイドが荷物を抱えて帰ってきました。

「ただいま戻りました！ あれ？ 大工さんじゃないですか？ どうしたんですか？」

大きめのズタ袋を床に下ろすと、これまた律儀に手を前にしてお辞儀します。

「お、少年。いや何、マリリーちゃんに頼まれて壁

を修理してたんだよ、タダでな」

「た、タダですか？ いいんですか？」

驚くロイドに対し棟梁が得意げに手のひらで鼻をこすこすり上げます。

「へっ、こんな修理、朝飯前のこんこんちきよ！  
あとなんつつてもマリーちゃんにや世話になつてっからよ。俺らみてえな貧乏人に薬分けてくれるんだ。まさに救いの神！ イーストサイドの救世主よ！ マリーちゃんの英雄譚えいゆうたんはいつか大陸中を駆け抜けるぜ！」

「救世主……やっぱマリーさんはいい人なんです  
ね」



真<sup>ま</sup>っ赤<sup>か</sup>にして声を荒らげます。

「ちよ！ 棟梁！ 私は大したことしてないっての！ 代わりに情報とかもらっているしギブアンドテイクじゃない！ 救世主でもなければ大陸中を駆け抜けません！」

その反応を見て陽気に笑いながら棟梁は店を後にします。なんとも小<sup>こ</sup>っ恥<sup>ば</sup>ずかしい状況を誤<sup>ご</sup>魔<sup>ま</sup>化<sup>か</sup>すようにマリ―は咳払いをします。

「コホン！ もう……で、ロイド君、ちゃんとお買い物できたのかしら？」

まるで姉のような口ぶりでマリ―は尋ねます。

それもそのはずです。彼女はコンロン村という  
異端<sup>いたん</sup>中の異端な所からやってきたロイドに少しづ  
つ常識に慣れてもらおうために買い出しをさせてい  
たのです。

（ま、物損事故くらいなら許容範囲ね。人身事故  
が起こったたらロリババア呼びつけて回復魔法でも  
させようかしら……たしか死人以外なら完全に回  
復できるとか言っていたものね……今思い出して  
もドン引きだわ死人以外って）

彼女をよそに、ロイドは実に爽<sup>さわ</sup>やかな笑顔で買  
い物の成果を見せます。

「あ、はい。えっとスリコギに乳鉢と小麦粉……あ、

あと、えへへ、お土産みやげです！」

「お土産？」

彼が床に置いた先程からやたら目を引くズタ袋の口を広げると、そこには大量の茶葉が詰め込まれていました……色艶のいいひと目で高級品とわかる格調高い香りのする代物でした。

お土産というには余りにも大きすぎる……加えて値上がったとつい先刻話題に上がったお茶を訝いぶかしげに眺めた後、マリーはロイドに問います。

「……なんぞこれ」

「あ、西の山を越えた所の農家の方からもらったお茶っ葉です。お礼だつて」

（あれ？ 西つて今崖崩れで大変なんじゃ……）

マリリーの頭にはまずなんのお礼かより、そんな渦中の農家の人が気前よく渡すはずがないと考えます。詐欺か何か……疑心に溢れた顔でマリリーは問います。

「ほんとに西の農家の人がこのアザミ王国に来ていたの？」

マリリーの質問にきよとんとしながらロイドは答えます。

「え？ 来ていませんよ」

「はい？」

なんとも繋がらない会話にロイドはあっけらかんとした

まま、とんでもないことを口走ります。

「ですから西の農家の人からもらったんです。山二つほど越えた村に買い物に行っただすね。小麦を安く買うために。その途中で——」

「……………やまふたつ？ え？ そんな遠くにいったの？」

「え？ やだなあ歩いて行ける距離じゃないですか、それに買い出しって普通そのくらいの距離の村に行きますよね」

ガンツ！ と、マリーはせっかく直した壁に頭を打ち据えます。奇しくも棟梁が頑丈に作ってくれたので傷一つ付きませんでした。付いたのはマ

リーのおでこのほうです。

匠たくみの技が光る一方、頭を打って涙目の光るマリ―は悶々もんもんと頭の中でツツコミを展開します。（確かに国内で買えなんてひと言も言っていないけど！）

―ちなみに、コンロンの村では買い出しというのは山三つか四つ越えた先の村で物資を購入するのがあたりまえでした。一般人なら何日もかかる行程を件の村人らは小一時間で済ませてもらいます。

さて「買い出しとはなんぞや」という哲学じみたことで頭を痛めるマリ―にロイドはさらに追



打ちをかけます。

「いやーなんかその途中道路が混んでいました。どうやら崖崩れのせいで道が塞ふさがっていたみたいで、とりあえず岩を全部取り除いて端に寄せておいたんですが……そしたら業者の人が『神様じゃあ』なんて言ってお礼につて摘つみたてのお茶っ葉をもらったんです。小麦粉もほとんどタダで購入しましたし……神様なんて大げさですよね」

「……ウンマアネ」

「端に寄せるだけで僕なんか一時間もかかちやいましてし……村長だったら修復魔法で一瞬で戻せますし……都会の人つてお世辞せじ上手ですね」

マリーは頭を押さえながら、とりあえず「次は国内でお買い物してね」と伝えようとしています。

「ロイド君……色々言いたいことがあるんだけど、まずー」

それを勘違いしたのかロイドは慌てて頭を下げるのでした。

「ご、ゴメンナサイ！ 余ったお金お小遣いにしていいって言われたからって、ちよっともらいすぎですよね……」

「あの、言いたいことはそうじゃなくて」

「本当は返金しなきゃいけないんですけど……その浮かせたお金使っちゃったんです……」

レなんですが」

申し訳なさをそうにロイドは懐から細工の施された雅なブローチを出しました。琥珀色のべつ甲でその周りに銀の装飾がふんだんに使われておりひと目で高価とわかる代物でした。

「どしたのコレ？」

「あ、プレゼントです」

「誰への？」

「マリーさんへのです」

しばし沈黙しマジマジとブローチを眺めた後マリーはもう一度問います。

「誰への？」

「だからマリーさんです。タダで泊めてもらっていますし、正直家事だけじゃこの恩は返せないと思いますして」

他意のない、やんわりとした表情でブローチを差し出す彼に対し、照れながらマリーはそれをぶつきらぼうに「アリガト」と言っけて受け取りました。

(……やっぱ早急に常識を知ってもらわないとね、国外に買い出しもそうだけど……あんまり他意なく女の子にこんなプレゼントしちゃダメってこととか)

内心すごく喜んでいる自分に辟易へきえきしながら、マリーはいそいそとブローチを胸元に付け、鏡を見

やります。改めて見ても値の張るであろう代物です。  
「……コレ、結構なモノよね、イミテーションじやないでしょうし」

「ああそれはですね、道中運河の水量が減って大きな船が使えないと嘆いていた貿易商の人がいたんです。その人のために雨を降らせたらかなり喜んでいました。『是非ウチの最高品質の物をもらつてくれ』なんて言われちゃいました……タダは気が引けるので浮かせたお金全部で購入したんです」  
（お使いしたただけでこの国のインフラ問題を打開した！）

買い出しするだけでこの国の経済状態を回復す

るロイドにマリーは頭を振りながら「これだからコンロンの村人はツ！」とへたり込むのでした。そしてロイドの買い出しは国だけでなく一人の女の子の運命も救うことになるのでした。

その女の子、地方貴族のセレン・ヘムアエンという少女は今、王都の安宿で試験当日まで過ごしていました。イーストサイド寄りのその宿は簡易宿舎のような作りになっていて客層も仮眠するだけの行商人などが大半です。

長期滞在には欠片かけらも向かない所ですが事情のある彼女には干渉が少ないほうが好都合でした。ボ



ロイ部屋もその心配がないだけでお釣りの出るくらい居心地のいい空間でした。

ただ問題が一点、素泊まりなので食事が出ないという点を除けば……大抵こういう宿屋には共同の台所があり食材を持ち合わせ作ることが可能です。

しかし彼女は料理をしたことがありませんでした。加えて道中、干<sup>ほ</sup>し飯<sup>いい</sup>などを湯戻しすらせず水と一緒に胃に流し込むような食生活を送ってきたため腹の虫は限界に達していたのです。

そして彼女はフードを目いっぱい目深にかぶると腹の虫にせつつかれながら重い足取りで市場へ

と向かうのでした。

サウスサイドの昼下がりに、冒険者や行商人、観光客が行き交い買い物をする光景、その喧騒けんそうと活気に包まれた市場にセレンは圧倒されました。どこを見ても人、人、人でめまいすら覚えるほどでした。

「これなら夜に来ればよかったですわね」

軽い後悔をするも腹の虫は「そんなもん知ったこつちゃない」とうなり続けます。そこそこ大きなお腹の音も喧騒と雑踏に消えていくのでした。

セレンはお腹に手を当てながら目ぼしい露店を探し出します。が、膨大な店の数に目移りしながら

ら人波に流され思うように選べません。

「……ハア……ハア」

何もしていかないのに旅路より疲れたセレンは肩で息をし始めます。そんな折、後ろのほうから香味油のいい香りが漂ってきました。

振り返るとそこにはカリッと揚げられた鳥肉の揚げ物が売っていました。他にも山菜や小ぶりの川魚が露店の大皿に盛られています。道行く人はその香りに誘われて紙に包まれた揚げ物を購入しては塩を振りその場でかぶりついていました。

何日も温かい食事<sup>なまつば</sup>にありつけなかつたセレンは生唾<sup>なまつば</sup>を飲み込みます。

ここで普通の人なら何の考えもなしに露店に足を運ぶのでしようがセレンは買い食いには疎おろか買い物すら満足にしたことがありません。十分な所持金を持っていてるのですが色々不安になつて財布の中身を確認したりします。

「……むう」

そして他人の購入する仕草をフードの隙間から何度も確認し、頭の中でシミュレーションし始めるのです。初めておしゃれな美容院に入る前の挙動不信感に似ていますね。

しばらくしてお客さんの流れも途切れ、余裕をもつて購入できる絶好の機会と一歩踏み出した矢

先でした。

「すいません。少々よろしいでしょうか」  
肩に手を置かれセレンは声のするほうに振り向ききました。

そこには深緑の制服にアザミ王国の紋章を縫い付けた軍人が二人、硬い笑顔で会釈えしやくします。

逡巡しゆんじゆんするセレンに軍人は事務的に話しかけます。

「失礼ですが身分証など拝見させてもらってもよろしいでしょうか……最近、建国祭が近づいてきたせいか不審な輩やからが増えてきました……他国の工員だの街にモンスターを手引きしている輩もいるとかで……」

つらつらと語り出す軍人にセレンは察しました。  
「……私を不逞ふていの輩と？」

確かにこんな青葉香る暖かい春先にフードを  
目深まぶかにかぶった人間が挙動不審にしているのです  
から、自覚のあるセレンはため息をつきました。  
しびれを切らせたのか、事務的な軍人の後ろに  
いるもう片方が、やや強めな口調でセレンに問い  
詰めます。

「そんなあからさまな格好して疑うなと言おうほう  
が無理がある、後ろめたいことがなければ先まずは  
フードを取ってもらおうか」

軍人がフードに手をかけようとした時、セレン



はその手を振り払うとフードの隙間から顔を覗かせ睨み付けます。

彼女の顔面に巻かれていたのは血のようなシミの付いた禍々まがまがしい革のベルトでした。

乱雑に巻き付けた顔の隙間から落ちくぼんだ目で睨まれ、軍人は震えた声を漏らします。

「……べ、ベルト姫」

「中部地方の？ 軍人志願してきたのは本当だったのか……」

幽霊か何かを見た時のような声音、セレンはそれが不快でたまりませんでした。ギリツと歯をきしませさらに強い嫌悪を乗せた視線を注ぎます。

その視線にさらに動揺する軍人に今度は周囲が何事かと騒さわめき始めました。「ベルト姫」の単語も聞きつけたのでしようか、好奇の視線がフード越しにも感じられます。

「……………」

いたたまれなくなったセレンはその場から立ち去ります。軍人の制止も聞かず、人通りのないほうへと。

後ろめたい人間そのままの行動に対し忌々いまいましげに独りひと言ごちます。

「……………何も悪いことはしていませんのに……………まるで悪党ですわね……………」

——『呪われたベルト姫』と人々は彼女のことを口にします。

もちろんセレンのことです。彼女の生まれは大  
陸中央の豪商で俗に言う貴族でした。

青々とした肥沃ひよくな大地と起伏の小さい緩やかな  
地形、さらには大陸一の運河に面したその地方は  
大きな戦争が終わり、各国で交易が盛んになると  
瞬またたく間に栄え、この大陸の通商の要となるのには  
さほど時間はかかりませんでした。

そんな物流の盛んな地に珍しい物は集まるもの  
で、彼女の父親は交渉の材料に、自己顕示欲のた  
めにと東西のあらゆる珍品を収集するのが趣味で

した。

その趣味が娘――セレンの人生を大きく狂くるわせることとなります。

セレンが四歳のころ、父の宝物庫で戯れに『呪いのベルト』と呼ばれる太古の装飾品を手にしてしまったのが悲劇でした。

宝物庫の石扉が開いているのを見て、家の者が駆け付けた頃には顔中をベルトでがんじがらめに巻き付けたセレンが部屋の中央で泣いていたそうです。

父親はあらゆる手段を用いベルトを外そうとしました。しかし一向に外れません。

高名な僧侶、東洋の商人、王都一の学者……誰も彼もさじを投げました。

そして月日が経つにつれ、初めは同情の眼で見  
ていた周りの人間もいつしか忌むべきものを見る  
ような眼へと変わっていったのです。

大きくなっても外れない血のような赤いシミの  
ある革のベルト、片目が塞がっているため目つき  
も次第に悪くなり髪の毛もとても綺麗なブロンド  
が古びた家屋のヒビ割れから生える雑草のように  
ベルトの隙間から伸びてきます。

いつしか彼女自身も周囲の目に耐え切れなくな  
り、部屋にこもるようになりました。

そして彼女は高名な僧侶の言っていた「呪いに打ち勝てる相応の力を持つてばいつしか呪いを解くことはできる」、その言葉にすがるように日々鍛錬たんれんをはじめたのです。

来る日も来る日も部屋の中で汗水たらして体を鍛え、運ばれてくる食事を食らってはまた鍛錬、髪が伸びたらハサミでちぎり容姿も気にかげずひたすら鍛錬―気が付けば彼女の体は並の戦士では太刀打ちできないうものへと変わりました。

色白で透き通った肌に似合わぬ鍛え抜かれた体つき、ベルトのせいでミイラのような頭部、すべてを恨うらんだような暗い目つき……

その姿を見ていつしか世間は畏<sup>い</sup>怖<sup>ふ</sup>を込め『呪われたベルト姫』と口にするようになるのです。

彼女は十五歳を迎えても一向に外れぬベルトに辟易した頃王都から軍人募集の打診を受けそれを了承し、今に至るのでした――

好奇の視線にいたたまれなくなつた彼女は隙を見て一目散に逃げ出します。

「――ま、待て！」

呪いを解くために鍛え上げた体はしなやかな猫のように裏路地を駆け上がります。そしていくつもの細い路地を通り別の開けた通りにたどり着きました。



もう一度フードを目深にかぶり直すと、セレンは今度は両手でお腹を押さええます。

「また体力を使っってしまったわ……流石に……何か食事を……」

先ほどの鳥肉が頭をよぎってしまったすっかり口の中が揚げ物になってしまったセレンは似たような露店を求めまた練り歩き始めました。

そしてようやく串揚げの露店を発見したセレン、しかしやはり勝手がわからないので念のために買い物客を物陰から観察します。今度は軍人に気取られないよう、距離を取り、数十メートル先の柱の陰で完全に息を潜めて。

しばらくしてテント地のズボンに麻のシャツと  
いった少年がその串揚げ店の前に現れました。

「揚げたてもらっついていいですか？ 何かお勧めあ  
つたら教えてください」

「あいよ！ 今日はいいい鳥の胸肉を使っているか  
らよお！ ささみ揚げがいいぞー！」

「あ、じゃあそれ一本……あ、いえ……二本で」  
「食うねえ兄ちゃん！ ちよつと待ってな、すぐ  
揚げるからよ！」

店主は手際よく揚げた鳥の串揚げに荒めの塩を  
振って差し出します。少年はにこやかにお金を払  
うとそれを両手に持ちました。

その様子を見てセレンは独り言ちます。

「買い方は先ほどのお店と変わりませんのね。いえ、私が少し気にしすぎーッ！」

「あ、コレいります？」

自分の無知さに嘆息するセレンの前にいつの間にか先ほどの少年が立っっていました。

いきなり声をかけられて彼女は身をこわばらせます。それを気にしたのか少年はやわらかい口調で話し出しました。

「ああ急にすみません。お店で買い物している時ずっと見ていましたよね？ それでもしかして欲しいのかな？　なんて」

「……気付かれていた？ 気配を消していたのに」  
セレンは訝し気な声です。それもそうでしょう、  
念入りに距離を取り気配を消し物陰に潜んでいた  
というのに……アザミ王国までの道中何度かモン  
スターをやり過ごした経験もあって気配を消すこ  
とには自信がありました。  
加えて、警戒していた自分に気取られることな  
く眼前まで距離を詰められたのですから……そん  
な「何者？」と逡巡する彼女に対し、のほほんと  
少年は言葉を続けます。  
「あはは、ご冗談を。木こりじやあるまいし気配  
を消す必要なんて」

（木こりが気配を消す必要性はないと思うのだけ  
ど……）

そう思うのも無理はありません。なんせ木こり  
という名の高級狩人かりうどの類たぐいですし。

頓珍漢とんちんかんな物言いにフードの下で眉根を寄せせるセ  
レンです。その戸惑いを感じたのか少年は少し申  
し訳なさそうな顔をしました。

「あ、もしかして僕、変に気を使っちゃいました？

だとしたらゴメンナサ……」

ぐぎゆう！

少年が言い終わる前に、セレンの腹の虫が雄おた  
けびを上げました。

「……っ！　こ、これはその……」

弁明するセレンに少年は無言でにこやかに串揚げを差し出します。

食欲をそそる衣と肉汁の香り。ほどよく振られた絶妙な塩加減。空腹。抗<sup>あらが</sup>うすべなし。

顔を伏せながらセレンはその串揚げを手にとったのでした。

「わかります。僕も初めての買い物時は無作法がないかとか色々気にしてました。田舎じゃ物々交換が基本ですし……でも都会だから気負わなく普通にしていればいいそうですよ。受け売りです

けど」

「そ、そうですね？ 私普通に自信がなくて……」

「少なくともドワーフ集落の職人さんたちのように少しでも気に障さわったら斧おのが飛んでくるようなことはないみたいです」

串揚げを頬張ほおばりながら少年は自身の体験談を語り始めます。

（ドワーフなんておとぎ話の種族のことを言ったり、木こりが気配を消すのがうまいとか言ったり、きつと冗談で私の緊張をほぐそうとしてくれていきますのね）

実際は冗談でも何もなく、彼は自身の経験をよ



かれと思つて話していました。背の低いドワーフには目線を合わせて交渉することが誠意だとかエルフには鉄を使った装備は極力身に付けないほうがいいとか……そんな親切心のこもったレクチャ―は無駄知識どころか都市伝説に近い内容です。今で言うなら「口裂け女に出会ったら飴あめを投げつける」と舐めだすからその隙に逃げろ」みたいな会話内容です。

セレンは最初こそ訝し気に聞いていましたが端々はしはしから感じる少年の気使いに次第に心を許していくのでした。ぺろりと串揚げを平らげた後、恥ずかしげに彼女は少年にお礼を言います。

「その、すみません……私ほとんど買い物したことがなくて……助かりました」

懐から財布を取り出していくらか出そうとするセレンに少年はにこやかに断ります。

「いえいえ大丈夫ですよ」

「そんなわけには」

「むしろあなたのお買い物物の練習を邪魔しちやっ  
たみたいですよ……そうだ！ だったらそのお金使っ  
てあのお店で串揚げ買ってきてくださいよ」

「え、あ、練習ではなくて……」

「不安なのはわかります。だから自信もって。ち  
ゃんと後ろで見てあげますから」

なし崩し的に買い物の練習を促されたセレン。しかし不思議と悪い気はしませんでした。

（後ろで見ててくださる……ね）

こんな風に自然な感じで話しかけてもらったのも久しぶりです。むずがゆい気持ちのまま、コクンと首を縦に振ると小走りで先ほどの店に向かいました。

（お返しに何本か多めに買いましよう……いえ別のお店でもつと違う物のほうが……）

色々想像を張り巡らせるセレン。

しかしその視線の先に先刻の軍人が辺りを見回しながら人波を掻き分けていました。

きつと自分を探しているのだろう、セレンはすぐさま感づくとも眼光鋭く逃げ道を模索します。その時、ふと後ろにいる少年が目に入ります。彼はやんわりとした物腰で優しくセレンを見守っています。

（……もしここで私の醜<sup>みにく</sup>いベルトまみれの顔のことを……あの少年に知られてしまったら）あの柔らかな笑みが嫌悪感に塗り替えられる想像にセレンは耐え切れませんでした。

「……いたぞ！」  
その逡巡で隙が生じたのか、軍人に見つかってしまいます。

「マズいですわね」

あの少年と別れるのは辛い、でも自分のことが  
バレてしまふのはもっと辛い、そう思ったセレン  
は少年のほうを名残惜しげに一瞥すると全力で逃  
げ出しました。

待て！ という制止も瞬く間に後ろへ消えてい  
くほど一目散に、いちもくさん全力で、後ろ髪を引かれる思い  
を振り切るように彼女は細路地へ駆け込みます。

一步一步を大きくスライドさせて跳躍するよう  
に路地へまた路地へ身を潜めるように隠れるよう  
にセレンは逃げ出します。自分自身の呪いに対す  
る後ろめたさを暗示しているかのように入り組ん

だ場所へと彼女は迷い込みました。

「……………ツ、ハア……………ハア……………逃げ出せたのはいいですが……………どう帰ろうかしら……………」

土地勘などなく、もはやイーストサイドなのかサウスサイドなのかもわかりません。

建物の隙間、風化したゴミの類や雑草の生え方から察するにおそらくイーストサイド、そう考えたセレンがどう帰ろうかと考えていた矢先でした。

その隙間に真新しい何か生臭いものがあります。おそらく誰かが放置した生ゴミか何かだろう、口元を押さえ立ち去ろうとした時その生ゴミに突然何かが覆いかぶさりました。



極彩色の薄羽をはためかせ嬉しそうにイナゴが顎でその生ゴミの塊をむさぼっています。それだけでも嫌な光景なのですがなによりおぞましいのはそのイナゴの巨軀でした。

成人男性の身長ほどある高さ、全長はおそらく四メートルにも及ぶでしょう。そんなイナゴが建物の際間から這い出してきたのです。

生ゴミの正体はおそらく野犬か何か、無残に食いちぎられたその肉片はかろうじて動物の皮だけがわかるくらいでした。

そのイナゴはセレンを見たたん、建物の壁を削りながらこちらへと身をよじらせ這い出てき



ます。一瞬思考の制止した彼女は距離を取ることができませんでした。

「虫？ いえ？ モンスター？」

先ほどの軍人が口走っていたことを思い返します。すぐさま腰元のレイピアを手に取り鞘さやから抜こうとします。

「ギイイ！」

威嚇音いかくと共に距離を詰めるイナゴは刀身をすべて抜く前にセレンに肉薄してきました。

万事休す、セレンの脳裏に諦めがよぎった次の瞬間でした。

細路地の上空から何かが飛来します。

覆いかぶさった影にイナゴは気を取られます。そして。

「よいしょ」

ぐしゃりとその硬い体をひしゃげさせイナゴは明後日<sup>あさって</sup>の方向に顎を向けました。力なくその顎を所在なげにギイギイとうごめかします。

上から降ってきた――先刻の柔らかな笑みが印象的な少年は、はみ出した極彩色の薄羽を搦<sup>つか</sup>んでゴミを隅に寄せるように無造作に放り投げました。

ズズン――

虫と思えない重量感のある音を細路地に響かせ、イナゴは足を折り曲げ息絶えました。

セレンからしてみたら目を疑うような光景でした。細い路地で動きにくい状況であの得体の知れないモンスターと戦う……危機的状況に死すら頭によぎっていたのですから。

そんな覚悟をあざ笑うが如く、モンスターを軽々と踏み付け吹き飛ばす少年、開いた口が塞がらないまま少年の背中をただただ眺め、地面にへたり込みました。

「大丈夫ですか？ お怪我は？」

少年はまるで何事もなかったかのように言いながら、柔和な笑みで手を差し伸べます。

「え、ええ」

伸ばした少年の手を取ったセレンは、その鍛え上げた戦士とは程遠い自然な肉付き、日々の生活で培った<sup>つちか</sup>であろう自然な筋肉……とてもあのモンスターを倒したと思えないと驚きを隠せませんでした。

その少年はその自然な体つき、物腰、表情、すべてに裏のない雰囲気纏いセレンの身を案じているのです。

「あり、がと、ございます」

「ちよつと初めての買い物でパニックになっちゃって逃げちゃったんですね？ 心配しないでください、斧なんて投げてきませんから」

そう言うのと少年は彼女の肩をポンポンと叩き「大丈夫ですよ」と声をかけ服に付いた泥を払い始めました。

動揺し、されるがままになっていたセレン。そのため不覚にも彼の手がフードを外すのを止めることができませんでした。

「あ、ああ！」

現れたのは件の<sup>くだん</sup>がんじがらめの顔です。慌てて彼女はフードを被り直し縮こまるように下を向き震え<sup>ふる</sup>ます。

(……また不気味がられる)

「あの……」

しかしロイドは不気味がるところかそのままも  
う一度フードを外すと変わらぬ笑みのまま赤子を  
あやすように優しく頬ほおを拭き出します。

「顔にも泥、付いていますよ」  
セレンはこの顔を見てもまだ変わらぬ笑みを浮  
かべたままのロイドに呆ほうけてしまいます。

「うーん都会ってこんなファッションが流は行やって  
いるのかな？ ……よくわからないなあ」  
みなさんも海外のファッションショー等を見てくだ  
さい、きつと同じ気持ちに浸れますよ。

さて少年がぼそりと口にした疑問もセレンの真  
っ赤になった耳には入ってきませんでした。

しばらくして呆けていたセレンが我に返ると今度は赤くなっただであるう顔を隠すためにフードをぎゅつと目深にかぶります。

そして上目遣いで少年を視線で追いました。彼は何かを思い出したようで少し慌てています。

「あ、帰って夕飯の準備しなくちゃ！ すいません。急いで帰ります」

と言葉を残し去って行こうとしました。セレンは慌てて名乗ります。

「あの！ 私はっ！ セレンとっりますー！」

「あ、ご丁寧ていねいにどうも。僕ロイドとっります。それじゃ」



少年……ロイドはそう言い残すとフリーラン選  
手よろしく階段を駆け上がるように建物の壁を蹴  
り上がりながら姿を消してしまいました。

「……………」

セレンは彼の去った後、頬に触れた感触を確か  
めながらしばらく惚ほうけていたのです。

その日の夜、セレンは買い出し品を抱え、宿場  
へと向かっていました。

フードを目深にかぶっている彼女の纏う雰囲気  
は数時間前では考えられないくらいとても軽やか  
で、通りを歩く足取りもどこことなくダンスのステ

ツプを思わせませます。調子に乗って買い込みすぎた商品も苦もなく持ち運んでいました。

それもそうでしょう、彼女の頭の中にはあの自然な笑みを携<sup>たぐ</sup>えたロイドのことがずっとリフレインされているのです。

（王都にいればきつといつか会えますわね……）

そう思うと彼女の顔はほころびます。ベルトで締め付けられたがんどじがらめの顔はほころんでもただ軋<sup>き</sup>み歪<sup>ゆが</sup>むだけの異様なものでした。そして、それすら見ても変わらぬ眼<sup>まな</sup>差<sup>ざ</sup>しを向けてくれたロイドに思いを馳<sup>は</sup>せてしまうのは無理からぬことです。今までなら――

「——あん？ けっ、噂うわさは本当だったみたいだな  
……ベルト姫が軍人志願するって話はよ」

そう、こんな風にまるでお化ばけでも見たかのよ  
うにベルト姫と言われ続けたからです。彼女の和なご  
やかな雰囲気が一転して抜き差しならぬ剣けん呑のんな雰  
囲気へと変わります。

大きく見開いた片目でセレンは声の主を探りま  
す。その先には腰に戦せん斧ぷを携えた二メートルに届  
かんとする筋きん骨こつ隆り々の男が彼女を見下していまし  
た。

その体たい軀いくと荒っぽい言動に反して身なりはとて  
も整っていて上流階級の雰囲気を漂わせています。

セレンはその身なりと装飾品から記憶をたどりま  
す。

（リドカイン家……地方の貴族……武勲ぶくで名を馳  
せたところね）

それだけ確認するとセレンは面倒事はゴメンと  
興味をなくしたそぶりを見せ歩み出します。

「オイ、無視してんじやねーぞ。てめえがどんだ  
け地方貴族の評判下げていると思ってるんだ」

（そんな話聞き飽きたわ）

自身の怪談かいだんめいた話が尾ひれを付けて広まっ  
ているのをセレンは知っていました。そしてそれが  
地方貴族全体のイメージ低下に繋がっていること

も。

「気味の悪い女だぜクソ！」

リドカイン家の男は悪態をつくと苛立ちを隠さず食堂の明かりの中へ消えて行きました。

そんな言葉もごまんと聞いたわ、とセレンは独り言ち、数秒後にはまたさっきの少年との出会いのシーンを思い出して悦えつに浸っていました。

宿につき、ベルトの隙間からツタのように伸びるブロンドを見ては驚く店員を気にも留めずセレンは部屋へと早々に引きこもります。

そして泥の付いたフードや軽装などを外しまた眺めては思いを馳せます。

「あの方の払ってくれた服………」  
「あっそ思い出として洗わずにとっっておこうかとも考えましたがせめて顔はこんなでも綺麗な身なりでと思い直し桶おけに水を張り衣類を浸します。そんな彼女は、ふと鏡に映った下着姿になった自分を見て物思いにふけるのでした。  
白い下着だけを纏まとった白い肌……肌は白くとも幼少期から不本意にいじめ続けた肉体は色白さに似合わずとても引き締まり、石膏像せっこうぞうを彷彿ほうふつとさせます。加えてその体にまるでとって付けたかのよううに据えられた、赤いシミの付いたベルトが巻かれた頭部。

大昔は見るのもつらかったこの姿ですが今ではもう何の感慨も湧わきません。別人を見るように眺めるだけです。

——ただ今日は違いました。少年、ロイドの一件で少し心境が変わり大きく見開いた片目を見ながら「化粧けしやうでもしようかしらと」寂しく独り言ちていました。

無駄かもしれないという葛藤かつとうが顔のベルトのよ  
うに彼女の胸を締め付けます。

「こんなベルトがなければ……」  
ベルトを伝つたうようにゆっくりと涙がこぼれ落ち  
ました。



今しがた生まれた淡い想いも、思い描いた未来も、この肌に吸い付いて離れないベルトのせいで叶わないのです。

久しく思い出すことのなかつた「悲しい」という感情……これが本当の恋だつたんだと気が付き、また涙を流します。

ひとしきり泣いた後、乾いた瞳でベルトを睨み付けたセレンは憤りいきどおをぶつけるようベルトを引き剥はがそうとします。

皮膚ひふが剥はがれてもいい。

半なかばヤケクソな衝動で外そうと試みました。

震えるほど指を喰くい込ませ歯を軋ませながらべ

ルトに手をかけます。

しかし彼女の顔に巻き付けられたベルトは石のように固く彼女の顔を締め付け続けるのです。

——いつもだったら、そうなるだけのはずでした。するりと、ベルトが解ほどけます。

「え？」

セレンの口からは短いひと言が漏れるだけでした。

そして数分固まっていた彼女はまた思い出したかのようにベルトを外し始めます。

何の抵抗も見せずすると解けるベルト、そこから先はプレゼントの包装を剥がす子供のよう

に無我夢中でベルトを引っぺがしていきます。

「う……そ」

すべてののべルトが外れ鏡に映る自分の顔。十数年ぶりに出会う自分の顔は赤の他人を見ている錯覚にとらわれます。

鏡の中にはブロンドの髪の毛を携えた美女といつても過言ではない顔立ちの少女が映っているではありませんか。確かめるように頬を手で触ると目の前の美少女もまた同じ仕草を見せました。

「私……なの？」

鏡に映る少女はセレンと同じ言葉で口を動かします。それを見た彼女の目から涙が溢れてきました。

「私だー」

泣き崩れるセレン、思い浮かべるのはあの少年の顔と昔牧師に言われた言葉です。

『強き者の力でその呪いは解ける』

自然に少年が触れてくれた頬を指でなぞります。

「あの人だ」

自分の体を抱きながらもう一度つぶやきます。

「運命の人だ……」

## 第二章 たとえば羊の品評会に狼を出すような所業

そんなこんなで試験当日です。

アザミ王国のお膝元<sup>ひざもと</sup>、城下中央広場の国王の銅像は観光客に人気のスポットで連日その銅像を見に多くの人が訪れています……ただほんのちよつと王様の銅像はスリムかつイケメンに作られていてるので現地の人には『王家の見栄<sup>みえ</sup>の塊』なんて揶揄<sup>やゆ</sup>されていますが。

そんないつも旅行客で賑わっている銅像の視線の先には、あきらかに観光気分とは言い難い剣呑な雰囲気の人で溢れていました。

いずれも腕に覚えのありそうな連中ですが、その身なりには多少ばらつきがあり豪華な装飾や軽装に身を包んでいる者もいれば使い古された胸当てのみの野盗のような者と多種多様のごった返しです。

そのごった煮な人の群れを城の一室から遠巻きに二人の軍人が見えています。片方は若くは見えるがどこか老成したような落ち着いた雰囲気を漂わせる銀髪で頬の切り傷が目につく男の将校、もう

片方は打って変わって年齢の割に落ち着きのない少女のような茶髪の女性将校です。

女性将校はこの人ばかりを見て珍しい動物を見た観光客のようにはしゃぎながら男のほうに声をかけます。軍服を着ていなかっただら観光に来た女子中等生と思われても仕方ないくらいです。

「いやー今年は例年にならないくらい色々な奴でござつた返しとるなあメルトファン」

西方訛なまりの軽妙なしゃべり口よくようで話された男の将校、メルトファンは対照的に抑揚よくようの少ない、何か報告書を読み上げているような事務的な語り口で言葉を返します。



「——この国の平和の為だ、身分など二の次、実力なくしては何も始まらん。違うかコリン」  
コリンと呼ばれた女性将校は息つく間もなく答えます。

「まー違わんけどな、甘ったれた貴族様より一旗揚げてやろうっちゅう農民のほうが根性あるもんやし……おお！」

会話の途中で何かを見つけたのかコリンは「あれ見てみい」とメルトファンの肩をバシバシ叩きます。そして志願者の中に一際大きい男を指さしました。

「あれ地方貴族の武勲ぶくんで名を馳はせたりドカイン家

の長男、アラン・トイン・リドカインやないか？  
いくつもの大会を総なめにしたっちゅう」  
その男アランはコリンだけでなくその周囲から  
も一目を置かれていますらしく「おいあれ……」な  
んて声が波紋のように広がっています。街で有名  
人を目撃した時によく見る光景ですね。

メルトフアンは抑揚のない声で言葉を返します。  
「彼は非常に功名心こうみょうの強い男でな、将校にすぐな  
れるなら軍に志願すると即決したよ」

「ほんま？　なんかいかにも貴族って感じやな  
……実力は折り紙付きやけどなんかすかんわ」

「上昇志向も突き詰めれば強い意志だ。この国の

為になるなら何の問題もない」

あくまで事務的な態度を変えないメルトファンにコリンは大げさに首を振ります。

「気合入ってんのはわかるけど……いくら平和の為いつでもアレはやりすぎやないか？」

コリンがアレと指さしたその先には露出の高い服に身を包んだ、目付きの悪い長身ちようしん瘦軀そうくの女性が道のへりに座り込んでいました。始終ニヤついたり笑みをへばりつかせ自身の片腕……おそらく義手であろう機械仕掛けの腕でなにやら手記に書き込んでいます。

そこだけ避さけるようにスペースが空いているの

で余計目立っていました。そしてただ避けられて  
いるのはどうやら不<sup>ぶ</sup>気味<sup>き</sup>な義手<sup>み</sup>のせいだけではな  
いようです。

「リホ・フラビン……別名『<sup>せきわん</sup>隻腕<sup>ようへい</sup>の女傭兵』、フラ  
ビン地方出身の悪名<sup>あくみよう</sup>高い女傭兵で確か気に食わな  
い雇<sup>たい</sup>い主<sup>い</sup>への暴行や国境侵犯、その他もろもろで  
逮捕<sup>たいほ</sup>状が出ているはずやで」

「奴の本質は傭兵だ。ちゃんと取引したので問題  
はない」

「どんな取引したん？」

「軍に入れば逮捕状は取り消すと言っている」

「それはそれは……気合入りまくりやん……あり

や？」

コリンは不思議そうに広場を見渡します。どうやらお目当ての人物がいないようです。

「どうした」

「あゝいやな。こんだけ人おつても噂うわさの『ベルト姫』が見当たらん思つてな」

「ああ、呪のろいを解とくため十年以上部屋にこもつて鍛たんれん錬し続けた噂うわさのな」

「目撃情報は結構上がったたから見てみたかったんやけど……しゃーないなあ」

コリンはそう言うと言手を後ろに回し「つまんな」と言いながらこの場を後にしようとしています。

「どこへ行く」

「試験の準備や。魔法系の筆記担当やねん。ほなな」

「……早く行け……もういないか……あいつは自由すぎる」

メルトファンはそう独り言ちるとまた志願者たち  
に視線を戻すのでした。

その時、急に大きなどよめきが立ち込めます。

視線をどよめきのほうに向けると、まるでモ  
セの奇跡のように人垣が割れ、中から見目麗しい  
女性が姿を見せました。ブロンドの髪を短く整え  
気品のある顔立ちではありませんがどこか陰を漂わ

せる……不思議な魅力のある女性です。そして顔立ち以上に気になるのは――

「鍛え込んでいるな」

メルトファンも思わず唸うなりました。軽装で身を包んでいますが、ナイスバディとは少し毛色の違うボンキュツボンな胸囲、くびれ、臀部でんぶが見て取れます。しなやかに駆け抜けることができ、猫のような印象です。腰元には赤いシミのある奇妙な革のベルトがまともであって……彼はそのベルトを見てハツとします。

「もしや『ベルト姫』……セレン・ヘムアエンなのか？」



そのメルトファンの独白に共鳴するかのよう  
に広場の大男―アランが声を上げます。

「てめえもしかして『ベルト姫』か？」

彼の一声が広場に波紋を呼び、「あれが」や「噂  
の……」といった声が伝播でんぱしました。

「……」

アランの問いかけにも、周囲の好奇の目にもこ  
の美人は何の反応も示しません。その覚えのある  
態度に彼は舌打ちをします。

「チツ……その舐なめくさった態度、間違いいねえ。  
んだよベルト外せんじゃね―か、オマケに美人と  
きたもんだ」

「……だからなんでしよう」

透き通るような冷めた声音<sup>こわね</sup>。それがアランの神経をさらに逆撫<sup>さかな</sup>でた模様です。

「ああ！ ざけんなよ！ てめえの奇<sup>き</sup>っ怪<sup>かい</sup>じみた格好のせいで『地方貴族は変人だらけ』なんて面白<sup>おもしろ</sup>がつて尾ひれの付いた噂が広まってる。まっとうな格好できんならハナからそうしてるってんだ」

アランはズイと近寄り睨<sup>にら</sup>み付けます。

「俺<sup>おれ</sup>の出世に響くだろーが」

遠巻きにその一連のやりとりを見ていたメルトファンは顎<sup>あご</sup>に手を当て思案します。

（実力ともに申し分ないが少々跳ねっ返りがすぎるな……ま、あの程度なら修正可能だが）

冷静に今後について考えているメルトファンで  
すが次の瞬間、

「ーフンツ」

仏頂面ぶつちようづらそのまま鼻水を飛ばしてしまいました。

なかなかの飛距離です。

「ー佇たたずまいヤバくない？」

若干じゃっかんキャラじやない言葉遣いが出てしまうほど

メルトファンは動揺しています。その視線の先には  
ー

「どこか腰下ろせる場所ないかなあ……」

純朴じゆんぽく

そんな麻のシャツの少年が辺りを見回しながら歩いていきます。しかし只者ではありません。歩くたびににじみ出るもさ猛者の纏まとう力……見た目からは考えられない底知れなさに息を呑のみましました。鼻水を放置したままです。

「彼も志願者なのか……なんということだ……彼が国を想う軍人になったら向こう数十年は我が国の軍事力は他国に引けを取らないものになるぞ。仮に今すぐ戦争が始まっても負けようがないくらいだ」

そう思ったメルトファンはこの運命的なめぐり合わせを神に感謝するのでした。鼻水を放置した

ままですが。

その頃、先ほど悪党と称された女傭兵のリホが広場のへりに腰をかけ、アランとセレンのやりとりを含みのある笑<sup>え</sup>みで眺めていました。

「おーいいねえ威勢があつて」

そう独り言ちた彼女は二人の実力を瞬時に見抜きます。

(<sup>おの</sup>斧使いのほうは強い<sup>しあいこうしや</sup>つちや強いけど『試合巧者』<sup>しあいこうしや</sup>って感じ

だな。一対一はよくても戦争に向かないかも……噂のベルト姫のほうは鍛え込んでるけど実戦はほとんどしていないってところか)

そして手記につらつらと書き加えていきます。  
（どちらにも中部地方の名のある家柄……と。金の  
匂においがするじゃねーか）

彼女、リホ・フラビンはこの場にいる人間を品  
定めしては金づるになるか、利用価値があるかな  
ど事細かに手記に記しているのです。

傭兵として扱いやすい雇用主を探したり組みや  
すい人間を見出すのは彼女の処世術で、幾度とな  
くくぐり抜けてきた死線が見抜く目を培つちかつてきた  
のです。

リホはひと通り品定めを終えたあと手記を閉じ、  
懐に入れ、ゆっくりと息を整えました。

(さて……と……)

手汗をズボンで拭ぬぐいます。

(じゃあ……現実と向き合いますか)

そう勿もつ体たいつけて、リホは恐る恐る視線を隣へと向けました。

「ふう……なんかここだけ空いててやっとな腰を下ろせるよ」

(なんつだこのバケモンは！)

リホの隣に、のほほんとした顔で麻のシャツを着たいかにも貧びん乏ぼうそうな少年が座り始めました。



一見すると普通なのですが――

（見た目じゃわかんねーけど只者じゃない！  
気<sup>け</sup>圧<sup>お</sup>されそうなくらいだぜ！）

今まで彼女が経験したことのない得体の知れない何か。彼女にとって「逃げ出したい」と思ったことは多々あれど「逃げられない」と考えたことは初めてでした。

（このアタシが……動けねーんだ……ちよつと動いたり隙でも見せたら首を吹っ飛ばされてもおかしくない……そんなイメージが浮かんできちまう）  
たとえるならいきなり虎<sup>とら</sup>が隣に座り込んだ心境です。下手に動いてこちらに意識を向けられでも

したら何をされるかわからない状況です。

（やべー……ヤベー……軍舐めてた……こんな奴も来るのかよ）

女傭兵はその顔面に脂汗を十分に滴したたらせ虫のよ  
うに息を潜めていました……が。

「あの……ちよつといいですか？」

虎——ロイドが不意にリホのほうを向きました。

「ひゃい！」

裏返った声を出しながらリホは自慢の義手を前  
に出し、身構えてしまいます。

「……それすごいですね。義手ですか」

刹那せつな、リホはやばいと思います。このように無

骨な義手で身構えてしまっただけは「戦闘の意思有り」と思われても仕方ありません。

（やべー！この先の言葉選びはアタシの人生を左右するぞ！）

即座に義手を後ろに回しぎこちない微笑<sup>ほほえ</sup>みを浮かべながらリホは逡巡<sup>しゅんじゅん</sup>します。

A  
リホ「あ、そうです義手です」

ロイド「ならば痛みなど感じぬな」義手ブチブチ

B

リホ「いえ、生まれつきです」  
ロイド「嘘うそを付け」義手ブチブチ

C

リホ「……」黙秘

ロイド「何か言え」義手ブチブチ

リホの頭の中ではどうあがいても義手を引きちぎられる未来が描かれ、走馬灯がこれでもかというくらい駆け抜けています。

(おわっ……た、人生)

そんな彼女を見たロイドはというと、

「あ、なんかすいません。変なこと聞いちゃって。その義手ちよつとカッコいいなっと思って思っっちゃってっい」

いつもの柔和にゆうわな笑みをリホへと向けます。それがまた心地よさすら感じる笑みなので「悪魔の微笑みってこんななんだな」と彼女を警戒させるに至りました。

彼女の胸中はお構いなしにロイドは言葉を続けます。

「僕、かなり田舎いなかから出てきまして……知ってる人誰もいなくて心細かったんでっい……あ、僕ロイドと言います。ロイド・グランドナです」

「あゝえ……リホ……フラビンです」

ロイドの差し出した手を握らなかつたら死ぬと察したりホは選挙中の政治家のように両手で包むように握手をしてはしきりに頭を下げます。体重はいつでも逃げられるように後ろに預けたままですが。

そんな折、ロイドとリホのなんとも言えない奇妙な空間に割って入ってきたのは『ベルト姫』セレンです。

（な、何だ次は？ 『ベルト姫』かよ！）

彼女はあのモンスターを一撃で倒せるような人物なら軍人、もしくはは軍人志願者か何かかと周り

を探っていたのでした。その勘が大当りしたことと運命の邂逅かいこうにほんのり頬を染め満面の笑みを浮かべます。いつもなら笑うたび聞こえていた顔面を取り巻くベルトの軋きしむ音も、今は聞こえませぬ。そんな事情を知らないリホは新たな来訪者に身構えます。

さあ、幸せの絶頂のような顔つきの彼女はロイドの前に現れるやいなや、かかとを揃そろえ直立不動の姿勢になりなにやら言いたそうにしています——きつと思っただけ先走り言葉を用意していなかつたのでしよう。

「ああロイド様ロイド様ロイド様ロイド様——」



それ以前の問題でした。言語中枢がやられていきます。

ロイドはそんな小声でぶつぶつ言い続ける挙動不審の彼女を見て一瞬小首をかしげますが、感じたことのある気配と背格好といった少ないヒントで「串揚げの人だ」と気が付くといつももの笑みを向けました。

「ああセレンさんですか？　あなたも軍人志願だったんですね」

「はい！　あなたのセレン・ヘムアエンです！」  
あなたのことという枕詞おきぐしにクエスチョンマークを一瞬浮かべるもロイドは気にせず会話を続けていま

した。

（これ、逃げるチャンスじゃないか？）

若干噛み合っていない感じの会話が気になります  
がリホはこの隙に乗りこの場から離れようと四つ  
ん這いになつて逃げ出さんとなりました。

「で、あなたは一体何者ですの？」

が、そうは問屋が卸さないと言わんばかりの夕  
イミングでセレンがリホを呼び止めるのでした。  
目に光の宿っていない……まるで恋敵を見るかの  
ような濁った瞳です。

「――ばっかやろう！ この女あー！」

千載一遇のチャンスを潰されたりホはセレンに

四つん這いのまま睨み付けます。

「ずいぶんロイド様と親しげに喋しゃべっていましたけど……」

「親しげ？ お前の目は節穴か！」

リホはその濁った目を見やり「うわー節穴っぽい」と漏らすのですが、その声を掻かき消すかのようにロイドが間に入ってきてました。

「この人はリホさんといって、さつき会ったばかりでした」

その言葉にセレンはパアッと明るくなります。

「そうなんですの？ それにしては変な感じでしたのでつきり恋敵出現かと……」

（アタシの怯え<sup>おび</sup>をそんな風に捉えてたのか……ん？）

その時、リホはあることを思いつきました。豆電球がピコーンと背景に浮かんでくるかのような「閃<sup>ひらめ</sup>いた！」な表情です。

（地方のお貴族様と田舎もん……どう考えても釣り合わない身分なのに親しげに話しているとは……恐らくこの二人はただならぬ関係）

傍<sup>はた</sup>から見たらこの二人……というか一方的ですが恋人とはいかずともそれに近い関係のように思えます。実際は赤の他人と大差ないと知ったら驚くでしょうが。

（このロイドとやらからは身の毛もよだつほど底知れない力を感じる……しかし親しいベルト姫を介して利用することができれば……）

リホの頭の中で自分がサーカス団の団長になり猛獣使いのセレンに指示しロイドを巧みに使う画が想像できました。そしてへばり付くような嫌な笑みを浮かべます。

（ベルト姫を利用してこの化物ばけものをうまく操縦できればとんでもないでかい山も動かせる、軍なんて小さい仕事についてもお釣りが出るくらい……金の匂いがするじゃねーか！）

人生終了の覚悟から一転して大儲けおおもうのチャンス

が降って湧いたことに、リホは小さくグッとガッツポーズをしました。

一方猛獣扱いのロイドはいつものほわんとした笑みです。

「わー友達でできた……つとまずは試験頑張<sup>がんば</sup>らないと」

一方利用価値アリと目を付けられたセレンは恍惚<sup>こうごつ</sup>とした表情です。

「ロイド様×20」ブツブツ

……様々な思惑の中、士官学校の試験は始まるうとじていました。

雲一つない青空の下で、いくつかのグループに  
わかれ試験は展開されています。特に最近はメル  
トファン大佐の肝いりで大勢の人間が試験を受け  
ているため、試験は流れ作業のように進んでいて  
「次っ」という試験官の勇ましい声があちこちで響  
いています。最初は武術試験のようです。

試験官が無骨な鉄板を幾重にも貼り付けた力力  
シのようなダミーを叩きながら志願者たちに説明  
をします。

「よし、ここにある好きな武器を持ってこのダ  
ミーに斬りかかるんだ。身のこなし、太刀筋たちすじなん  
かを見極めるからな……別に真まつ二ふたつにしても構



わんぞお」

その冗談に受験者から笑いが起こりました。このダミーは鋼鉄の板を重ね合わせた代物。片や使用する武器は安物のブロンズ製、逆立ちしても真っ二つにはできないう。普通なら。

そんなジョークは基準の違うロイドにはわからないようで、「なんか簡単に真っ二つにできそうだけど」という風に小首をかしげながら、なんで笑っていたのか理解でききていない御様子です。

さて、ロイドが試験の順番待ちをしている列の大きく離れた所ではメルトファンが試験の様子を頷きながら眺めています。満足気な御様子です。

「苦勞して掻き集めたかいがあつた……この者たちが愛国の軍人になればいかなる驚異にも太刀打ちできるであろう」

そんな腕を組むメルトファンに物騒な義手をぶら下げたりホが並んでいた列を離れ、ニヤケ顔で近づいてきました。

「………何だ？　今更いまさらやめたいなんて言わない

だらうな隻腕の」

「へっ、じょーだん言わないでくださいよ。今までの悪事を水に流してくれる上にお金がもらえて……ちよつとしたことなら見逃してもらえる。こんなうまい話逃せませんよ」

「なら一体何のようだ」

怪訝けげんそうなメルトファンに対し、リホはのらりくらしりと話を続けます。

「いえね、今回の試験もやたら気合入っていますね。アタシみたいなものに噂のベルト姫、他にも色々ないわ曰く付きやらなにやら募集をかけたんですねえ……」

「この国の未来のためだ」

「へえへえ……そこで質問なんです。サツと控えめにロイドを指さします。」

「アレ、何なんスか？」

「――知らね」

キャラじゃない返しをするメルトファンにたまらずリホが詰め寄りました。

「知らねって何！ あんたがスカウトしたんじゃないの？ あんなヤベーの！」

「だから私も面食らっているのだ！ 多分、私を含めここにいる連中全員束たばになっただけかかっても勝てるかどうか……」

そしてロイドの緊張した顔を見てリホはなんとも言えなくなります。

「パッと見たただの田舎モンの少年なんですけどね……だから逆に怖くて……一瞬自分の勘が鈍にぶったのかと思って聞きに来たんすよ」

そのリホの言葉に合点がいったのかメルトファンはまた事務的な態度に戻ります。

「気になるのもわかるが、私が試験中、一個人に構うことはあってはならん。お前も早く列に戻れ、試験失格になっただけの罪人だぞ」

「へいへい、ま、ロイド君の実力のほどは合格してからっスね」

「随分余裕だな、受かる自信があるのか？」

「それ、スカウトした大佐が言いますか？」

そんな飄々<sup>ひょうひょう</sup>とした態度を見せるリホの後ろから

彼女を呼ぶ試験官の声が聞こえます。

声に誘われ義手をブラブラさせ悠然と試験官に

近寄りました。

「――武器は何にする？　リホ・フラビン」

刀、メイス、斧……木箱の中にぞんざいに突っ込まれた様々な武器を一瞥<sup>いちべつ</sup>するとリホは含み笑いを漏らします。

「何がおかしい？」

「いえね、アタシにそれ聞きますか？　って話ですよ」

そう言うと試験官の鼻先にギイギイとカミキリ虫のような音を立てた義手を突き付けます。

無言の試験官を尻目にリホはダミーへと軽く跳躍すると義手を振り下ろします。

耳障りみみざわな金属の擦こすれる音の後、剥はがれたダミーの鉄板が地面にガラッと落ちました。

「バカな……何枚も鋼を重ね、溶接した代物しろものだぞ」  
リホは驚く試験官を横目で見てニヤリと笑います。

「あいにくアタシの相棒はミスリル製なんでね、  
こんぐらい楽勝ですよ。もし合格したらきつと  
アザミ王国のお役に立ちますぜ……ここだけの話、  
便利なんだけど維持に金がかかってしょうがない  
んですよ。というわけでヨロシク試験官殿」

「……早急に新しいものを持ってこい」  
アピールを終えたりホは意気揚々と次の試験会



場へと向かいました。

「だからロイド君にセレン嬢……アタシの為にきつちり合格してくれよ」

一方少し離れたロイドの列では、彼の前にいた男、武勲で名を馳せたリドカイン家のアランが自慢の腕前を披露していました。

「おりやおりやおりやおりや！ うわりや！」

重量のある両手斧が実に軽々と振るわれあらゆる角度からダミーを切り付けます。その様子を見て周囲からは感嘆の息が漏れるほどです。

「——そこまで！ 次の者！」

「ふん、いい運動になったぜ」

その様子を見たロイドは次のように考えました。  
（そうかわかった！ コレは如何いかにこのダミーを  
倒すことなく素早くリズミカルに連打する試験な  
んだな。それなら合点がいくよー！）

フィギュアスケートばりの芸術点を求められて  
いると勘違いしたロイドは「うわー難しいなあ」と  
身構えてしまいます。

「次！ ロイド・ベラドンナ！」

「あゝふあい！」

噛んでしまったロイドの返事に周囲がくすくす  
と笑いロイドはまたガチガチに体を固くしてしま  
いました。右手と右足を同時に出しちゃうくらい

べ々に緊張しています。

「コホン……武器は？」

「え、あ、た、短刀で」

ロイドは木の箱から小ぶりの短刀を取り出すと慌てて構えます。恐る恐るへっぴり腰でダミーに近づくと、彼に周囲は嘲笑ちようしやうを向けてきました。

（軽く、軽く、壊さないように……かつ……連打、リズミカルに……）

触れたら崩れてしまうものを扱うかのように近づいた後、ロイドは目にも止まらぬ速さで短刀を振ります。

そして本当に目にも止まらぬ速さだったので周

因の受験生は疎か試験官ですら何が起こったのか理解できていません。

数秒後……ダミーはバラバラになってしまいました。重量感のある倒壊音と壮大な土煙がその場を包み込みました。

「「ええー？」「」

騒然とする試験会場。

一方ロイドは「うっそだろオイ」という周囲の反応が大失態を犯した人間に対するものと勘違いしうなだれてしまいます。

（あああああやっちやっただああああ……）

試験官はそのうなだれたロイドとバラバラにな

ったありえないダミーを見て、  
「うむむ……きつとさっきのアランとやらの斬撃ざんげき  
で脆もろくなっていたのだからうな……なんせ『触れる  
前に』バラバラになったからな」  
そう考えるに至り「これまで！　おい！　代わ  
りのダミーを早急に用意しろ」とそのまま流れ作  
業のようにロイドの出番を終わらせたのでした。  
挽回ばんかいがっくりうなだれるロイドは次の筆記試験で  
のでした。

さて、次は筆記試験のお話です。会場では既すでに

終わった答案用紙を試験官が集めていました。

「ん？ 何だ？」

試験官は集めている最中、異様な答案用紙を目<sub>ま</sub>の当たりにして回収の手を止めてしまいます。

「ロイド・ベラドンナ……何だこの回答は」

試験官が注視しているのは『火の魔法を記せ』  
というとても簡単な設問でした。しかしその回答  
はというと全くわからない絵のような文字が羅列  
されていたのです。

「あーわからないから適当にごまかすアレだな。  
単語とかでよくあるなハハハ」

こんな簡単な問題を絵みたいなものを描いて

誤魔化す幼稚な奴はきつとダメだろうなと思うと  
また答案用紙を集め出しました。

——ただその文字が古代人の叡智である『古代ル  
ーン文字』ということはこの試験官も採点する人  
間も知るはずはありませんでした。

筆記の回収が行われている中、隣の部屋では志  
願者の面接が行われておりました。強張った顔の  
ロイドが試験官二名に見られてサウナのごとく玉  
のような汗を額に浮かべています。

「ロイド・ベラドンナ君だね」

「あ、はい。軍人に憧れてこの王都に——」

「コンロン村……聞かない名前だがどこら辺にあ



るのかね？」

「あゝ大陸の端はしっここです」

「端……まあいい、ところで何か特技とかアピールできることはあるかい？」

「え、えっと炊事すいじ、洗濯……あとえっと……あ、雨を降らせることができません」

突飛な発言に試験官は思わず目を丸くします。

「――ハア？」

「そゝそのぐらいです……えっと」

ロイドは席を立ち窓際に歩むとサラサラと木の枠に何かを書き込み空へ飛ばす仕草を見せました。古代ルーン文字を用いた降雨魔法ですが試験官か

らしいたら胡散うさんくさい何かです。彼らは互いの顔を見合わせ苦笑します。

「……よし。えっと、あと数分で空から雨が降ってきます」

「もういいです。お帰りはあちらです」

「あ、ハイ」

ロイドは追い出されるような言葉に肩を落とす。すごすごと部屋を後にするのでした。

「——いかにでしょアレ」

ロイドが去った後、試験官が言葉を漏らすともう片方がうんうんと唸ります。

「雨ってねえ……おや？ でも少し曇ってきてい

ませんか？」

その言葉に、いかんでしよと言った試験官が怪訝けげんな顔で答えます。

「大方田舎者の特技じゃないですかね、天气を、雲の流れを読むのは。それを雨を降らせる特技って言っちやうのはいただけませんか」

「騙だませると思っただんですかね」

「まったくです。そんなことできたら一大事ですよ」

ポツリポツリと雨が降り始めた窓の外を見て、試験官は苦々しげに言い放っていました。

試験終了後、ロイドは肩を落として帰路に着いていました。

「ああ……やっぱ雨なんてたいしたことないんだ……」

雨の中ロイドは駆け抜けます。水たまりを踏み抜いても気にもとめず、自己嫌悪を抱えたまま。はたして彼が自身の強さに気が付く日は来るのでしょうか？

第三章 たとえば事務員の面接に筋骨隆々の男が来たので「スポーツジムと勘違い？」と疑うような心境

そして月日は経ち合格発表の日、ロイドの下宿先『イーストサイドの魔女<sup>まじよ</sup>』マリリーの雑貨屋には近所のおばさんが来店していました。どうやら<sup>けん</sup>腱鞘炎<sup>しやうえん</sup>か何かで肘<sup>ひじ</sup>を痛めているらしくハツカの香<sup>なんこう</sup>軟膏を塗った箇所を時折さすっています。

おばさんは台所で乳鉢<sup>にゆうばち</sup>でコリコリ薬草を調合しているマリリーの背中に向かってお喋り<sup>しゃべり</sup>していました

た。

「――というわけよマリーちゃん。王様の体調はあまり優れていないらしくてほとんど部屋にこもりつきりなんだってさ」

「おばちゃんそれホント？」

「ホントよホント！ お城で奉公しているうちの娘が言うんだから間違いないわよお。あとお偉いさん方が慌ただしいらしくて戦争は秒読みかもつて噂うわさもあるわね」

「あーそれは色んな所で耳にするわ。デマジやないのかな？ 反対意見も多いはずだし」

「そうそう、だから戦争の準備したりしなかつた

りで揉めてるそうよ。最近街道が爆破されたり運河の水がせき止められたりってあるじゃない。それで戦争をする方向だったのが最近一気に解決しちゃったみたいで反対派が盛り返しているそうよ」

「ああ、そうなの……ナンデカシラネー」

その遠因がウチの居候いそうろうとは口が裂けても言えないのでマリーはお茶を濁にごします。

「商人たちも冷静になつて『あれは本当にジオウ帝国のせいかな？ 国が無策なのを誤魔化ごまかしていたのでは』なんて意見も出てきてね。噂じや王様が戦争したがってるから反対派は王女様を擁立ようりつしようと行方ゆくえ不明の王女様を必死になつて探している



とか。その行方不明の原因も戦争するしないのイザコザ……痛<sup>い</sup>たた」

「ほら興奮するから……はい、できたわよおばちゃん」

妙齢の女性特有の機関銃のようなトークに彼女自身の肘が悲鳴を上げました。そのタイミングを見計らいマリーは調合した軟膏を差し出します。

「いっつも悪いね、もらっっちゃって」

「いーのいいの、お城の面白<sup>おもしろ</sup>い話聞かせてもらってるからさ」

「そうかい、んじゃ今度お料理作りすぎたらまた持ってきてあげるからね」

「ん、あんがと」

おばちゃんは軟膏の入った小瓶こびんを受け取ると笑顔で雑貨屋を後にしようとしてしまった。

「……あーそうだそうだ、聞きたいことあったんだけどマリーちゃん」

店を出ようとしたおばちゃんがぐるりとマリーに向き直ります。先ほど以上の笑顔……下世話な話をする時のニンマリとした顔でした。

「あの男の子はマリーちゃんのアレかい？」

ガンガラガツシャン！

「な、なぬお言ってるの！」

マリーは思いがけぬ奇襲に片付けていた乳鉢を

豪快に台所にぶちかましてしまいます。

「いやねえ、いつもなら缶詰に飽きてご飯たかりに来たりしているのに最近来ないから近所の奥様たちは疑問に思ってたのよ……そしたら目撃情報かわんさか出てきてね」

「ち、違います！ 親戚しんせきの子ーあ、そうだ！

あたしは魔女ですよ！ 下僕しもべの一人くらいはいます！ だから料理をやらせたりっ！」

「最近の魔女は下僕の寝癖を丁寧ていねいに直してあげたり、お出かけの際は見えなくなるまで手を振り続けるのかい？」

その情景をフラッシュバックのように思い出し

たマリ―は湯気でも出るんじゃないかと思うくらい顔を真まっ赤かにしました。

「どこまで見てたんですか！　どこで見てたんですか！」

「おっと怖い怖い。じゃあおばちゃんは退散するわね」

おばちゃんはそう言って足早に店を出ていくのでした。

おそろくこのあと奥様連中とこの話をネタにお茶でもするのでしょうか。マリ―は自分の痴態ちたいが鳥の巣に持ち帰られた餌えさのごとくついにばまれることを想像して、また赤面するのでした。

そしてなんといいっても自覚がある分言いつきがでないのです。ついでにやっつけてしまおう過保護な行為を省みて、あのロリババアのことと言えないなあと所在なさに頬ほほを搔かくのでした。

「ぐうう……とにかく落ち着くためにコーヒーを……」

片付けを後回しにしてコーヒーを淹いれ出すマリ。香ばしい香りが辺りを包み始めると次第に彼女も落ち着きを取り戻します。

そして頭の中に浮かべ始めるのは先ほどおばちゃんから聞いたお城の情報です。

（戦争は秒読みだったのか……街道の爆破、川の

せき止め、そしてモンスターの件……すべてがそう仕向けるために繋つながっていたと見たほうがいいわね)

コーヒーを含んだマリーは苦い顔をします。

「――私がもつとしっかりしていればこんなことにはならなかつたのにね……」

「おーいバカマリー！　ワシにもコーヒーちようだーい！」

そして当然のようにひよっこりとクローゼットから現れるツインテールのロリババアししょう師匠、アルカを睨にらんで叫びます。

「こんな師匠と関わらずに済んだのにね！　今日

は何しに来たんですか！」

乱暴にコーヒーを質問とともに差し出します。アルカは椅子いすに座りちんちくりんなあんよを組むとしれつと答えるのでした。

「え？ 今日試験の合格発表じゃろ。ロイドの合格をねぎらって共に喜ぶ流れで抱き締めてチュツチュしようかと」

「ほんと恨うらむわ十歳の頃の私！ こんなダメ人間と関わらせてね」

頭を抱えるマリィをよそにアルカは勝手に砂糖を増し増しにしたコーヒーをすすります。

「ま、仮に落ちてしまったとしてもじゃ……お主



が権力を取り戻せば造作もないことじやろ、のう  
—」  
どこか含みのある言い方のアルカ。ニンマリと  
口の端<sup>はじ</sup>つこを釣り上げた悪くい顔です。

「アザミ王国の失踪<sup>しつそう</sup>した王女様……マリア王女な  
らのお」

それを聞いてマリーは頭を抱えすぎて前衛的な  
ポージングをしてみました。これがこの国の王  
女だと言っても誰も信じないでしょう。眼科と脳  
外科の受診を勧められるのがオチです。

「その為にロイド君を私の所に！」

「まあ……ロイドはいい子じゃ、情が移ってしまうことも目論もくろんでな……しかし……ちと情が移りすぎてるやも知れんがの。フラグが立つ前になんとかしなくては」

アルカの視線が心なしかマリリーのブローチへと向いているようで……マリリーは総毛立ちます。

このままズルズルいったら別のフラグが立つ……そうです頭に『死亡』が付くアレです。そう感じ取った彼女は弁解するように答えるのでした。

「いや、情といっても！ 兄弟的な！ あ、あともう少し待っててください王女として戻るのは。戦

争を引き起こそうとしている絵を描いた黒幕を見つけたら、つづけるまでには！」

「まあそんなことはどうでもいいんじゃない。ロイドのことじゃ、どうじゃあの子は」

そんなこと扱われても「この人は昔からこうだ」と達観しているマリ―は目を細めながらアルカの問いに答えます。

「えー試験当日帰ってきてから元気ないですね……あとー」

「あの子の自己評価の低さも筋金入りさね……あ  
と何じゃ？ ロイドがどうかしたかえ？」

「ロイド君がじゃなくて、綺麗な女の子がロイド君を探し

て色々聞き回っているそうですよ」

「ほう」

「運命の人だとかなんとか」

「……………ほう」

心なしか雑貨屋の店内がひんやりとし始めました。

「あの師匠？」

「……………もしロイドの元気のなさが試験如何いかんではなく恋煩わづらいとしたら」

「あのししよー？」

「決めた！ この国滅ぼす！」

「このバカ師匠！ なんか嫌なことあったら国滅

ぼそうとするのはやめてください！ 大昔はパフエのイチゴの数が絵と違っていたからって滅ぼさうとしていましたよね！」

「ああああ思い出しても腹が立つ！ この国二回分滅ぼす！」

「一回で十分でしょ！ いや一回でもダメだけど！ やめんかこのロリババア！」

アザミ王国が何度も滅亡の危機に立たされ、その都度マリーに助けられていることを国民は知らないほうがいいでしょうね。

恐ろしい女と人は彼女のことをそう評します。

リホ・フラビンのことです。彼女は『せきわん隻腕の女傭兵』と呼ばれるほど名の通った傭兵で、下着と見まごう服に身を包んだスレンダーな体つきと性悪さを隠しもしない三白眼さんぱくがん、そして瘦軀そうくに似合わぬごつい義手が目を引く近寄りがたいオーラを放つ女性です。

彼女はその義手をぶら下げては今日に至るまで金になることはなんでもこなしてきたそうです。また性格も難アリで金に意地汚い上に気分屋なところがあるので通行料を払わないやら気に入らない雇い主に反抗し怪我を負わすなどトラブルが絶えず、それが積もりに積もってお尋ね者の域にま

でなつてしまつたそうです。

そんな彼女はその罪をチャラにすることをダシにされ、今では士官学校の学生へと相成りました。ま、無論それに留まるつもりは毛頭なく、同期や上官から金づるを探し今後利用してやろうかと考えていたのです。

合格発表当日、大門の前の立て看板には大勢の志願者たちが群がっていました。

リホは当然のように自分の番号を見つけては周囲の畏<sup>い</sup>怖<sup>ふ</sup>の視線をもものともせず合格者の集う大きな講義室へと入っていきます。そして適当に空いている席に座るとスラリとした足を投げ出し周囲



を見回します。

（大抵目を付けた奴らは受かっているみたいだな  
……ヨシヨシ）

手記が無駄にならずに済みそうだと考えている時、やたらキョロキョロしているセレンが目飛び込んできました。

例のベルト姫は居心地でも悪いのでしよつか、妙にそわそわしては辺りを見回します。

（あーきつと例の想い人を探しているんだろっかな）  
リホの頭の中にはその想い人、ロイドが浮かび上がりました。

今まで会ったことのないような底知れない何か、

死線をくぐり抜けてきた自分だからわかる圧倒的  
実力……ただ見た目は完全に素朴そぼくな田舎いなかの少年な  
ので自分の勘が鈍にぶったかと錯覚してしまっ  
うほど毒  
気を抜く笑えみを浮かべる少年でした。

リホにとって今後の士官学校生活に銭ぜにの花とい  
う彩りを添える最重要人物です。

（ロイド君がいれば難関クエストやヤバイ仕事も  
軽くこなせるだろうな……尻馬に乗っかるだけで  
も懐が潤うねえ……ん？）

ここで問題が生じました。いくら待ってもその  
ロイドが姿を見せないのです。次第にリホもセレ  
ンと同じようにキョロキョロし始める始末です。

「嘘うそでしよ……」

狼狽うろたえる彼女に後ろから声をかける一人の男が現れます。ハツとして振り向いたその先にいたのは――

「んだよ、隻腕の女傭兵も受かってやがるのか」  
リドカイン家の長男、アランでした。

「――違う」

リホは即座にひと言そう言っではまた辺りを見回します。あまりにひどい扱いを受けたアランは二の句を継ぐことなくリホの前からすごすごと去っていきました。

アランは気を取り直し今度はベルト姫のセレン

に嫌味いやみとともに声をかけます。

「よおベルトー」

「ー違う」

アランは同じような扱いを受け涙目で隅すみつこのほうに座ります。そして時折「違うって何だよお」と机に向かってこぼすのでした。

しばらくして講義室の壇上に先ほど入ってきたぶつちようぶつちう仏頂面のメルトファンと茶髪の映えるかーるいのりのコリンが現れました。

「集まっているようだな」

威厳いげんのある佇まいただずと毅然きぜんとした声音こわねに講義室はピタツと静まります。その様子を見て満足げうたなずに頷

きました。

しかしこのメルトファンも最初こそは落ち着き  
払っていましたが時間が経つにつれ徐々にリホヤ  
セレンのようにキョロキョロし出すのでした。

一向に始まらないガイダンスと仏頂面そのまま  
に拳動不審なメルトファン、彼は扇風機の首振り  
機能のように部屋中を何度も何度も見回します。  
無言で。

「え？ どないしたんメルトファン？」

その後、彼は何度も名簿を眺めてはそんなまさ  
かとぶつくさ言い、まるでメルトファン自身が試  
験に落ちたかのように「そんなはずでは」と連呼

し始めました。

「メルトファン……そろそろ始めんと」

「あー遅刻者はいないか？ トイレ行っている奴は？ つーかこれで全部ツ？」

「あーメルトファン？ キャラちよつと変わってへん？」

「よーし！ いない者は手を挙げてツツツ！」

「メルトファン！ キャラ！ キャラ！」

いつもの事務口調からいきなり天然ポンコツに成り下がった同僚を見て、仕方なしにコリンが仕切り出します。

「えーとりあえずみんな合格おめっどさん」

そんななねぎらいの言葉も遮るかのようにな、いきなり生徒の中から手を挙げ質問を始める者が現れました。

「あの、すいません。ロイドという方は合格ではないのでしうか」

セレンです。彼女は焦燥しよくそうなどのこもった訝いぶかしげな表情で個人的な質問をしてきたのです。

コリンは胸中で「アチャー」と思い彼女に注意を促します。

「おいおいベルト姫ちゃん！ そんな個人的なことをのっけから質問しちやったらメルトファンにどんな修正されるかわかったもんじゃないで」



規律、公平、平和を連呼するメルトファンです。胸中穏やかでないコリンでしたが、

「私もそう思う！ 何かの間違いではないかと！」  
「乗っかりおったこの仏頂面！」

ポンコツに成り果てたメルトファンを見て、別のベクトルに胸中穏やかではなくなります。その壊れた同僚はというと、手にした名簿をコリンに預けるやいなや講義室から出て行こうとします。

「コリン、後を頼む。ちよつと面接官に聞いただけして来る」

「ハア？」

全く状況の掴つかめないコリンをよそにセレンが彼

について行こうとします。

「私も行きます」

「ちよ！ 士官候補生としての大事なガイダンスをサボるんかい？」

そんなんしたらメルトファンに……と思っ彼のほうを見やると、

「ああ！ 一緒に来てくれ！」

まるで同志を歓迎するかのよう親指を立てたメルトファンがそこにいました。コリンの彼を見る目はポンコツを超えた何かです。

「あーアタシも付いてっついていいですかね？」

その流れに乗じリホも同行を申し出ます。セレ

ン嬢と仲良くなること、そして少しでもロイドの情報を得たいがためです。そんなサボタージユ目的とも取れる発言ですが――

「ああ来てくれ、心強い」

まるで盟友を歓迎するかのようなメルトファンでした。顔は相変わらず仏頂面ですが、両手の親指を立てちゃったりなんかして全身で歓迎の意を表している思わずリホも苦笑いです。

（この人こんな感じだったっけ……まあいいか）

そして口をあんぐりさせたコリンをほっぽって、三人は風のように颯爽さつそうと講義室を出て行ったのでした。

さあ、チームロイドの行く先は無論、面接官の所です。大佐と美人学生と女傭兵というアンバランスな組み合わせが肩を並べて行く様子は道行く人々の目を引くには十分でした。

メルトファンは試験当時の資料を引っ張り出してはその名簿から面接官を割り出し、迅速じんそくに対象を連れ出し……

「リホさんは足を持ってください」

「あいよ」

「ちよ、君たちい？　め、メルトファン大佐！

コレはいったい何だ？」

「言い訳なら後でたつぷり聞きますよ」

「ええええ？ なんのことおお？」

……失礼、『拉致』<sup>らち</sup>して空いている講義室へと連れ込みました。人気ひとけのない講義室で鉄面皮てつめんぴのメルトファンが不惑の年齢の男性面接官に壁ドンをするという誰得な光景が広がります。

「あなたがロイド・ベラドンナの面接を担当したそうですね」

面接官の両脇には噂のベルト姫、そして女傭兵……両手に死に花という状況に顔面蒼白そうはくの面接官はガクガクと首を縦に振り肯定の意を示します。

「よろしい……では率直に聞こう……なぜ彼を落

としたのだ？」

「いやあそれはですねぇ、面接で急に変なことを言い出したもんですからあ！」

「もしかして私への愛ですか？」

「はい黙ろうねベルト姫」

「あらごめんなさい、そうね別に変ではないわね相思相愛なのだから……つてなんであなたが？」

「そうつれないこと言うなよセレン嬢。仲良くなろうぜえ」

両脇のボケとツッコミに構うことなくメルトフアンは眼光鋭くしてさらに問いただします。

「変なこと、とは？」

「いえ、特技は？　って聞いたらその……『雨を降らせることです』なんて言い出しまして」

「……………雨？」

チームロイドが同時に眉根を寄せます。一方面接官はというと落ち着きを取り戻し、生気の戻った顔で襟えりを正しました。

「いやあ、私もそんな顔になりましたよメルトフアン大佐」

「でも、実際降りましたわ。わたたくし覚えていますもの」

「ですが田舎の人間は雲の流れを読んで天気を当てるといふじゃないですか。それをあたかも自分



が降らせせたかのように嘘を付こうとしたら面接官として見過ごせませんよ」

完全に落ち着きを取り戻した面接官は職務を全<sup>まっ</sup>うしたという顔でメルトファンを見やります。今度はメルトファンが立場のない顔つきになる番です。

「確かにそんな真似<sup>まね</sup>できたら干<sup>かん</sup>ばつによる不<sup>ま</sup>作もなくなる……しかし彼なら……いやでも雨<sup>あめ</sup>つて、雨<sup>あめ</sup>つて……」

いくらなんでもそんな荒唐無稽<sup>こうとうむけい</sup>なこととはできるとはさすがない。頭を悩ませるメルトファンに今度は面接官が体を入れ替え壁ドンをし返します。完全

に形勢逆転です。誰得な点は欠片も変わっていませんが。

「加えてですね、筆記試験では基本問題の魔法に関する設問で落書きを書いて提出したと聞きました……流石に軍人としてはふさわしくないかと」  
「落書きかあ、そんなこととするタイプには見えな  
いけどな」

リホはあの真面目そうなロイドの顔を思い出してはそうつぶやきます。それは他の二名も同じ考えでした。

「面接官様、よろしければその回答を見せていただけますか。自分の目で確かめたいのです」

「……いいのかねメルトファン大佐」

「申し訳ございません。私も少々気にかかっていました」

「……君らしくもないが……少し待っていてください」

納得いかない顔のまま部屋を出て行って数分後、面接官は一枚の答案用紙を手に戻ってきてきました。それを机の上に広げるとチームロイドの三名はまるで宝地図を前にしたかのように額を突き合わせ覗き込みます。

選択問題は何の滞りもなく丸が付いているようです……が、その下、筆記問題の欄には全く読め

ない文字が羅列されていました。いえ文字というには絵に近く、ひと言で言うのなら――

「落書きだな」

「落書きですわね」

「落書きだねえ」

落書きでした。

「これはその……なんと言ったらいいのか……」

前衛芸術を前にした門外漢のごとく唸<sup>うな</sup>るだけのチームロイド。その時です。後ろから甲<sup>かん</sup>高<sup>だか</sup>い声が響いてきました。

「おいこらーメルトファン！ 何やっとなのやー！」  
仕事を押し付けられたコリンが名簿をぶんぶん

振り回しながら空き講義室に入ってきてくるやいなやメルトフアンの尻を名簿でスパーンと叩きます。

「ぬお！こ、コリンか。その節はどうも」

「ちよっとは頭冷えたかあ？それとも氷魔法か

何かで冷やしたるかコラ！結局ウチが全部やる

ハメになっただやないか……説明不足の部分があつ

ても文句もんく言わさへんで！『規律を大事だいじに』があ

んたのデフォルトかつ不変不動の座右ざいゆうの銘めいなのに

随分おちやめになっただんやなあオウ。今度の休日

パフエでもおごつてもらわにややつてられへんわ

あ！」

「あ、ああすまない」

機関銃のごとくベラベラ喋るコリンに言葉少なに謝罪するメルトファン。その姿を見てコリンは情けないと言わんばかりのため息をつくのでした。

「……ハア。で？ どうやったんそのロイドつちゆう奴は？ 気は済んだんか？ 三バカ」  
セレンがズイと前に出て答案用紙を見せつけます。

「ちよつと筆記で溢れ出す絵心を抑えきれなかつたり、面接で小粋なジョークを言えるほどユニークな人でした。軍に必要な人材としますので早速合格手続きと私と同室での生活を要求します」

「あんだ士官学校をお笑い養成所か何かと勘違い

してへんか？」

「コリン大佐、先ほどの言葉を訂正してください。バカはコイツだけです」

セレンの言動に額を押さえながら三バカ撤回を要求するリホ、そしてメルトファンは冷静に話し出します。

「……正直、面接官の言い分はもっともだった。惜しい人材を落としてしまったと思うがまた別の方法で我が軍に迎え入れられるよう模索してみようと思う」

「——ちよお待って」

「……わかっている。自分でもらしくない入れ込



みようだと思いが彼からはとてつもない可能性を感じたんだ。それはこのリホも……」

「——ちやうちやう！ お前やベルト姫ちゃん！ その回答よー見せて！」

メルトファンの言葉をそっちのけでコリンは答案用紙を奪い取りました。

「ど、どうしたコリン、お前らしくない真面目な顔じゃないか」

そんなメルトファンも意に介さずコリンはその回答にご執心のようです。

「……これ。古代ルーン文字やないか！」

「「古代ルーン文字？」」

三人が同時に声を上げます。

「せや、とつくの昔にすた廃れて今ウチを含めた研究者たちが調べている代物しろもんや。見たことない文字かもしれないんがウチの知ってる文字と共通点がいくつもあるんや……こら間違いないで」

「ふむ、これが例の古代ルーン文字だったのか」  
メルトファンの発言にコリンがギロリと丸い眼を向けます。

「――あんたが研究せい言うたやんか、この国の為とか言っつて！ それを他人事わがごとのようにまあ言っつてのけますなあ！ そういやわがごと労いの言葉の一つももらっつてへんで！」

「す、すまん、私の知っている文字とえらい雰囲気  
気が違つてな」

また喧嘩けんかが始まるのを防ぐようにリホが間に入  
ります。

「まあまあ……で、その『古代ルーン文字』って  
何なんですか？」

「ああー気になつちやう感じい？」

カリスマ店員のように反応したコリンは面接官  
を帰すやいなや、三人を講義室の椅子に座らせ  
教鞭きょうべんを振るい始めました。

「古代ルーン文字なごりつちゆうのはその名残なごりだけをわ  
ずかにとどめとる超古代文明の頃に使われた魔法

形態と言われとるな。一般的に魔法は『詠唱』<sup>えいしょう</sup>や杖や宝珠を使った『媒介』<sup>ばいかい</sup>などがあるけど……」

「すんませーん、搔いつまんでおねがいしまーす」  
もう飽きたと言わんばかりのリホにコリンは咳<sup>せき</sup>払い一つして答えます。

「昔のすげー魔法や」

「あざーす」

「……搔いつまみすぎじゃないのか？」

身も蓋<sup>ふた</sup>もない言い方にメルトファンは呆<sup>あき</sup>れた御様子です。

「ちよいまち、何がすげーのか、この回答使って説明するわな……」

コリンはそう言っただけで答え用紙の落書きを一つ一つ区切り始めたのです。

「ちよつと補足するとな、単語の組み合わせ次第で色んな魔法が使えるんや……この問題は炎の魔法『ファイアーボール』の術式を書けやけど解答欄にはルーン文字で『炎』『球』『放つ』の三単語で書かれていると思うんや……たぶん……『放つ』しか知らんからなんとなくやけど」

「多分とかなんとなくか随分アバウトっスね」  
リホのつぶやきにコリンは「いい質問やな」と満面の笑みで食いついてきました。若干うざく感じ始めるリホですが表情に出ないよう我慢がまんしま

す。一応上官ですから。

「そのなんとなくながキモなんや！ 古代ルーン文字っちゅうのはただ並べるだけじゃあかん！ 発動したい魔法に合わせた雰囲気を醸かもし出して書かないかんのや。これよく見てみい、まるで火の玉が放たれているかのようになっとなるやろ」

「……なるほど、落書きに見えるのはそういう意図があつてのことですのね」

「私が見たものとまるで違うのはそういうことか」  
セレンとメルトファンが頷くのを見届け、コリンは説明を続けます。

「漫画やら小説やらのタイトルを見てみるとその

雰囲気に合った字体で描かれているやろ。それと一緒にや。ただ単語だけ知っていてもそれをイメージさせる雰囲気とそれ相応の魔力が必要になるんじゃないで」

「逆に単語を知っていてイメージさせる字体で書ければなんでもできると」

「究極はな。たとえば『世界』『滅ぼす』『龍』<sup>りゆう</sup>『召喚』の単語を世界を滅ぼす龍を召喚するかのようないメージを想起させる字体で書いてな……」

世界を滅ぼす龍……この突飛な例え話に三人は固唾<sup>かたず</sup>を呑み込んでしまいます。

「この世界を滅ぼせるくらいの魔力を込めれば召



喚でできるっちゆうことや」

「――世界を滅ぼせるほどの魔力があるなら別に古代ルーン文字いらなくないすか」

呑み込んだ固唾を返せと言わんばかりにリホが辛辣しんらつにツツコみます。

「例えばや！ そんな奴おったらとつくの昔に世界は滅んどるわ！」

一方イーストサイドの魔女の家では、

「もういいこの世界滅ぼす！ ロイドがワシを見てくれないなんてこんな世界いらない！」

「ちよま！ ルーン文字そんなもんに使わんでく

ださい！ 早まりすぎです考えすぎです！」  
世界の危機を救う作業が執り行われていました。

「ま、つまりは『古代ルーン文字』は単語と技量と魔力次第で既存の魔法にとらわれないことができるとスゴイモノだった。燃費は悪いけどな」

「コリン大佐は使えるんですか」

その言葉にコリンはバツの悪い顔をしました。

「いやな、使えるっちゃー使えるんやけど時間もかかるし成功率も低いし……普通の魔法唱えたほうが楽なんや。隕石いんせきを降らせる古代ルーン文字を

見つけたたには見つけたんやけど魔力が足りんくて  
唱えられへん……せっかく研究して復活させたの  
になあ、しよんぼりやわ」

シヨボーンとするコリンにリホが素朴な疑問を  
投げかけます。

「なんでわざわざそんな唱えられないもの復活さ  
せたんですの？」

「いや、唱えられる候補がおったんや。魔力に関  
してはこの国一の人材がな」

メルトファンがやや重い口調でコリンの代わり  
に答えました。

「――今、行方不明の王女。マリア・アザミ様だ」

一方イーストサイドの魔女の家では、

「ぶえつきしよーい！」

「ぎゃああ！ 目に！ 目に王女汁が！」

「王女汁って何ですか！ ってすいません！ き

つと誰かが噂して！ わざとじゃー」

「おのれええ！ この世界もろとも消毒じゃああ

あ！」

「やめてええええ！」

世界の危機が加速していました。

「マリア様の魔力量はずば抜けていたのだ、古代

ルーン文字を余裕で扱えるくらいには。そこで我々は来<sup>きた</sup>る戦争の日のために、対ジオウ帝国の切り札として隕石のルーン文字を研究していたのだ。もつとも本人が失踪し計画は頓挫<sup>とんざ</sup>してしまったがな……今頃どこにいるのやら」

窓の外、遠くの空を見やるメルトファン。実際は近くのイーストサイドの雑貨屋で今現在世界の危機と戦っているとは思ってもよらないでしょう。

「とはいえ王女様が戦争の為にえぐい魔法覚えてくれるかは疑問やけどな」

「この国の為だ、きつと首を縦に振ってくれるに違いない……いや……振らせてみせる」

消え入るようなメルトファンの最後の言葉は周りの人間には聞き取れませんでした。

その横でコリンが何かを思い出したかのように手をパンと叩きます。

「おおそやそや！ 王女様で思い出したけど今年もちゃんと候補生たちに伝えといたで」

「……ああ、あれか」

コリンの言葉に少し表情の曇るメルトファン、それをリホは見逃しませんでした。

「あれ？ メルトファン大佐が嫌な顔してますけど」

「おっとあんなら二人にもちゃんと伝えとくで、

ほれ」

その質問を遮るようにコリンが差し出したのは  
わら半紙と一枚の写真でした。

わら半紙にはタイプライターで打たれた堅苦し  
い文面、写真のほうはとても純真そうな十歳くら  
いの女の子が笑顔で高価な椅子に座っている画像  
です。

リホは三白眼を凝らしながら文章のほうに目を  
通し始めます。そして文章を読み終えた後、意外  
そうな声を上げました。

「……行方不明の王女様の捜査依頼だあ？」

「そ、写っているのは今いまなお尚失踪しているアザミ王



国の王女、マリア・アザミ様や。五年前の画像やけどな」

「やんごとなきオーラは感じていたけどよ……いやそれよかなんでそんなでっかい案件ペーパーのアタシらに出すんですか？」

リホの質問にメルトファンが答えます。

「軍部も長い間彼女の行方を追っているのだがなかなか進展がなくてな……数を打てば当たる……という浅はかな考えを上がっているのだよ」

仏頂面のメルトファンですがどこか否定的な感情がにじみ出ていることに対しセレンが質問します。

「メルトファン大佐はあまり乗り気じゃないのですか？」

「ああ、建国祭間近のこの時期、候補生たちの錬度を早急に上げねばならんの……しかも毎年毎年報酬目当てで問題起こす奴が一定数いてだな、尻拭いしりぬぐに奔走ほんそうしたり大変なのだ」

報酬と聞きリホの目がキラリと光ります。そしてその項目を感嘆混じりで読み上げます。

「金一封及び昇進や人事の他……可能な限りの要望に応える！ うっそ、なんて破格の報酬！」  
リホは読み終えた後、ヒュウと感嘆の口笛を一つ鳴らしました。

コリンが胸を張って「すごいやろ！」と威張り張<sup>ば</sup>ります。そしてとなりの仏頂面の「なぜお前が威張る」という視線をシカトしながら得意げに説明を続けるのでした。

「せやで。最近搜索のほうもなあなあになつとるしなあ。やる気のある候補生にニンジンぶら下げたほうがなんぼかマシって考えや。王女様の身に何か起こる前に保護できるとなら安いもんやで」

「最近ジオウ帝国の工作が活発になつて、つて聞きますしねえ。報酬も納得ですな」

合点が言ったりホはいつものニヤケ顔です。頭の中ではロイドの編入に加え金一封とソロバンを

はじき出ししているのです。

「他の候補生たちも早速意気込んどったで。そういや一人かなり発奮しとったな、確かアランやつたかな？」

「入りたての士官候補生たちに頼んだところで焼け石に水だと思いがな……そんなことさせるくらいなら筋トレでもやらせたほうが……セレン・ヘムアエン、リホ・フラビン、お前らも話半分で聞いておけ、ロイドの件は私が色々手を考えてみる」あくまで否定的なメルトファンは上層部に対する嫌味交じりで二人に釘くぎを刺しました。

ですが糠ぬかに釘……セレンはガタリと椅子を倒し

ながらコリンに近づきます。

「つまり王女様を見つげ出せばロイド様を士官学校に編入することも」

「聞こえてないのかセレン・ヘムアエン……」

疲れた声で目頭を押さええるメルトファンを尻目にリホもニヤケ面でコリンに近づくのでした。

「コリン大佐、その話もつと詳しく聞かせてくれ！報酬はどこまでアリなのかとか！」

「リホ・フラビン……お前もか」

「ロイド君の件に加えて金一封、他にお得な副賞が付くって聞いて我慢できませんよ」

リホは更にロイドに恩を売れたらスムーズに事

が運ぶと考えています。乗るしかないこのビツグ  
ウエーブにといった心境です。

「頼むからあまり無茶はするなよ。さつきも言っ  
たように尻拭いは面倒だ……ロイドの編入に関し  
ては不確定な王女探し以外の手を考えておく」

「あああロイド様のために動ける幸せ！　そして  
お礼と称して二人は……ああああ！」

「……タノムカラネ」

ゲツソリするメルトファンの隣ではコリンがに  
っこりと頷きます。

「ええ意気込みや。王女様が見つかったらあんな  
らはウハウハ、ウチはやっと隕石降らせるルーン

文字を実践できてウインウインやね。いやいや正直こんな時間かかるんやったら最初は花を咲かせるとか雨を降らせるルーン文字とか研究するべきやっただわ……早<sup>は</sup>よ試したいわ」

ワクワクするコリンのふと口にした単語に三人が声を揃えて食いつきます。トリオの芸人が如く、息ぴつたりのリアクションです。

「「雨!?!」」

「そそ、それっぽいルーン文字もあってん……そや、そもそもなんでこんな答案用紙に古代ルーン文字が……うむむ」

眉間にしわを寄せ唸り出すコリンをよそに三人



は顔を見合わせます。

「メルトファン大佐……これが事実だとしたら口イド様は合格では？」

「……しかし古代ルーン文字かもしれないなんて突拍子とつぴようしもないことが通るのは難しいだろう……だがこれが事実ならますます手放すわけにはいかないな」

一方リホは顔を伏せ口元をニヤつかせます。

「……こいつは掘り出し物どころかとんでもねえオーパーツだ。雨を確実に降らせる拝み屋なんて引く手数多あまたで金なんざ濡れ手ぬで粟あわだぜ……」

メルトファンもまた仏頂面の裏で固い決心をし

ていました。

「ロイド・ベラドンナ……この者が我が軍に入ればこの国の軍事力がより磐石ばんじやくのものになるはず……必ず彼を……」

そしてセレンは――

「ああロイド様……ルーン文字を駆使してまで合格し、私と添い遂げたかったなんて――」

……好きにしてください。

さてそんなゴタゴタが起きるほんの少し前、ロイドはというと合格発表の立札に自分の番号が書かれていないと知るやいなや、悲喜ひきこもごも交々の輪から

外れ下を向きどこへともなく歩いて行きました。

「わかっていたとはいえ……やっぱこたえるな……」

自分なんか受かるわけがない、そう思っていたロイドでしたがそれでも心のどこかで期待するものがあったのでしよう。

しかし、その淡い想いが打ち砕かれ、力ない笑みで下を向いていました。

そんな彼はこのままマリーの家に帰る気も起きずフラフラと中央区を歩くのでした。

中央区は軍の施設や軍人の寮や彼ら向けの酒場などの店が軒<sup>のき</sup>を連ね、奥のほうではその施設に守

られるかのように王族関係の邸宅ていたくがあり、物々しさと華やかさ、相反する二つのコントラストが街行く者の目を引きまます。

軍人関係者、士官学校の学生、商人や観光者……街行く人の波に流され、あてもなくふらついたロイドが着いた場所は、

「――士官学校のキャンパスか」

士官候補生が集うキャンパスです。普通の大学のように一般開放されているその敷地はところどころベンチがあって緑も生い茂りのんびり過ごすにはいい場所でしょう。

ただロイドにとっては辛いつらい場所です。合格して

いたら自分がそこでゆっくりと友達と一緒に語ら  
っていたかもしれない……そんなタラレバが頭を  
よぎりまた悲しさがこみ上げてきってしまうからで  
す。

「もう帰ろう……ここにいっても悲しいだけだ」  
そう踵きびすを返した時でした。色々な告知やイベン  
トの類たぐいが貼たられている掲示板……その中にあるや  
たら男らしい文字に目を奪われます。

「……募集？ ……食堂のアルバイト？」

実に豪快な字です。下手くそに片足突っ込んで  
いる領域で男らしい文字です。近づいてじっくり  
見てみるとそこには「学生食堂アルバイト募集」

と書かれているではありませんか。

ロイドはその告知を見て、物思いにふけると決意したかのように歩き出しました。道行く人の波を掻き分け、胸を張り、前を見えています。

「――村のみんなゴメン、もうちよつとだけ、ワガママさせてください」

そしてたどり着いた先は「まさに食堂」といった出で立ちでした。カフェテリアでもなくフードコーナーでもなく食堂です。場所が場所でなかったら立ち飲み屋でもおかしくない雰囲気です。あの豪快なバイト募集の文字も頷ける店構えでした。

「定休日……かな？」

店内は静まり返っているようです。確かに今日は合格発表の日、食堂が休みでもおかしくありません。ただこれが営業中でもなんら不思議ではないでしょう。商売繁盛はんじしょうとは無縁な店構えですから。ロイドが扉に手をかけると簡単に開きました。どうやら鍵かぎがかかっていたらしく、誰かいるかと期待して中へと入ります。

「ごめんくださいーい」

足を踏み入れたとたん油ぎった床がヌルリとロイドを歓迎します。外観から容易に想像できる期待を裏切らない食堂です。ゆっくりとカウンター越しに奥を覗いてみます



が誰もいません。やっぱり留守だ今日は諦めて帰ろうかと思った矢先でした。

「誰だ」

恐ろしくドスの効いた声が背後からかけられた刹那、背後から鉄拳てっけんが飛んできました。

「あ、すいません！ 怪あやしい者ではっ！」

動揺しながらもロイドは軽々と鉄拳を躲かわします。かすかに残像が残る俊敏な動きです。本人にとつては大した動きをしたつもりはありませんがその鉄拳を放った男は目を丸くしています。

「何!？」

拳こぶしを突き出した姿のまま立ち尽くしているのは、

やたら四角いガタイの男でした。死線の一つや二つをくぐつていてもおかしくはない風貌……ふうぼう

その男の名は『クロム・モリブデン』。王女のお付で元近衛兵このえだった男です。

無論ロイドがそれを知る由よしはありません。ガタイのいいお店の人か何かだと思っていました。

クロム・モリブデン。かつて王家の近衛兵たちを束ねる近衛兵長として職務に追われる日々を送っていました。

彼は理由あって今現在、食堂の店主という前職とは遠い立場に身を置いているのですがその忠誠

心は失われることがありませんでした。

そんな彼が出先から帰ってきてくると得体の知れない少年が店の中に入りなによりやらキヨロキヨロしているではありませんか。

そしてバイトの可能性を募集をしている本人が失念し、あるうことか殴りかかってしまった理由は、この少年から感じる尋常じやない力でした。

「何だこの男は！」と危険を察知したクロム、躊躇<sup>ためら</sup>うことなく鉄拳を繰り出しました。が、それを軽々避けたのです。ひと筋の汗が彼の頬を伝えます。

クロムは構え直します。角張った体中に押し込

めたかのような筋肉が一層隆起しました。

しかし彼の体は全く動きませんでした。構えたままロイドを、胸中穏やかではないといった表情で見やっっています。

（一体何者だ………この男は！ 思わず本能で殴りかかってしまおうほどの底知れぬ力！ そして相対すると動けなくなるほどの……猛者！）

初手を躲されただけで力量が読めてしまいうくらい差は歴然としています。いくつもの死線をくぐり抜けた彼だからわかるのです。クロムは頬を伝う汗をそのままに考え出します。

（……狙いは何だ？ 元近衛兵の俺から国の情報

でも?)

目の前の少年、ロイドは毒気の抜けた笑みでこちらを見てきます。空恐ろしさすら感じるほど自然な笑みです。

少し探りでも……そう思ってクロムはゆっくりとロイドに話しかけます。

「何か御用で……お客様……」

ロイドは軽く息を整えると落ち着き払った声でゆっくり答えます―先の面接での失敗を生かし、なるべく余裕たっぷりな答えようと彼なりに考えていました。悲しいことにこれが余計クロムを勘違いさせることになるのですが……

「いえ、先ほどアルバイトの募集を見てきまして」  
クロムは一笑に付します。こんなあからさまな嘘は……と。

（一瞬驚いたが、すぐさま落ち着きを取り戻したか……場慣れしてるな……まあいい何が目的か……少し話に付き合っただろう）

クロムは構えを解くことなくジリジリ間を詰め、あくまで余裕のある雰囲気です話しかけます。

「ほう、それはそれは……ちなみにここは食堂なんです、特技は何でしょう？」

ロイドはしばし考えた後、柔和な笑みとともに答えます。

「はい、料理と掃除そうじです」

「料理（殺し）と掃除（始末）ね」

「ええ、手前味噌みそですがウチでは一番って言われていました」

「ウチ（組織）ね」

クロムは曲解しながら「こいつはそう簡単に口を割らんな」と結論付け、腰を落とし臨戦態勢に入りました。入口を背にしている自分のほうが地の利はある。何よりこんな不穏な猛者を野放しにしておくわけにはいかない。元近衛兵の職務だまし魂しいに火が灯ともります。

「では、その腕前を披露していただいても？」



余裕の表情を保ちながら、クロムは不敵に笑います。間合いをジリジリ詰めてお互い手の届く位置へと相成りました。

「ええ……そちらさえよければ……今すぐにでも」  
ロイドもやる気と言わんばかりに袖をそでまくりま  
す。

「なら……見せてもらおうじゃねえかツツツ！」

「リゾットでいいですか？」

「あ、ハイ」

クロムの覚悟を決めた「見せてもらおうじゃねえか」が食堂に響いた瞬間、ロイドは颯爽と厨房

に入り普通に料理を始めました。食材を手を取っては「これ使っていていいですか？」と何度も聞いてくるのでクロムは次第に構えを解いてカウンター席に座ってしまいます。

（なんかフツ―に料理しているぞオイ、一体どう  
いうことだ？）

クロムは構えこそ解きましたが警戒は怠りませ  
ん。そんな彼にロイドが世間話のように話しかけ  
ます。

「実は僕、士官学校の試験に落ちちゃいまして  
……」

「ほう」

嘘だな、とクロムは即座に胸中でつぶやきます。こんな猛者が落ちるわけがない、と。

「それでですね、村のみんなに盛大に送られてそのまま帰るのも申し訳ないんで……もう少しこの王都で頑張<sup>がんば</sup>って来年もう一度試験を受けてみようかと……」

香ばしい香りとともに食欲をそそる音が聞こえてきます。その奥ではロイドが柔らかな笑みのまま自分を語っていました。

クロムは眉根を寄せたまま黙って聞いています。「都会に住んでたら成長するんじゃないかって考え、田舎者の発想かも知れないですけどね」

クロムは眉根を寄せたままですが、ふとあることが頭をよぎりました。

（あれ？　なんかフツ―の田舎の子じゃないか？）  
そしてすぐさまその考えを振り払います。

（いかんいかん！　こんなこと考えては相手の思うツボだ！　あの俊敏な動き！　只者のはずがな  
い！　警戒を怠るな！）

ぐつと拳に力が入るクロムにロイドが話しけ  
ます。

「あ、魚捌さばきたいんでナイフ借りますね」

（ッ！　なるほど！　そういうことか！）

このように世間話で相手を油断させた後、魚を

捌くフリをしてナイフで奇襲！ 実に狡猾こうかつな男だ！ クロムはそう考えました。

「あの？ いいでしょうか？」

「……ああ」

気がついたことがバレぬよう、静かにクロムは頷きました。

（いいだろう！ 貴様が奇襲をかけた瞬間カウntaxーをかます！）

「……ああ、やっぱり都会の魚は牙きばも角もないじやないか、ほらみろじーちゃん」

（なんか変なこと言ってるが動揺するなクロムツ！ 一挙手一投足に集中するんだ！）

クロムは椅子に座りながらも臨戦態勢を保つのでした。

—そして何の滞りもなく料理は完成しました。

「できました。リゾットです」

「あ、ハイ」

「……………」

「……………」

「…………あの、試食のほうを」

「…………え？」

手際よく盛られたトマトの酸味さんみの香る美味おいしそうなリゾットにクロムは動揺します。

（どういうことだ……料理が完成したぞ！）  
肩透かしを食らった顔のクロムにロイドが不安  
そうな顔で覗き込みます。

「あの？ 何か不手際でも……トマトが苦手だと  
か……」

「いやそうではないが……ハッ！」  
次の瞬間クロムはなるほどといった顔つきにな  
ります。

（そうか！ 人間が一番油断するのは飯を食った  
りしている時だ！ こいつはその瞬間を狙ってい  
るのだな！）

そう合点のいった顔になるとスプーンを手に取り



りリゾットを頬張り始めます。眼光鋭くロイドを見つめたままです。

（いいだろう！ 貴様のその手に敢<sup>あ</sup>えて乗ってやろう！ この元王家近衛兵長クロム・モリブデンを甘く見るなよ小僧ツツ！）

—そしてなんの滞りもなく料理を完食しました。

「……………」

「……………」

「……………あの」

「……………え？」

ロイドは動揺した表情を隠せません。おそろく

食事の感想が「美味うまい」「マズイ」ではなく「え？」  
という疑問符だったからでしょう。

一方クロムも動揺した表情を隠せません。何事もなく完食してしまいかもそこそこ美味おいしかったからです。ついにとうとう彼の頭の中にある可能性が浮かび上がりました。

（………え？ 本当にバイトの募集で来た子なの？）

ロイドが顔を覗き込んで不安そうに質問します。

「あの？ お口に合わなかったでしょうか？」

「あ、いや、美味うまかったよ」

その言葉に「よかったあ」と純粹に喜んでいる

ロイドに対して完全に警戒心を解いたクロムです。落ち着いた声音で話しかけます。

「えーとお名前は？」

「あゝすみません！ ロイド・ベラドンナと申します！」

丁寧に頭を下げるロイド少年につられクロムも丁寧に頭を下げました。

「あゝどうも。クロム・モリブデンです」

本当にアルバイト募集の子だと全く考えてなかったクロムはどうしたのかと頭を抱えます。こんな猛者をバイトに雇っていいものか……たえ裏がなくてもこんな危険人物……つーかなんでこ

んな奴落としていているんだ、メルトファンは試験に何を要求しているんだ……と。

色んな思いが駆け巡る彼は「とりあえずこんな猛者はほっとけん、自分の監視下に置いておこう」と決意するのでした。

「あーロイド君といたかな。うん、君を雇うことにするよ」

「あ、ありがとうございます！」

純粹に喜ぶロイドを見てクロムは言葉を付け足します。

「でも住み込みじゃないのでな。君は村から出てきたと言っていたがちゃんと住む場所のアテはあ

るのかね？」

「はい！<sup>いそごころう</sup>居候ですが村長のツテで……食費とか

払えば置いていてももらえらと思うのですが」

嘘をついているようにには思えず改めて「本当にバイトなんだな」と思うクロムです。

「そうか、ちなみに場所はどこだい？」

「あ、イーストサイドの雑貨屋です」

ロイドのその発言を聞いてクロムは顎あごに手を当てました。

（全く……こんなデタラメな子供を平気で預かるなんて、どんなデタラメな奴だ）

そのデタラメな奴こそが、クロムが探している

行方不明の王女、マリアということは今の彼には想像も付かないでしょう。

そして後に、ロイドを介して奇跡の邂逅かいこうを果たすことになることもまた、今の彼が知る由はありませんでした。

一方そのイーストサイドの魔女の家では小一時間ほど「この世界を滅ぼす」と曰のたまうアル力を必死で止めているこの国の王女、マリアこと魔女マリ―がいました。

「ああああああロイドおおおおー！」

「やめんかこのロリババア！ バカ師匠！ 今日

も愛くるしいですね！」

「ちよっとなんじや！ 最後無理やり褒めて

誤<sup>ご</sup>魔<sup>ま</sup>化<sup>か</sup>しても最初の暴言は聞き捨てならんぞ！」

こんな調子を小一時間ほど続け、なんとか世界の危機を救ったマリ―は王女の威厳など欠片<sup>かけら</sup>も感じないくらい股<sup>また</sup>をおっぴろげて床に大の字になつて寝っころがりました。

「ハアハア……ちよっとかもしれないって言っただけじゃないですか」

「ロイドはそんな子じゃないもん！ 最後は村長村長つて私の所に戻ってきてくるんだもん！」

「口調変わっていますよ……全く、そんな目に入



それでも痛みすら快感になるほど溺愛できあいしているのなら、なんでこの国に送り出したんですか。正直コロンロンの村人は軍じゃ持て余しますよ」  
その言葉を聞いたアルカは真剣な面持ちで答えます。

「……マリーには関係ない。ワシの大願成就じょうじゆのためよ」

(あ、絶対しようもないことだ)

マリーの目の前にいるこの女子中等生もどきは、その気になれば国なんてカートン単位で滅ぼせる……地震、雷、火事、アルカと並べても遜色そんしよくのない歩く災害たぐいの類です。そんな彼女に何度も振り回

されていたマリィは悟った目をしていきます。

「その日の気分で山とか盆地に変えられるような人がこれ以上何を求めるんですか？ そんな余裕あつたらこの国救つてくれませんかね割とマジで」マリィは何気ないひと言のつもりでしたがアル力は一笑に付すと久々に師匠らしい威厳のある態度で返します。

「マリィ……何度も言っただと思っただのじゃがワシやコンロンの村の人間が手を出すのはあくまで『魔王』や『厄災』といった人知を超えた時だけじゃよ。人間同士のくだらない面子めんつやらなにやらで生じた戦争とか事件には一切手を出すつもりはないのう」

ちなみにさつき色恋沙汰ざたで世界を滅ぼそうとしていた人の台詞せりふです。

「何度も聞きましたよ、そうやって過ちを犯して反省し後悔し成長することが人間には必要と。そのせいで滅んでしまっても仕方がないとね……だから私は必死であなただから解呪かいじゆのルーン文字を会得えとくしたんですから」

手に刻まれた無数の傷を見て、自分に言い聞かせるようにマリーは言います。

「で？ 進展のほどはいかがかえ？ ——マリア王女様」

「正直厳しいです……おそろく国王……父は操

られていてしょう。そして世論を戦争賛成に向けてるため裏で色々工作している情報も入ってきてました」

「黒幕が動き出したってわけじゃない」

「ええ、そしておそらく建国祭……各国の外交筋や首脳が来るので、その時大々的に宣戦布告をするのではないかと。そこまでは掴みましたが……」

ふむ、と頷きアルカは顎に手を当てます。

「肝心の黒幕の正体がわからんというわけじゃない」

「はい、このまま無理やり城に乗り込んで父を開放したところで黒幕を捕まえなくてはいざれ同じことが起きてしまいます」

マリ―は神妙な顔です。焦燥しやうそうや苛立いらだち、それらを出さないよう拳を握り締めています。

「向こうも警戒してるじゃろうし……信頼できる人間は城の中におらんのかえ？」

「私のお付であったクロム・モリブデンという男がいれば……他の人間は正直どこが黒幕に繋がっているのか見当が付かないので安易に身分はバラせません……そして聞いた話ではクロムも近衛兵をやめてしまったとか」

「状況は劣勢、時間もない、ここが踏ん張りどころじゃな。十五の小娘には荷が重いかの」  
あくまで他人事、といった様子のアルカですが

言葉の端々から気にかけているのがわかります。それを感じているマリ―は一層、神妙な面持ちです。

「はい。ですので明日からバレるのを恐れて近寄らなかつた中央区のほうに足を運ぼうかと思います。正直なりふり構つていられません」  
俯うつむきながらも固い決意を示すマリ―にアル力が口を開きます。いえ、自分に言い聞かせるかのようです。

「これが魔王の仕しわざ業や自然発生しんぜんはっせいの厄災とかだったらワシも手を貸すんじゃないが、国内の権力争いが発端かも知れないんじゃない……敵の懐に侵入する際は色々気を付けるんじゃないぞ」

「ご忠告感謝します」

「忠告ついでじゃ、もしロイドをこの件に関わらせたらあの子を村に連れ戻すからの」

心のどこかがズキンと痛んだことを悟られぬよう、マリーは深々ふかふかと頭を下げます。

「……ご忠告感謝します」

「んでついでにお主をカエルに変えて三日ぐらい放置するからの。案ずるな遺書は書いてある。ほどよく誤字脱字を織り交ぜた死を決意した際のリアリテイ溢れる作品じゃぞ」

「もう忠告でもなんでもないですよ、死の宣告ですよそれ。てか人の遺書を何勝手に作成してい



るんですか！ 文書偽造罪ですよ！」

そんな話をしていている時でした。入口の扉がやけに重々しく開き、奥からロイドが少し複雑な顔で現れました。まるで捨て猫か捨て犬を拾ってきた子供のよような表情です。

「あ、おかえりロイド君ー」

「おっかえりいいい！ ロイドオオオ！ お主の大好きなアルカ村長じゃよっ！」

アルカはロイドの表情の機微たけなど知ったこつちやないという勢いで、思いの丈たけという名の劣情丸出しで彼にダイブをかまします。

「ただい……って村長どうしてここにー！」

「ほらあ（スリスリ）だって（スリスリ）大事なロイドの合格発表の日じゃろお（モフモフ）すっ飛ばんでくるさね（ガジガジ）」

「文字通り瞬間移動ですっ飛ばんできましたよね……大事だったら噛むのは止めましようよ」

ぶっちやけ合格発表関係なしでここ最近ひんばんは頻繁ひんばんに現れてはロイドのことを尋ねられ、あげく食料を漁あさられているのでマリ―にとっては倉庫に住み着いたネズミ同然です。

で、天井の柱の如くかじられ歯形を付けたロイドは恥はずかしいとは少し違った表情でうつむきながらゆっくりと話し出しました。

「あの……ゴメン……落ちちゃった」

しばし間を置いた後アルカは淡々とルーン文字で術式を展開します。

「そう、じゃ、この国滅ぼすかの」

「ちよつとご勘弁ください！ 子供も見ているんですよ！」

「……おつと危ない危ない……小粋なジョークじやよお、二割くらい」

「八割はなんですか！」

「純粋な悪意じゃ」

胃がもたないと言わんばかりとがつくりうなだれるマリ―の背中をロイドはさすりながら言葉を

続けます。

「あの……それでね、ちよつとお話があるんだけど……」

マリリーの背中をさすりながらモジモジするロイドを見てアルカはというと。

「……やはり……女」

真顔でルーン文字を展開し出します。それを見て胃を押さえながらマリリーが必死に食い止めんとします。

「勘弁！ マジ勘弁！ 変顔でも土下座どげざでもしますから！ 後生だからそれだけはツツツ！」

ちなみに一国の王女の発言です。そしてその突

飛な会話のやりとりが一段落したのを見計らい口  
イドが間に入ります。

「えっとあのね、ワガママかも知れないんだけど  
来年の試験も受けさせてほしいんだ……」

その言葉にアルカはいかにも村長のような威厳  
をもつて答えます。

「やっぱりのお、ワシにはすべてわかっていたぞ  
ロイドや」

「ひでー嘘つきもいたもんだ……」  
しれっとした態度のアルカを忌々いまいましげにマリー  
は見つめます。

「ーそれで厚かましいかも知れないんだけど……」

村に帰らずもう少しマリーさんの雑貨屋に住まわせてほしいんだ。もっと都会のことも知りたいたいし……このままじゃ村のみんなに合わせる顔がないよ……ああちゃんとお金は払います！ バイトも見つけてきたんです！」

「——カエツテコナイノカエ？」

「動揺しないでください師匠、すべてわかっていたんですよね」

放心状態のアルカをよそにロイドはマリーに向き直り深々と頭を下げます。

「お願いしますマリーさん！」

「ん、ま、私は全然いいんだけどさ」

マリーはその真摯しんしな態度のロイドに少し頬を染め、まんざらではない顔で答えます。が、すぐさま嫌な予感がしてこめかみを押さえました。

（このロリババアがよからぬことを勘ぐって猛反対するんじゃないか）

アルカのことです。下手したら「恋が芽生える前にお前の命を摘み取る！」と言い出しかねません。すぐさま変顔で土下座の体勢に入り怒りを静めんとするマリーでしたがアルカは意外にも冷静でした。

「しようがない……許してあげるかの」

その言葉にロイドはパツと明るい表情になります



す。そしてマリィは怪訝な表情でボソリと漏らすのでした。

「……………明日は隕石降るかもね」

「ん？ 降らせてやろうか？ この国一帯に」

「勘弁してくださいませえ」

颯爽と土下座をするマリィですがアルカは彼女をひよいと持ち上げると部屋の隅へと連れ出して耳元で囁ささやきます。

「と、いうわけじゃ。とつとと事件解決してとつとと王女に戻ってとつとと権威を使ってロイドを士官学校に入学させるのじゃハリィハリィ」

「できたら苦労しません！ てかなんでそこまで

してロイド君を軍人にしたががるんですか！」

「ワシが聞きたいのはイエスという返事だけじゃが……またちよつとした不幸になる呪いかけられないのかえ？ それとも久しぶりにカエルにでもしてやろうかの」

「イエス！ イエー！ カエルだけは勘弁してください！」

その無様な姿を見てアルカはにっこりと悪魔の笑みを浮かべました。

「わかった、じゃあちよつとした不幸の呪いのほうで勘弁してやろうかの」

「ちよつとロリババア！ 二択だったなんて聞い

てないわよ！」

アルカはフールに不服なサッカー選手のように詰め寄ろうとするマリィをガン無視です。

「おっとそろそろ仕事の時間じゃ……村の者にどやされてしまうのでな……ま、ちよくちよく呪いをかけられたくなかったら早めに手を打つんじゃないーロイド！ また来るからの！」

そう言い残し颯爽とクローゼットに入る悪魔の背を呆然と眺めた後、マリィはため息をついて思考を巡らせませす。

一方許可が下り、<sup>うれ</sup>嬉しさのあまり新婚さんのごとく鼻歌を歌いながら台所に立つロイドの姿を眺

め、胃のあたりをさすりながら彼女が考え付いたことは、

「……とりあえず胃薬ね、考えるのはその後にしよう」

自身の胃粘膜の保護でした。薬棚から油紙の包みを取り出すと文句を言いながら開きます。

「ちくしょう……今度変なことしたらあの瞬間移動のゲートになる水晶を井戸にでも沈めてやろうかしら」

ぶつくさ言うマリィは胃薬を口に放った瞬間、気管支に薬を詰まらせてしまいます。

「ブゲホブゲホ！」

そしてむせた勢いで足の小指を机にぶつけてしま  
まい豪快に転んでしまいました。その転倒音に何  
事かと台所のロイドが振り向きまます。

「マリーさん？　どうかし……」

ほどなくしてローブの中身を全開にして見せつ  
ける痴女ちじよの図ができあがったのでした。首元まで  
めくれ上がって大きな胸まで露あらわにし『お医者さ  
んの聴診器を待つ少女』状態です。

「黒……み、見てません！」

見てはいけないものを見たようにロイドは動揺  
し脱兎だつとのごとく部屋に逃げ出します。

「……………」

王女から魔女、そして今現在痴女に成り下がったマリ―はというと、無言でクロ―ゼツトの水晶を引<sup>ひ</sup>っ張<sup>ば</sup>り出し何のためらいもなく井戸の底に沈めたのでした。

この後「勢いでやった、今は反省している」と述懐するハメになることも知らずに……

第四章 たとえば空手漫画で白帯相手に油断する  
黒帯キャラのような滑稽さ

数日後、窓から朝日が差し、漂うホコリがきらめく軍の講堂に、士官候補生らがずらりと並んでおります。今日は士官候補生たちの入学式のようなです。

さて普通の入学式なら壇上の人間の言葉に聞き入る初々<sup>うい</sup>しい候補生たちが見られるはずなのです  
が……メルトファン大佐が集めた濃ゆい人材のせ



いで初々しきは欠片かけらもありません。「今年は骨が折れるかもしれない」と講師陣はぼやいています。それに加え――

「つまり！ この国の軍事力を担う者として！ 君たちは心も！ 身も！ 心も！ 強くなければならない！」

壇上で熱弁を振るうメルトフアンの気合の入りようがその心配を加速させているのです。講師陣たちも頑張がんばって軍に必要な人材に育てようと思つてはいるのですが、いかんせんメルトフアンは意識が違います。言うなれば淡々と事務的に話しているのが普通のメルトフアンなら今壇上にいるの

は意識高い系メルトファンです。勢い余って心を二回言うくらいですし。

さして、その曲者くせものの最たる存在、悪名あくみょう高き『隻腕せきわんの女傭兵ようへい』ことりホは支給された深緑ふかみどり色の制服に身を包み込んで気だるそうに演説を聞いていました。

彼女は入学式が終わった昼下がりに、先ほど壇上で熱弁を振るっていたメルトファンの元へと駆けつけました。

士官学校の中庭、生徒同士の語らいが聞こえる広場に場違いなほど背筋を伸ばし張り詰めた空気を纏まとう男に声をかけます。

「よう大将！　景気はどうですか？」

顔見知りには話すような態度をされてもメルトフアンは表情を崩さず淡々と窘たしなめます。

「馴なれ馴れしくするな……それに私は大将でも中将でもない、大佐だ」

「へいへい、相変わらず冗談通じないくらい真面目ですな」

「で、何の用だ？」

「いえ、例のロイド君の件、進展はどうかになって思いました」

「残念ながら進展はないな……居場所もわからずじまい、故郷に帰ってしまったかもしれん」

メルトフアンは事務的な態度の中に後悔をにじませます。

（でかい魚を逃がしたつてところだもんな）

同じくロイドの底知れぬ何かを感じ取ったりホです。メルトファンの気持ち痛いほどわかりました。もつとも彼女は自分の懐のためですが。

「で、なぜお前がロイドの件に首を突っ込んでくるんだ？ そう言えばこの前もセレンと一緒に私についてきていたな……よからぬことでも——」  
三白眼さんぱくがんの片目をつぶりウインクしながら舌を小さく出しました。

「てへ」

「――企たくらんでいるのか」

「いえいえ、この国のためにどうしても彼を士官学校に編入させてあげたいのですハイ」

当然リホの頭の中では彼を利用しひと儲もうけするという算段があります。士官候補生として編入させ恩を売り今後の金儲けを円滑にしたいといったところでです。

「何にせよ居場所がわからないにはどうすることもできん。調査待ちといたったところだ」

「それなんですけどね、例のベルト姫、セレンはロイドとただならぬ関係だそうで、多分居場所ぐらいなら知っているとありますよ」

運命の人とまで豪語するセレンです。想い人の居場所くらいは聞いているはずだとリホはそう考えていました。

「そうか、ならセレンに聞けばすぐにもわかるのだな」

メルトファンは安堵あんどの声でそう言うと「今セレンはどこにいる」とリホに聞きます。

「今日も入学式終わったらすっ飛んで行きましたよ。多分ロイドに会いに行っているんじゃないですか？ つーわけで居所に関しては心配ないと思いますよ」

「ふむ、では残りの問題は彼をどう上手に編入さ

せるかだな」

「というわけでここは一発、大佐の権力でドカンと！」

「……そんな前例を作ってみろ、これ幸いと上層部の間抜けどもが縁故採用で自分の身内を押し込んでくるぞ……軍部を無能で溢れ返させる気か」

「はあ、そつちもそつちで大変なんですな」

リホは険しい眼差しまなざしを向けられ「当てが外れちやっただ」と口ずさみます。

「私は昼飯を食った後色々と手を打ってみるつもりだ……来るか？ リホ・フラビン」

「アラあ？ お誘いですか？」



「ああ、これから合う奴は知り合いになつて損のない男だ」

メルトファンのなにやら含みのある物言いに彼女は即座に小首をかしげました。その疑問に彼は歩きながら説明するのでした。

「元近衛兵<sup>このえ</sup>がやっている士官候補生向きの食堂があつてな、量が多くて値段が安くて味は微妙というリーズナブルな食堂だ」

「一番営業努力すべき部分がダメじゃないですか」  
「本人曰く<sup>いわ</sup>美味<sup>うま</sup>すぎるとレーションが食えなくなるからこのぐらいいいと言つていたな。あと店そのものも微妙で<sup>うすぎたな</sup>薄汚くて床が油でヌルヌルして

いるな。もっぱら学生はこじやれたカフエテリアに行っている」

「営業努力どころか営業できなくなりますがよ、保健所からダメ出し食らって」

「……汚れた場所で平然と飯が食えてこそ一人前の軍人と曰のたまつてたな」

若干足取りじゃっかんの重くなったりホ。「失敗した」と思いながらも食堂のほうへと向かって行きました。その先には……

「——妙だな、いつもはもつと人が少ないのだが」  
前評判から想像できないくらいに店は繁盛はんじようして  
いました。二人が中へと足を踏み入れるとその繁

盛っぷりもうなずける古風ながら小綺麗な店内です。

「言うほど汚くないですね……こつちがカフェテリアですか？」

「……いや……奴め、リニューアルでもしたのか？ そんな金などないはずだが」

ちようどいいタイミングで空いたカウンター席にリホとメルトファンは並んで座ります。その目の前には無愛想な店主らしき男……クロムがせつせと魚を捌さばいていました。彼は二人に気がつくといちべつ一瞥いちべつだけしてぶつきらぼうに話しかけます。

「メルトファンか……何のようだ？」

「ふむ、食堂に来て言うことか？ クロム」  
ぶつきらぼうながら、まるで長い友人のようなやりとりです。その流れでメルトファンは「いつもの」とひと言言いました。

「……そっちは？」

「えつと……じゃ、リゾットを」

注文を受け短く「あいよ」と答えたクロムは厨房の奥へと向かいます。それを見届けた後リホは耳打ちするようにメルトファンに話しかけました。

「なあ大佐、あのおっさんも相当な手練れじゃないですか。ただの元近衛兵じゃないっすよね」

「……まあな、やつは昔、王女のお付で近衛兵長だった男だ」

「近衛兵長……ってなんでそんな人が食堂なんてやってるんですか？」

「まあ色々とな……だがいずれ講師として復帰してもらおうつもりだ。奴が首を縦に振ればだが……知り合いになっっておいて損はないぞ」

その色々に関して問い詰めようとした時、当のクロムが山盛りのリゾットとミートソースのパスタ、そしてクルトンをふんだんに振りまいたサラダを持ってきました。

「お、美味うまそうじやないですか」

「ほお……少し腕を上げたのかクロム？」

「黙って食え」

料理を置いた後、クロムは視線を流しに向けたまま皿を洗っています。そんなそっけない店長を前にリホはリゾットを頬張ほおばります。そして口に運んだ瞬間、目を見開きとなりのメルトファンへ顔を向けました。

「嘘うそつきました？」

「いや」

メルトファンはとうとういつもの仏頂面ぶつちやうめいめんで勢いよくパスタをすすっています。時折「おかしい」と口にしながらペロリと平らげたのでした。

「メシ、美味しいじゃないですか」

「ああ」

「しかもコレ相当いいお米ですよ、トマトも安物じゃないですよきつと」

「ああ」

メルトファンは少し眉根を寄せながら口元を拭ふいた後、クロムに話しかけます。

「おい、どういことだクロム？　美味しいじゃないか」

「お前はメシが美味くて文句を言うのか？」

クロムはなおも懸命に皿と格闘しています。普段こんな食堂が混んだことがないので洗い仕事



が追いつかないのです。納得のいかないメルトフアンは少し声を荒らあつらげます。

「あれだけ味付けやら素材やらを気にかけるなかつたお前が急にどうしたたというのだ！ おかげで私が嘘つき呼ばわりじゃないか！」

言い切ったメルトファンはお茶を飲み干し喉のどを潤します。そしてまた声を荒らげるのでした。

「おい！ 本当にどうした！ 茶まで美味しいではないか！」

料理が美味おいしくてケチつけられるという理不尽の極みとも言えるメルトファンの態度に辟易へきえきしてきたクロムは洗い物を中断し、しぶしぶ彼のほう

へと向き直ります。

「どうもこうもあるか！ 美味しいメシと美味しい茶！ お前は食堂に何を望んでるんだ！」

「しかもなんだ！ あの油ぎったヌルヌルの床が見る影もなくピカピカではないか！」

「オマケに綺麗な床にまで文句を言うのか！ そんなにあのヌルヌルに愛着があつたのか！」

リホはそのやりとりにお茶を飲みながらボソリとツツコミました。

「店長がヌルヌル言っちやだめでしょ……」

呆れた<sup>あき</sup>口調にバツが悪くなつたクロムは落ち着きを取り戻し理由を答えました。

「……バイトを雇ったんだよ」

「この無愛想な店長の汚い店にバイトが来たとい  
うのか？ 修行僧が解脱げだつしに来たのか？」

「メルトファン……お前にとってこの食堂はどう  
いう位置付けだったんだ」

精神修養の場所扱いの物言いにクロムは額に手  
を当てて困惑していました。そして騒うわさがしいやり  
とりを気にかけたのか奥のほうから噂うわさのバイトが  
姿を現したのです。

「店長？ どうかしたんですか？」

件くだんのバイト——ロイドが顔を出した瞬間、

「「ふんブツ」」

メルトファンとリホは美味しいと評価したお茶を仲良く同時に吹き出したのでした。

ロイドがその二人を確認しようとした瞬間別のテーブルから「すんませーん」と注文を頼む声が届きます。

「あ、はい」

ロイドはリホたちの顔を確認する間もなく軽一会<sup>えしやく</sup>釈<sup>やく</sup>だけして慌ただしく別のテーブルに注文を取りりに向かいました。そして落ち着きを取り戻したメルトファンはカウンターに身を乗り出しクロムに問い詰めます。コリンがこの場にいたら「キャラぶれとるでメルトファン」とダメ出しをするく

らい豪快に身を乗り出していました。はしゃいでいる子供が両膝をカウンターに乗っけている姿を想像してください、アレです。

「おい、どういことだクロム！　なぜあの男がここにいるんだ？」

「何!?　彼の素性すじょうを知っているのか、メルトファ  
ン！」

「知らん！」

「オイ！」

（何だこの会話……）

リホは紙ナプキンで口元を拭いながらいい年した男同士の珍妙なやりとりにも呆れていました。

「クロム、お前が鈍にぶってしまったのか知らないが感じないのか？」

「バカ野郎！ いくら現場から離れたとしてもあの底知れない力をわからんわけがないだろう……正直いつ襲われるかと気を張りながらメシを作るなんざ生まれて初めてだ」

クロムはそう言うのと今度はメルトファンに身を乗り出し問い詰めます。

「それこそメルトファン、お前こそ鈍にぶったのではないか？ あんな猛者もさを試験に落とすとはな」

「……痛いところを突いてくれる」  
「……額ひたいに手を当てる番でした。今度はメルトファンが額ひたいに手を当てる番でした。」

「まあとにかくだ、メシ作りもうまい、掃除そうじもかなりできる、雇わん理由がなくてだな……ま、それにあんな男ほっとけんだろ。最初はどこぞの間者かんじゃかと思ったぞ」

「……たえ間者じゃなくても変な輩やからに利用されてはコトだからな。いい判断だクロム」

メルトファンはそう言うと隣のリホに視線を向けました。軽やかな口笛を吹きながらリホはそっぽを向いています。

「とにかく不穏な動きもなくてここで働きたい動機は来年の試験まで食費を稼ぎたいだそうだ……嘘をついているとは思えんし」



クロムが話をしていると奥のほうからロイドの  
声が聞こえます。

「てんちよー！溜まったゴミはどこに捨てるん  
ですか？」

「裏を歩いた先のゴミ捨て場だ」  
ロイドはハイといい返事をして外へゴミ出しに  
行きました。

「フツーによく働く、人柄もよく接客も上手……  
今みたいに気が利くしな」  
そう評価するクロムにメルトファンは申し訳な  
さそうに頭を下げます。

「……すまんがもう少しここで預かっていてくれ

ないか？ 士官候補生になれるよう色々骨を折ってみる……」

「規律規律のお前がそう言うのも無理はないな……任せておけ、命懸けで預かる」

「……そうか、恩に着る」

そんな二人の会話をリホは怪訝けげんな顔で見つめていました。

(……ここ食堂だよな)

その食堂とは思えない不穏な会話が繰り広げられている時です。妙な喧騒けんそうが外から聞こえてきました。

「何だ？ 揉もめ事か？」

ゆっくり喧騒に耳を傾けるリホ、道行く人々の会話の中には「喧嘩<sup>けんか</sup>」や「一触即発」、そして「ベルト姫」なんて単語が端々<sup>はしばし</sup>から聞こえます。

（……ベルト姫？ 何やってんだアイツ）

気になったリホは不穏な会話をしている二人に声をかけ、一緒に喧騒の元へ向かうのでした。

「——どういう意味ですか」

声のほうへ向かうリホ、そこではセレンとアラシが言い争いを始めていました。

「——何を考えているのか知らねえけどよお、これ以上地方貴族の悪い噂広げられたら俺<sup>おれ</sup>が困るんで

な」

士官学校の大通りは候補生らや軍人、観光客や物資搬入の業者などで賑わっています。

その往来のど真ん中、喧騒の中心にいる二人を困むように道行く人々が足を止め人垣を作っていました。

「……………何？ 忙しいんですけど」

セレンはというとブロンドの髪をなびかせてその隙間から蔑さげすんだ目をアランへと向けています。彼は動じることなく言葉を返します。

「何じゃねえ！ お前街中で人探ししながらやたら問題起こしているそうじゃねーか」

「ちよっかい出してきたのは相手のほうですわ  
…ロイド様を見たとき、ついで行くとき、夕日の  
下<sup>げ</sup>卑<sup>び</sup>たナンパだったからちよっくと痛めつけただけ  
です」

芯のある眼差しのまま、ブロンドの美女は毅然<sup>きぜん</sup>  
とした態度で言い放ちます。

「てめえなあ…地方貴族どころか士官候補生の  
評判まで落とすつもりか？」

「評判が下がるような大したことはやっていませ  
んわ、ただその男の胸毛をすべてむしり取っただけ  
ですわ」

「大したことがあるわ！ ヒリヒリして風呂に入れ

なくなるだろう！」

「――もし何かあったら今日は腕毛にするから問題ないですわ」

「お前ムダ毛に何か恨みうらでもあるのか？ 生えかけのチクチクは一度気になったら夜眠れねーんだぞ！」

主旨しゆしがどんどん横道にそれ、ムダ毛の話になりつつありましたがセレンはきつい双眸そうぼうを向け一歩も引かないといった態度でアランに詰め寄りました。

「とにかく、私とロイド様の恋路を邪魔するのなら誰であろうと容赦ようしやはしませんわ」

その言葉を待っていましたと言わんばかりにアランは口元を歪ゆがめます。

「へ、言ったな。これ以上騒ぎを起こして俺の出世に響いたら困るからよ……ちよつと痛い目見てもらうぜベルト姫さんよ」

「セレンよ……あなた、そんなに頭頂部をむしら  
れたいのかしら？」

「俺の場合ムダ毛じゃねーのかよ！ 結構大事な部分だぞてっぺんって！」

コミカル、かつ剣呑けんのおんなんとも言えない不思議な空間ではありましたが。お互いが武器を持った瞬間、空気が一変し緊張感が張り詰めます。



「安心しな……寸止めしてやるからよ」

戦斧を撫でながらアランは不敵な笑みを浮かべます。豪華な装飾の施された両刃の戦斧。もし寸止めでできず振りぬいてしまったら大惨事になるでしょう。

「……どうぞご自由に」

一方セレンは臆することなくレイピアを優雅に構えます。そして形式に従いお互いの武器を合わせようとした瞬間でした。

刹那、武器を合わせる素振りも見せず、アランはその巨軀に似合わぬ機敏な動きで瞬く間に懐に潜り込みます。

想像以上のスピードにセレンはたじろぎ対応が遅れてしまいました。

「経験不足だなベルト姫！」

「くっ」

セレンに戦斧の刃が付きつけられるその時です。ビュっという音とともにセレンの腰元の呪いのベルトがアランのなぎ払いを止めました。

「は？」

まるで生きているかのような動きをした後シユるシユるとまた腰元にベルトが収まります。

なんとも気味の悪い動きをする赤いシミの付いたベルトにセレン以外の全員が言葉を失いました。

「オイオイ！　なんだそのベルトは！　動いたぞ！」

「これはアレですわ！　ロイド様の思し召しですわ！」

「はあ？　答えになつてねえ！」

「つまりよくあるではありませんか、愛しい人からの贈り物を懐に入れていて矢で射られたらその贈り物に矢が当たり一命を取り留める……」

「いや懐っツーか腰元にあるし、つてか思いつきり動いたぞ、そのベルト……蛇<sup>へび</sup>みてーに」

「つまりこの命はロイド様のもの！　差し詰めこのベルトは運命の赤い糸！」

血のような赤いシミの付いたベルトを頬ずりする彼女に周囲は戦慄せんりつしていました。今日もセレンは仕上がっていていますね。

「ち、まあいい」

アランが戦斧を構え直します。腰を深く落とし眼光には殺気が宿っていました。

「気味の悪いベルトごと叩っ切れば問題ねえ……手加減しねえぞ」

底冷えするかのようなアランの発言に、周りの野次馬も血を見るかも知れないと感じ取り固唾かたずを呑み込んで二人を見守ります。

——ただ一名、この空気をものもしない少年が

ゴミを抱えて現れるまでは……ですが。

「あゝすいませーん。なんか僕の名前が聞こえた気がしたんですけれどこわねも」

ふんわりとしたこわね声音のほうを見てみると大量のゴミを抱えたロイドがそこに立っていました。

「何だ？ 清掃業者なんて呼んでないぜ」

ロイドはゴミを地面に下ろすと対峙たいじしている二人を見やります。

「あゝいえ、業者じゃなくてロイド・ベラドンナと申しますが……」

「ロイド様！」

刹那、一陣の風とともにセレンはロイドの懐へ

とダイブします。全く状況を呑み込めないロイドとアラン、そして野次馬たちはただただポカーンとするだけです。

「ああロイド様！ 私が絡まれている時にまたも助けてくれるというわけですね！ そして二人は運命の――」

一方、セレンからしてみたら探しに探しようやく見つけた意中の人が、自分が強面こわもての男に絡まれていている時に颯爽と現れたものですから、その思いの丈たけ……ぶっちやけ脳内妄想がダダ漏れです。放っておいたら将来設計を老後まで余すことなく披露しかねないでしょう。

さてその妄想を律儀に聞いていたロイドはこれまた律儀にアランに確認します。

「あの？ 絡んでたんですか？ それで僕が代わりに相手になる……と」

「あゝいや……えっと」

アランはロイドののんびりした口調とセレンのポンコツっぷりに一気に興きようが削そがれひどく冷静になっっていました。

「こいつがロイドとかいうセレンが探していた奴か……どう見ても食堂のバイトだよな」

なんにせよ探し人が見つかったら馬鹿ばかな真似はもうしないだろう……そう思った彼は手にした戦



斧を収めます。

「あの……」

「あー大丈夫だ。えっとバイト君、候補生とはいえ軍人が一般人に手を出すわけにはいかないのですね……それにもうこの件は大丈夫だろうしなーおいベルト姫！ 今日は見逃すけどもし次おかしなことしたら容赦しないからな！」

「ああロイド様ロイド様ロイド様ー」

「聞いちゃいねえし……」

ほどなくしてコリンが騒ぎを聞き大慌てで駆けつけました。

「ちよっと何してん！ なんやアラン君とセレン

ちゃんが喧嘩をおっぱじめるってみんなゆうとつたで！……ってコレどんな状況？」

ロイドの胸にまだ顔をうずめているセレンを指さしコレ扱いするコリンにアランは姿勢を改め状況を説明します。

「――と、いうわけであります。もう問題は解決したかと」

「はえーなるほどな……ま、なんにせよ問題起こさんかったらええわ。にしてもロイド？どっかで聞いたたような……なんやっただっけ？」

コリンが自分の記憶をたどっている時でした。遅れて騒ぎを聞きつけたメルトファンたちが野次

馬の中に現れました。人垣が一斉に道を開けます。  
「一体何の騒ぎだ」

実に落ち着き払った威厳のある態度に興味本位で眺めていた、大半は学生の野次馬たちは押し黙ってしまいます。かわりに答えるようにコリンが声を出します。

「おお！メルトファンやないか！リホちゃん  
と、それに……クロムさん？」

彼女は意外な来訪者に驚きを隠せません。

「どうしたコリン？」

「いやあ搔かいつまんで説明するとやな、アラン君  
とセレンちゃんの喧嘩をこのロイドっちゅー子が

止めたんですわ」

「「ロイド？」」

メルトファンたちが同時に声を出しました。それに呼応したかのように胸に顔をうずめていたセレンが急にこちらを向いて力説を始めます。

「そうですわ！ 私を守るために&私の代わりに！ この粗野そやな男と戦ってくれます！」

「……街で人の胸毛むしり倒していたお前のほうが粗野だろうに」

呆れるアランですがそのぼやきは二人の耳には入ってきていませんでした。

「何考え込んでるんですか？」

リホの質問にメルトファンは唸りながら答えま  
す。

「リホ・フラビンよ……お前にもわかるだろう。  
戦場などいくつもの修羅場をくぐってきた人間だ  
から感じるロイドの圧倒的な力……」

何を今更といった顔のリホ、メルトファンは続  
けます。

「ロイドが戦う……しかしその実力の程をしっか  
り確認したわけではない……だからこそ見たいと  
は思わんか？」

その言葉にリホはハツとしました。ロイドはひ  
と目では虫も殺せないほどのやんわりとした少年

で「自分の勘が鈍ったのでは」と思ってしまいうくらしいです。

「確かに実際に見てみたいっすね……」

金勘定が基本のリホですが、どうやら純粹な好奇心が湧き出てきたようですね。

「もしアランを完膚かんぷなきままでに倒したら……：：：士官学校編入への足ががりになるやもしれんな」

メルトファンはそんな打算を漏らしながらアランに近づくと真剣な顔で問いただします。

「本当なんだな？　本当にこのロイドと戦うというのだな？」

アランはかかとを揃そろえ敬礼すると首を横に振り

ました。

「いいえ大佐、問題は解決したようですよ……それ  
れに自分も軍人の端くれ、何の罪もない一般人に  
手を出す気にはなりません」

「空気読め」

「え？」

露骨な態度で模範的回答を示すアランに対し、  
真剣な面持ち……というか睨み付けてメルトファ  
ンは吐き捨てるように言いました。なぜ怒られた  
のか皆目見当付かないアランは口を開けたままで  
す。

「軍人たるもの！ 一般人ぐらいボコボコにでき



ないでどうする！」

野次馬がドン引きするほど過激なメルトファンの発言にコリンがたまらず間に入ります。

「ちよゝメルトファン！ あんたいつもなら『軍人が守るべき相手に手を出すとは何事だ！』なんて言っつて修正しまくるやんか！ なんか変やで最近」

「……」

「目えそらさんそこっち向かんかい」

自覚があるメルトファンは少しバツが悪そうに黙り込んだ後コリンにそつと耳打ちします。

「……コリン、このロイドという少年は例の『ル

「イン文字』の子だぞ」

「……………」

そのことを聞いた彼女はおもむろに野次馬の中心に歩き出すと、

「レッツ！ ファイト！」

レフリーを買って出ました。実にキレのある動きで交戦を促すのでした。

一方、ほんろう翻弄されるアランは困惑しきりです。正論を言ったら空気読めと言われるわ交戦を促されるわと涙目になっています。

（一体どういことだ……大佐たちはなぜ俺を戦

わせようとするんだ?)

この不可解な流れにアランは答えを探します。そして出した結論は……

(……っ! そうかつ! 武勲ぶくんで名を馳はせたりド

カイン家の出身で数多あまたの大会で優勝した俺の実力が見たいのだな!)

涙が出るくらいポジティブでした。納得した彼はロイドのほうに向き直ると申し訳なさそうに頭を下げます。

「すまんバイト君、俺と戦ってはくれないか」

「え? ぼ、僕ですか? 僕弱いですよ」

急なご指名にロイドはタジタジです。アランは

それを受け更に頭を深く下げます。

「そこをなんとか……俺には、認められなきやいけない目的があるんだ。頼む、この通りだ！」

「は、はあ……いや……いいですけど」

「おお！ ありがとうバイト君！」

そして野次馬から見たらまったくもって意味のわからない決闘が始まろうとするのでした。「ありがとう」「いえいえ」といった譲り合いから始まる軍人と食堂のアルバイトの戦い、全く興味をそそられない対戦カードですが軍でも指折りの実力者メルトファンと魔法のエキスパートであるコリンが瞬<sup>まばた</sup>きもせず見ているのです。往来に不思議な空

気が漂っていました。

（軍で指折りの実力者にこうも注目されているとは！ 感無量だ！ ここは俺の実力を余すところなく見せつけないと！）

気合十分のアランでした。だがその兩名はというと、  
「……早くしろ」ボソリ

「はよルーン文字見せんかい」ボソリ  
身も蓋ふたもありませんでした。そんなことは露知  
らずアランは物々しく距離をとっては勿体もったいつけて  
腰元の戦斧を構えます。

「我が名はアラン・トイン・リドカイン！ かの武勲で名  
を馳せたリドカイン家の長男で――」

誰も求めていない名乗り口上を挙げ始めます。実情を知る者から見たら滑稽こっけいの極みでしょう。

口上が終わりいざ勝負という時です。アランはロイドが丸腰であることに気が付きました。

「えっとよろしくお願いします」

「ちよつと待ったバイト君、君もしかして素手すでかい？」

「あ、ハイ」

「ふむ……流石に丸腰相手じゃ勝負にもならない、誰か武器を――」

「そんなアランにコリンがキツく睨み付けます。  
「空気読まんかい」

「ええ……」

また不可解なダメ出しをくらいアランはちよつと涙目です。

「……武器なんかいらん、ルーン文字やー」  
そんなコリンの思惑などわかるはずもないアランはどうしたものと悩んでしまいました。

一方そんな中、外野ではリホがこっそりとメルトファンの横に立って耳打ちします。

「あのーメルトファンさん」

「なんだ？」

「アランの奴……下手したら死ぬんじゃないです



か？」

「いや、大丈夫だろう。ああ見えてもあのアランは様々な武術大会で優勝した強者つわものだ。加えて頑強さには定評があつてな」

その会話にクロムも入つてきます。

「それにな嬢ちゃん、あそこにいるコリンは魔法……とりわけ回復魔法の達人で、ちよつとした怪我ならすぐ治せるさ」

「そうなんスカ店長さん……あの人が」

ちなみにその回復魔法のエキスパートは「はよ戦わんと血を見ることになるでえ」と場の中央で物騒な発言を連呼しています。どう見ても傷を治

す側ではなく負わせる側の雰囲気でした。

「……………あの人か？」

「……………ああ、俺もメルトファンも何度か助けられたさ」

聞かなかったことにして強引に話を進めるクロムにメルトファンが付け加えます。

「ま、なんにせよ即死でなければ問題ないだろう  
……………そうだな、アランなら無防備な顔面にこんしん渾身の  
一撃さえ食らわなければ大丈夫だろう」

「顔面がトマトピュールにならなきゃいってこ  
とっすね」

さて外野の話がまとまった頃、なにやら思い付いたアラランがロイドに提案します。

「よし！流石にそれじゃハンデが必要だろう！」

「は、ハンデですか」

驚くロイドにアラランが頷きます。

「ああ、一方的すぎてもアピールにならない！」

ここは……そうだな、先に一発！顔面を思いつきり殴ってくれ！俺の一番の売りは頑強さなん  
でな！」

「あ、は、はい……頑張ります」

「おう！遠慮はいらん！さあこい！」

「……………メルトファンさん？」

「……………アイツ死んだな」

「おい！ なにボーっとしてるんだ！ 止めるぞ！ 二度とトマト料理が食べられなくなってもいいのか！」

クロムの声に我に返った二人は死刑執行を阻止せんと全力で駆け出します。その目の前では今まさにロイドが全力でアランの横っ面をぶん殴ろうとしていました。

「行きますす！」

「「逝いくなっ！」

完熟トマトが裂れ果っするその瞬間でした。アラン

の足元から突如突風が吹き荒れたのです。

「な？」「え？　なに？」「きやああ」「あかん！」

つちほこり土埃やらゴミやらスカートやらを巻き上げそこ  
にいる者の視界を遮かきこります。

やがて暴風が収まり、リホやセレンが目を擦り  
もう一度その場を見ると、

「消えた？」

ロイドがその場から姿を消していました。一体  
何事かと周囲は啞然あぜんとしています。

「みぎやあああ！　誰や風魔法なんて唱えたん  
は！　ホツク外れてもうたやないか！」

中央にいたコリンは突風をもろに受け、運悪く

タイトスカートのホックが外れずり落ちてしまっ  
たようです。あられもない姿を披露してしまいま  
した。何のとは言いませんが色はベージュだった  
と伝えておきましょう。

「コリン？ 今のは？ 敵襲か？」

「そんな大層な魔法やない……ただの風魔法や  
……ところでメルトファン……見たんか？」

「いやロイド・ベラドンナがどこへ行っただかは見  
えなかった……」

慌ててスカートを履き直したコリンはメルトフ  
アンの朴念仁ぼくねんじんな発言にご立腹のようです。

「そっちやないわ！ ウチのスカートの中身や！

………こんなんやつたら三枚お買い得セットの地味なヤツやなくてお気に入りに入り履いてくるべきやったわ」

消え入りそうな最後の言葉はメルトファンには聞こえなかつたようです。そして彼はあろうことが突き放すような発言をします。

「そんなものなどどうでもいい。それより——」  
カチン。そんな音が聞こえたかと思つたらコリ  
ンがドスの効いた声音で青筋を立てます。

「………オウコラ、言葉を選べ仏頂面………そういう時は興味がある素振りを見せつつ上手に見たかつたけど見えませんでしたとオブラートに包み



つつ発言するもんやで」

「ちよつと注文が多くないかコリンよ。いやそれより彼がどこへ行つたかのほうが……」

「いやこの際はつきり言わせてもらうで！ だいたいアンタはな乙女おとめ心つちゆうのを——」

「ま、待てコリン！ 今の状況を冷静に考え——」  
かろうじてクロムだけはパンツではなくその影を見ていました。渦中のベージュではなく黒を基調とした魔女らしい服装ととんがり帽子……そして昔、何度も見た少女の横顔……

「王女……？ 王女なのか？」

クロムは騒然とする野次馬を掻き分けるとその

黒い影の消えたほうに一目散に駆け抜けていったのでした。

「おいクロム！ クロっ……クロムさーん！ ちよつと待て助けてく……ぬわああ」

メルトファンの断末魔が背後から聞こえました。が、クロムは気にも留めませんでした。

士官学校大通りの外れ、軍事施設の屋根の上で肩で息をしながら脇にロイドを抱えるマリーがいました。

「はあ……あぶなかった……」

マリーからしたら、情報を得るべく身を潜めな

がら中央区に來たら死刑執行のシーンに出くわしたようなものです。ひと安心したとたん変な汗が体中から吹き出します。

で、一方ロイドはとらとらと、

「そっか……僕がボコボコにされるのをマリーさんが守ってくれたんだ」

また大層な勘違いをしていますね。その言葉は小声でボソリと喋しゃべったのでマリーには届きませんでした。

マリーは抱えたロイドを降ろすと「めっ」といった姉な表情で彼をたしなめます。

「何してるのロイド君！ 危うく死んじゃうところ

ろだったのよ！」

あの男が！　と言葉を続けようとした瞬間、ロイドはすごい勢いで頭を下げ謝ります。

「ホントにごめんなさい！　助けてくれてありがとうございます！　とうございます！　マリィさんは命の恩人です！　なんでもします！」

一気にまくし立てた後少し潤んだ瞳でロイドは彼女を見上げます。

ロイドの子犬のような表情といつもの勘違いに一瞬で怒る気が失せたマリィは突き出した人差し指を所在なく動かした後、彼のおでこをツンと小突きます。

「でも弱気なロイド君が決闘ね……どしたの？」

「えっとなんか流れで……僕に何ができるかわからなかったんですけど……頼まれて」

マリィは「何その曖昧あいまいな決闘理由」と呆れ顔になりました。

「ま、うん。何ができるかわからないけど前に進むってことは大事よ、うん」

とりあえず適当にまとめたマリィ。それをロイドは真摯しんしに受け止めます。

「そ、そうですね。前を向いて進むことが大事ですよね！」

その素直すぎるロイドの笑顔にマリィはほんの

り頬を染めるのでした。

「それと簡単になんでもって言っっちゃだめよ。悪い人に騙さ<sup>だま</sup>れちやうから……私みたいな女にね」

「え？ マリーさんはすごく優しい人じゃないですか？」

「……………全く」

騙されているのは私のほうかも。と考えてしま  
うくらいロイドの素直な褒<sup>ほ</sup>め言葉に頬を赤らめる  
マリーはほんのちよつと意図的に体を密着させな  
がら彼を抱えて屋根から飛び降りました。

ふわりと風魔法による作用で路地裏に着地して  
辺りを見回します。

「誰もいないわね」

「え？ 誰かいたらまずいんですか？」

「ち、違うわよ！ なんでもするっていうから何かするわけでもなしに！」

人通りの少ない建物の隙間、暗がり、アルカだつたら「絶好のシチュエーションじゃ！」と吠えまくってたでしよう。

（いやいやいくらなんでも！ なんでもするって言ったからってこんな！ いや逆に実は誘ってるとか！ 神様の思おぼし召めし？ ああ落ち着け私！ 王女でしょ！ 今は一人の女の子だろなんて言われたら………つて！）



そんな妄想たけだけ猛々しいマリ―の背後から息せき切  
って大男が現れました。

「あの……その人」

「ちゝ違います！ 別に何かやましいことをしよ  
うとは！」

挙動不審ここに極まれりな慌てつぶりを見せる  
彼女でしたが、その視線の先にいる懐かしい顔を  
見て一気に落ち着きを取り戻します。

「クロ……ム？」

薄暗闇に浮かんだのは四角いたいく体軀、角ばった顔  
……似合わぬエプロン姿ではありますがマリ―の  
信頼できる人物、クロム・モリブデン元近衛兵長

がそこにいました。

クロムに気が付いたロイドは彼の前に駆け出し猛烈に頭を下げるのでした。

「店長！ す、すみません！ ゴミ捨ての途中で色々ありました！」

「え？ 店長？」

クロムもマリー……行方不明の王女を見つけ戸惑いを隠しきれませんでした。ロイドの言葉で我に返ると咳せき払いを一つして落ち着きを取り戻します。

「コホン……いや、それはいいんだロイド君。それよりも……やはりマリア様」

聞きなれない名前にロイドが口をはさみます。

「え？ 違いますよ店長、この人はマリリーさんといつて僕がお世話になっっている方です」

「うん？ マリリー？ お世話？」

話が進まないと感じたマリリーはロイドの頭をクシャリと撫なでます。

「ロイド君、そのことは後でいいわ、お仕事の途中でしょ？」

「おおそうだ、店ほったらかしにしてきたんだ」マリリーとクロムの言葉に「大変だ！ 急いで戻ります！」と言い残しロイドは風のように去って行きました。残った二人はその背を見送った後、

久しぶりの邂逅<sup>かいこう</sup>を懐かしみます。

「久しぶりねクロム、五年ぶりかしら」

「もうそんなになりますか……本当によくぞご無事で……このクロム・モリブデン、今日まで身が千切れる思いでした」

四角い体を萎縮<sup>いしゆく</sup>させ、かしづくクロムにマリーは慌てます。

「ちよつとクロム！ そんな片膝立てたりなんかしないで！ 誰かに見られたらまずいわよ、今まだ私の正体がバレたらまずいんだから」

「正体ですか、それは一体どう……そういえばメガネも伊達<sup>だて</sup>ですわね」

「積もる話はあるんだけど、また後で落ち合えな  
いかしら？ その時ゆっくり話すわ」

「わかりました。では今日の夜、食堂の裏手でお  
会いしましょう」

深々と頭を下げるとクロムは路地を出て行きま  
した。

その背中を見届けた後、マリィは大きく息をつ  
くと気を引きしめ直しました。

（クロムが早々に見つかったのは嬉しい誤算ね、  
ロイド君のおかげだわ……これで一步前進）

かび臭い建物の隙間から覗く王城を見やり、マ  
リィは眼差しを一層険しくしました。

（Xデーは建国祭の各国首脳会談……それまでに黒幕を見つけ出し父さんを解放する）

王城に向け、傷の付いた手を握り締め突き出します。

（この『解呪』のルールで！）

夜の士官学校キャンパスは暗く静まり返っていました。ところどころ見回りの人間の明かりがゆらゆらと揺れては建物の中へと消えていきます。

しかし食堂だけは閉店しているのに煌々こうこうと明かりが灯っていて中から人の話し声が聞こえています。その食堂の裏手では二つの影が話し込んでい

ました。

影の一人は、その角ばった巨軀に似合わぬエプロンを身に付けたクロム……もう片方はイーストサイドの魔女にしてこの国の失踪しっそうしたと言われている王女のマリアことマリーでした。

「そうでしたか……王が何者かに操られ、理性を失う前にあなたを逃がしたと……さぞお辛つらかったですよね」

失踪当日の話、今までのこと（おもにアルカの愚痴ぐち）を聞いたクロムはマリーをいたわります。

「ええ、そしてこの絵を描いた黒幕がはつきりしない以上、迂闊うかつに動けないわ。お城に乗り込んで



父さんを解放したとしても、いずれ隙を見てまた操られでもしたら……」

そこまで聞いてクロムは食堂の店長に身を落と  
した経緯を月明かりに照らされたお城を眺めなが  
ら語り出します。

「王女が行方不明ゆくえになっ  
てからというものの、王も  
その周辺も目に見えて変わりました……  
タカ派を重用し戦争をほのめかしたり人前に姿を見せるこ  
とが減ったり……」

「街の人から聞いたわ。噂は本当だったのね」

「私はおかしいと思い王女を見失った責任を取る  
名目で辞職し食堂の店長に身を潜めました。そし

て隠れて王女の行方や王が変わってしまった原因を探っていたのです」

「そう、お互い素性<sup>すじょう</sup>を隠して警戒していたからすれ違っていたのね……」

「巡り合わせてくれたロイド君に感謝ですな」  
マリィはそう言われて、あの殺人未遂現場を思い出しました。

「あーそうだ思い出した！ てかなんでロイド君を止めなかったのよクロム！ 一生もつ煮と冷やしトマトが食べられなくなるところだったわよ」

チヨイスが酒のツマミであることをツツコミたくなるところは置いておいて、クロムは申し訳な

さそうに頭を下げました。

「言い返す言葉もございません……あの底知れぬ力の真意を確認したくてつい……」

「確認で人一人死ぬところよ……ま、あの子のヤバさを怖いもの見たさで見たくなるのもわからなくもないわね」

「いったい彼は何者なんですか？　なぜあなたと？」

マリーは薄暗闇をボーっと眺めながら答えます。「コンロンって村のおとぎ話……知ってる？」

「あの……大昔の英雄が世間から離れ静かに暮らしているってお話ですか？」

マリィの言うおとぎ話とは、世界の厄災やら魔王やらを人知れず食い止めているコンロンの村のお話で時代の英雄やら高名な学者、武将といったいずれも耳に覚えのある人物の子孫が奮闘するというトンデモ話です。人の魂の流れ着く山々、その村には伝説の剣やあらゆる攻撃から持ち主を守る魔獣の革が財宝として収められ、トレントに囲まれた集落で川にはキラールピラニアが群れをなすという嘘くさい話をクロムは思いだしていました。そんな眉唾物まゆつばものの物語と自分の関係のことを真顔でマリィは語ります。

「あまり言いたくないのだけどね……コンロンの

村は実在するそうよ……私の師匠がその村の村長ですって」

「本当ですか？」

「私も嘘だと思ったんだけど……片手間で魔王を跡形もなく消したりちよくちよく瞬間移動したり……言っけててバカバカしくなるようなことを何度も体験したわ」

「ワオ……」

キャラに合わないリアクションをしまっくクロムを横目に更に驚愕きょわつがくの事実を付け足します。

「ロイド君はそのコンロンの出身で師匠の身内なのよ」

「ワーオ……」

「しかも私が必死で習得した『解呪』のルーン文字も平然とこなせるし、モンスターを野生動物と思い込んでたり……街に出ているイナゴのモンスター――知ってる？ あれ人知れず倒しているのロイド君よ。『意外に都会って虫出るんですね』なんてのほほんと言いながらよ……いい子だけどやっばぶっ飛んでるわあの子」

クロムはもうリアクションすら取れなくなりました。

「私から言えるのはそんなもんかしらね。あの子のこと悪用しちゃダメよ」

「そんな恐れ多いことできませんよ、料理と掃除で十分助かってます」

「このことは絶対秘密よ……色々面倒なの、『人災にはコンロンの人間を利用してはならぬ、天災、もしくは魔王などが関わったとき、手を貸すのはそれぐらいじゃ』なんてことあるごとに言われてきたのよね」

「心中お察しします」

「だからロイド君をこの件に関わらせたらダメよ、あの村に連れ戻されちゃう。あの子の夢も奪ってしまふことになるのだから」

「心中お察しします」



「破ったたらカエルにされちゃうしね……なつたことある？ カエル？ あれ皮膚呼吸ひふできないと息苦しいから体表乾くと数分で苦しくなるのよね。私それ以来カエル見かけたらお水かけてあげるようになつちやつたわよ……アハハ」

「心中察するに余りあります……」  
乾いた笑いをするマリーにクロムはお察ししますとしか言えませんが。

「とにかくこれから色々手伝ってもらおうわよクロム……じゃ、そろそろロイド君が心配するから帰るわね」

その言葉を聞いたクロムはほんのりと目尻を下

げます。妹の幸せを喜ぶ兄のような目です。それを察したのか慌ててマリィは言葉を足します。

「ち、違うわ！ 勘違いしないでよね！ と、とにかくこの件は内緒よ！ もちろんお友達の二人にも口外厳禁よ！」

「言いませんよ、言っても信じてもらえるかどうか……それに連中とは古い付き合いです。そんな悪用するような輩やからじゃありませんよ」

クロムは食堂内の明かりに視線を送るとそうつぶやきました。明るい喧騒が奥のほうから聞こえてきます。耳を澄すますとどうやらクロムのことを呼んでいるようです。

「ほら、そのお友達が呼んでるわよ。んじや私帰るからね」

クロムは暗闇に消えるマリーを見届けた後、食堂の中へと戻っていきます。徐々に大きくなる喧騒の中心……酔っ払ったメルトファンが彼を見つけてるやいなやグラス片手に声を張ります。

「遅いぞ！ クロム！ 兵は神速を尊たつとぶというではないか！」

「せやでー！ トイレかー！」

閉店した店内には既すでにできあがったメルトファンとコリンがいます。何かあった時、顔なじみの二人は家飲み感覚で閉店したこの食堂を利用し酒

盛りをするのです。

すっかりできあがったメルトファンは頬を真つ赤かに染めあげて普段見せない態度でテーブルに寄りかかっていた。仲の良い身内にしか見せないその醜態はクロムにとっては見慣れたものでした。

「……悪かったな。ほら、燻製肉くんせいだ」

無愛想に皿にのせた燻製肉を目の前に出した瞬間、メルトファンは子供のようになそれを搔かつ攫さらい一気に口に頬張ります。部下が見たら目をそらしたくなるくらいはじけています。

「おお！ びみよーな味だ！ これはお前が作っ

たなクロム！」

「……ハイハイ、悪かったな悪かったな」

面倒くさそうに相手をするクロムに今度はコリ  
ンが絡んできます。

「いやーにしてもクロムさん！ ええバイト雇っ  
たやないか！ さっきの作りおきの料理、店に出  
してもおかしくなかったでえ」

「……ここは店だ、なにもおかしくはなかるうに」

「おっとそやった！ いやーこの前までかんこどり閑古鳥が  
鳴いてたから忘れとったわ」

「……ハイハイ、悪かったな悪かったな」

この調子が深夜まで続くものですからクロムは

酒を飲んででも酔うに酔えません。そんな状況が小  
一時間ぐらい経った頃、メルトファンが今日一番  
言いたかったことを口に出します。

「にしても、あのロイド・ベラドンナがここで働  
いていたとは……しかも一体何だったのだ？ 急  
に突風が吹いたと思ったら一瞬で消えたぞ？」

「……後で聞いたのだが、突風が吹いた瞬間、戦  
うのが怖くなつて逃げ出したそうだ」

もちろん嘘です。そしてそんなクロムにコリン  
が疑惑の眼差しと酒臭い息を向けます。

「ほんまかあ？ 何か隠してへん？ 実はものす  
ごい英雄の子孫か何かで隠された力を見せるのを

ためらったとかそんなんやないかい？」

（当たらずとも遠からずだな……）

ところどころニアピンなコリンの推察にクロムは額を押さええます。

「……ベルト姫のセレンは『無益な殺生せつしょうを嫌う口イド様ステキです』と言ってたな……しかし惜しいことをした。彼の實力を確認するいい機会だったのだが」

クロムはコリンの推察をごまかすようメルトフアンの言葉に乗っかります。

「そ、そうだぞメルトファン！ 下手したらあのアランという少年は死んでいたぞ」



「……うむ……なんにも言い返せん」

「お前が人材確保にやっきになるのもわからんでもないがな」

含みのあるクロムの言い方に顔の赤いコリンが覗き込んできます。

「なんや、何かあったんか」

琥珀こはく色の酒を口に運びながらメルトファンがその質問に答えました。

「大昔、飢饉ききんがあったな。私の故郷はジオウの連中に根こそぎ備蓄を奪われたんだ。あの頃もう少し軍に戦力があつたら国境付近の警備も……もう二度とあのようなことは起おこしやせん」

「ほんであっっちゃこっちゃの札付きに声かけとつたんか。んでロイド君にもお熱と……王女様くらいにしか扱えないルーン文字の研究もその為やっただんか」

「ジオウとの戦争でのアドバンテージはいくらでもあったほうがいい。勝つためならやれることはなんでもするさ……なんでもな」

グイとグラスを傾け中の液体をひと息に流し込みます。ふうと酒気を帯びた吐息を漏らすメルトフアンの顔はどこか悲し気でした。

アンニユイな雰囲気が酒の席を支配し始めた時、それを打破しようとしたのかコリンが思い出した

かのように別の話題を振りました。

「そや！ 王女様で思い出したんやけど、最近中央区でそれっぽい人を見たって噂があるで！」

「ゲフンっ！ ……そ、そうか」

ついさっきまでその人物と話していたクロムは咄嗟とつさに咳込んでしまいました。

動揺する彼をよそにコリンはぐいぐいと話題を進めていきます。

「どーもそれで王女様をもう一度本格的に探そうって話が挙がっているそうやわ」

「建国祭など控えたこんな多忙な時期に人員を割くのか？」

頬杖ほおづえを突きとろんとした目でメルトファンが毒づきます。

「色々考えがあるようやで。ジオウに王女様がとっ捕まって人質にされたら敵かなわんし、もしかしたらモンスターが最近出沒し始めたのはジオウが王女様を殺すためとか言われてるしな」

「……どうせ戦争反対派が王に対抗するため王女ようりつを擁立ようりつしたいからだろう……無駄なことを」  
ぶつくさ文句を言うメルトファンにコリンは嘆息しながら続けます。

「はあ……あと実はモンスターを王女様が陰で退治しているなんて噂もあるで。まあこれはホント

にただの噂やでー」

「ゲツツフン！」

思いっきり咳込むクロムにメルトファンは半目で嘆きます。

「風邪かせか？ 鈍だまっているのではないか？」

「そ、そうかもな……」

無論、彼が咳込んでいるのは体調不良ではなくその人物がロイドだと知っているからです。しかもモンスターと思わず目に付いた害虫を善意で駆除しているだけというのですから。その為街の間では『見返りを求めない英雄』として噂が行き交っているということも。

一方渋い顔のメルトファンは手酌てじやくでグラスに酒を注ぎ直すと口にしながら本音を漏らしていきま  
す。

「とにかく今は建国祭、そしてジオウとの戦争に備えるべきだ。王女の安否など二の次だ……もつともマリア王女がルーン文字を駆使してジオウとの戦いで先陣を切ってくれるのなら話は別だがな」  
「……言いすぎだメルトファン、王女にその手を汚せというのか」

クロムの苦言に彼は声を上げて反論します。酒の勢いもあっていつもの事務的な態度は遙か彼方にすっ飛ばんでいました。

「そもそもジオウにここまで好き放題やられていたのは弱腰だった王家の失態だ！ あの飢饉もどこぞの村が大量の小麦を支援してくれてようやく収まったのだぞ！ 汚名をそそぐ機会を得られてむしろ幸運というべきだ！」

「口が過ぎるぞメルトファン！」

「クロムっ！ お前にも言いたいことがある！ お前ほどの男が、王女が失踪した責任を取って食堂の店長になぞ！ いつまでこんなことを続けるのだ？」

「いいだろう……自分で決めたことなのだ」

「私はな……お前に士官候補生たちの指導者にな



ってほしいと思っっている。早く戻ってこいよ、ジ  
オウとの戦争はもう遠からず来る」

何か思うところありとあった感じで言葉を漏ら  
すメルトファンをクロムはたしなめます。

「―メルトファン……飲みすぎだ」

「もう飲まんほうがええでメルトファン。こっち  
もすっかり酔いがさめてもうたわ……あんな戦争  
だのなんだの考えんほうがええで、あんな傷付い  
たらウチ泣くからな」

メルトファンは少し思うところがあるかのよう  
に沈んだ顔つきになります。それを見たコリンは  
「吐くなら外でな」と背中をさするのでした。

「……大丈夫だコリン……騒いでもすまんなクロム」  
コリンに肩を借り、夜の闇に消えていくメルト  
ファン。その後悔をにじませた背中を見てクロム  
は何か引つかかるものを感じたのでした。

士官学校の朝は早く、まずはすべての基本とな  
る走り込みなどの体力作りから始まります。それ  
は魔術師志願者や後方支援志願者でも例外ではな  
く同じメニューをこなしていきます。

「人の命を守るには自らの命も守れなければなら  
ない、その為にはまず体力ありきだ」  
それがメルトファンの口癖くちぐせで入学初日から今日

に至るまで、授業のある日は毎日毎日候補生たちは走り込みを行ってきました。

ただ、いつもは険しい表情の生徒たちですが今日はどこことなく緩んでいるように感じます。

「ふう……走った走った。さって今日はあとホームルームだけやってオシマイだぜ……んであとちよつとでお祭りだ、三日間はぐーたらできるぜ」

土埃舞う軍事施設周辺のあぜ道で、だるそうに完走したりホが口にしたように今日は半日で上がりです。みんなの表情が柔らかなのはそのためでしょう。

へそが出るのもお構いなしにシャツの腹部で顔

の汗を拭<sup>ふ</sup>くりホ。その横でセレンは対照的に丁寧にタオルで汗を拭き取っています。育ちの違いがよく出ていますね。

「……ふう、でも当分授業がないからといっても、ちゃんと警備のお仕事があるんですからね」

「ずっととってわけじゃないだろ、交代制で数時間見回ってあとは自由時間！ 実質連休！」

口元をにんまり歪め、リホは笑いました。

そう、建国祭というアザミ王国のお祭りが間近に迫っているのです。生徒たちには警備という任務が与えられています。訓練や座学と比べたら実質休日みたいなものです。リホをはじめクラスの

大半の気が緩んでいるのも頷けます。

朝のメニューをこなした生徒たちは軽い足取りで講義室に向かいました。そしてホームルームでイベント警備のルートや時間などを確認し、さあお開きだとなった時です。

「みんな、聞いてくれ」

壇上のメルトファンが神妙な面持ちで、まるで警告するかのようには話し出します。

「いいか、この建国祭には各国の外交筋の人間や上役の人々が来賓らいひんとして招かれる。加えて連日多くの観光客で賑わうこととなるだろう、万に一つでも賊ぞくの犯罪を見逃すわけにはいかないのはわか

るな？」

いつもものように事務的な口調ではありますが、  
ことなく重たい声音です。空気を感<sup>じ</sup>取<sup>つ</sup>た生徒  
の緩んでいた空気が一変しました。それを見届<sup>け</sup>  
た彼は二、三頷いた後続<sup>け</sup>ます。

「君たちの中にはいつか来るかも知れぬ戦争を見  
据え、この国を守るために私の勧誘で入学試験を  
受けてもらった者もいる。無論そうでない者もい  
るが、私はみな等しくこの国を守る一人前の軍人  
にな<sup>っ</sup>てほ<sup>し</sup>い……そう願<sup>っ</sup>ていることを忘れな  
い<sup>で</sup>此<sup>こ</sup>度<sup>た</sup>びの警備にあ<sup>た</sup>つてくれ」

まるでスピーチのようにメルトファンは語り続

けていました。そして自分が少し感情的になっ  
ていることに気が付き軽く咳払いをして続けます。

「こほん……すまない。とにかくこの国の軍人と  
して誇りを持って職務にあたってくれ。警備の時  
に入用になる腕章や祭りの進行表、地図といった  
ものは各自の机の上に配布してある。あとで確認  
してくれ」

そんならしくないメルトファンを見てリホがセ  
レンに小声で耳打ちします。

「メルトファンの旦那だんな、何かあったのかね？」

「プライベートなことを詮索せんさくするのはよくないで  
すわよりホさん……さてそれよりもどのように口



イド様をお祭りにお祭りに誘おうかしら……いえ、まず口イド様のお祭り当日のスケジュールを把握して進行表と照らし合わせませんと……」

「プライベートって言葉を辞書で引いてこい……」  
ストーリーカー脳ここに極まれりなセレンに寒気すら感じるリホでした。

その様子に気が付いたのかメルトファンが注意します。

「――リホ・フラビン。何を喋っている、私語は慎め。それとも貴様は走り足りなくて体力が有り余っている」とアピールしているのか？」

外周のおかわりなぞ死んでも遠慮すると言わん

ばかりに嫌そうな顔をしたリホは咄嗟とつさに言い繕つくろい  
ました。

「いえ、当日の警備の打ち合わせをセレン嬢と相  
談していたのですハイ……な、セレン嬢？」

口裏合わせてくれと言わんばかりの目配せをし  
ますが空気の読めなさではセレンは想像をはるか  
に超える代物です。

「なにかしら暴動を起こしてその混乱の隙に人気  
のないところへ……」

「お前らは何の打ち合わせをしていたんだ」

片眉を上げ、訝いぶかしげな声音のメルトファン、声  
にならない声を上げリホは頭を抱えました。

「つたく勘弁してくれセレン嬢……メルトファン大佐の機嫌が悪かったことくらいわかるだろ」

こっけてり絞られたリホはげっそりした顔つきでセレンを睨みます。講義室の机に寄りかかりながら半目で覗き込むその視線の先のセレンはというと……

「ああそんなロイド様！　ダメですわ！」  
仕上がってました。

「……常時変なお前に聞くアタシがバカだったよ」

苦笑いのリホを意に介さずセレンは妄想を続行

しています。

「もうロイド様——お昼ご飯はさつき食べたばかりじゃないですか」

「え？ もう老後まで妄想進んでんの？」

「妄想ではありません！ イメトレです！ 今後  
のことをシミュレーションすることで様々な状況  
に対応できるようになるのですわ」

サッカー選手のごとくイメトレを賛美するセレ  
ン、人としてレツドカードものは欠片かけらも気が  
付いていないのが恋のフリーガンたる所以ゆえんでしよ  
う。

「イメトレが大事なら想像つくだろ！ 今日メ

ルトフアンの旦那だんなを怒らせたらどうなるか！　　つたく一体どうしたんだ旦那はよお」

その二人のそばにアランが近づき会話に入ってきます。

「決まってんじゃないかねーか、そんなこともわかんないのかお前らは」

「……盗み聞きとはなんていい趣味、気が合うなアランさんよ」

「ぜに銭ゲバ女傭兵と一緒にすんな……で、本当にわからないのか？」

あくまで高圧的な態度のアランにちよつと力チンときたりホは慇懃いんぎんぶれい無礼ぶれいに聞き返します。

「それはそれは、是非ともご教授願いたいですね」  
「たぶん例の王女探しの進展がよくないんだろ。

建国祭も近く、一刻も早く王女を見つけたい！  
だから機嫌が悪かったんだ。これはなんとしても  
見つけねば」

「……旦那がねえ、違うと思うけどよ」  
あの時メルトファンは言葉の端々から王女探し  
に乗り気じゃない空気を醸し出していました。そ  
れが引つかかり続けているリホでした。

「おっと、こんなことをしている暇なんてないな、  
そろそろ街に向かわんと」

「何だ結局あんたも王女探しに躍起やつぎかよ……出世

出世つて、どつちが銭ゲバだか」

「あいにく金のために出世したいんじゃないんでな。俺が解決するから今のうち諦めて祭りの時どんなスイーツ食べるか女の子らしく相談でもしてたほうが建設的だぜ」

そう言って襟えりを正し去っていこうとするアランの背中にリホは悪態を投げかけます。

「へ、そっちもモンスターのスィーツにならねーように気を付けるんだな」

「………っ！」

アランは一瞬ビクリとしますが無言で去って行きました。



「なんだ？ あいつも大概変だよな」

「そんなことよりそろそろ王女探しを再開させんと」

席を立つセレンをリホが制止します。

「そろそろ闇雲に探す以外に何か考えたほうがいいんじゃないか？ 策はあるのか？」

「大丈夫ですわ、今回はちゃんと毛をむしるのを控えますから」

「むしらないのは大前提だと思っただが……策でもなんでもねえし」

リホは武闘派すぎる相棒に辟易します。いつもならこんな面倒な人物突き放していますが一応件

のロイドを利用するためのキーパーソンです。根気よく相手を尊重しつつつ会話を続けようと思います。もはや接客業ですね。

「気持ちにはわかるけどよ……あたりを駆けずり回っても土地感のないアタシらじゃ大した情報は得られない、もう先輩方は何年も探してるんだからな」

「確かに……またあてもなく彷徨さまよっても無駄足かもしれないですね」

「そこでだ……最近知っただけだよ魔女のマリ——って人がいて、なんでも情報も取り扱ってるらしいんだよ。準備できたら明日にでもそこ行っ

みようぜ。王女様見つけてあのアランの鼻を明かしてやろうぜ」

「わかりましたわ、案内してくださいませ」  
セレンは納得した御様子です。  
それを受け、リホは指で小さなわっかを作り、  
いい笑顔で歯を見せるのでした。

「オツケー、その代わり情報料の支払いよろしく」  
一切いっさい悪びれない彼女にセレンは苦笑するしかありません。

「ちやっかりと……やっぱ銭ゲバですわね」

イーストサイドの暖かな昼下がりに。  
猥雑わいざつさと

淫靡いんびさに満ち溢れる印象の強いこの区も、今の時間帯はとても穏やかです。

それこそ大通りに関してはノースサイドなどに引けを取らないくらい活気に溢れています。下手な路地に入らない限り比較的安全なのですが、並んでいる品物は物騒極まりないものもあり、更には握力の強めの客引きやらお金を取る試食……まあとどのつまり『ぼったくり』も散見されます。

「……思った以上に活気があります……ところどころ胡散うさんくさいお店がありますわね」

占いから軍の型落ち品の横流し、幻の珍味やら珍品、そういった類の店が軒を連ねる中にアイス

トサイドの魔女の雑貨屋がありました。

坂道に建てられた年季の入った家屋、申し訳程度の看板、何を入れているかよくわからない色みの薬ツボ、一見して雑貨屋どころか店とも思えない……そんな店構えにセレンが言葉を漏らします。

「とても商売をやっている雰囲気ではありませんわね……よくこんな場所で情報売っているなんてわかりましたわね」

「アタシも最近知ったんだ。色んなところに顔出して顔なじみになったら教わってね……これからは当分お世話になる国なんだからコネ作つとくのは大事だぜお嬢様」

「ふうん……見た印象と違って根回しが大事なのですね傭兵は」

「自由業の最たるものだからな……逆にセレンは大雑把すぎるんだよ。軍人だつて一緒さ。下手に敵は作らないほうがなにかと得だぜ、もつと後先考えないとよ。『友達』として忠告しとくぜ」

その言葉に、セレンは腰元に束ねてある『呪いのベルト』を握り締めます。

「……後先考える必要なんて今までなかったのだから急に重苦しくなった空気を察し、リホは素直に謝りました。

「ああ悪い。ってかまだ持ってるのかその呪いの

ベルト？ 大丈夫なのか？」

「ええ……今では私とロイド様を繋ぐ大事な赤い糸ですから……この前も私の命を助けてくれました  
たし」

「……こんな禍々まがまがしい赤い糸もそうそうないな……なんかやばいオーラ放ってるし」

馴れ初め話が始まりそうだと察したりホが足早に店内へと入ろうとしたその時でした。

「お休みですわね」

申し訳程度の看板にこれまた申し訳程度に「本日休業日」と書かれた札が下がっていました。

「いや、窓から湯気が出てる。中に人がいるな」



リホの示す先には窓から料理か何かの湯気が漂い、ほんのりいい香りとともに鼻腔びこうをくすぐつてきます。

「……せっかくここまで来ましたし、時間もあまりありません。お話だけでもしてみましよう」

セレンはそう言うのとためらうことなくノックをしました。その音に気が付いたのかやがてバタバタと小走りした音が近づいてきます。程なくしてさび付いた蝶番の音とともに扉が開き、妙に馴染みのある顔が現れました。

「すいません。今日マリーさん出かけてお休みなんですよ……あれ？」

「「へ？」」

魔女の店から現れたのが素っ頓狂とんきやうな顔をした口イドだった。たので二人は面食らい固まってしまいました。

「ささ、どうぞどうぞおかけください」  
さして、そんな思考が固まった二人はというとき口イドに促されるまま中へと招かれました。彼は古書の積んであるテーブル席を手早く片付けるとお茶を淹いれに台所に向かいます。

徐々に落ち着きを取り戻したりホは「ふう」と一息つきました。

「まさかロイドが魔女のところに住んでるなんて  
思わなかったな……あのなセレン嬢、いくら恋人  
のことだからってそれくらい教えてくれよ、『友達』  
だろ？ 別に取って食ったりしないからさ……つ  
たく心臓に悪いぜ」  
リホが悪態とともに隣に顔を向けると。

「……まさかロイド様が魔女とまさかそんな同  
居まさかそんな」

もつと心臓に悪い顔をした形相のセレンがそこ  
にいました。心ここにあらず、この世の終わり、  
ソース焼きそばのお湯切り失敗、といった顔つき  
です。

「……………」

そろそろリホが自分の見通しと確認の甘さに後悔をすることとなります。「運命の人」と豪語し、ただならぬ関係と吹聴している割には色々とロイドについて知らないことが多すぎるセレンに恐る恐る確認します。

「あのさ……セレンさんよお……確認したいことがあるんだけどさ……ロイドがここにいるって知らなかったの？」

「——はい」

動揺全開のうわずった返事が返ってきました。

「じゃあ、お前とロイドの関係って本当はなんな

ん？」

「——もちろん相思相愛！ 運命の人！ 運命の赤い糸でがんじがらめに巻き付けたあと溶接して突っ張り棒で補強したかのような関係性ですわ」

「どんな耐震工事だよとツッコミたくなるリホでしたが、それをぐっところらえ、ベテラン刑事の如く、精神科医の如く流されないように淡々と問いただしていきます。

「それはあなたの頭の中だけではありませんか？ 相思相愛のロイド様は実在しないのでは」

「そんなことはありません！ 忘れもしません！ あれは一か月前のことです！」

「あゝそんな妄想ノロケ話いりませーん。質問に答えてくださーい」

「聞きなさい！ あれは私とロイド様が初めて出会ったー」

「だからそんな妄想は……え？ 初めて？」

「はい、初めてお会いしたのは一か月前のことです。その時ー」

一か月前、それは試験の前後、つまり……と、リホの中である結論が導き出されました。

（ほぼ顔見知りの範疇はんちゆうじゃないか！）

それを相思相愛と言ってはばからないセレンの思い込みにリホは頭を抱えてしまいます。ガチっ

と義手がこめかみに食い込んでしまいました。気が  
にしてはいられません。

（なんとなく見えてきた！ ロイドのとんでもない  
力で呪いのベルトの封印が解けたか何かで、そ  
れで初めて見たものを親と思うコガモのような心  
境でロイドを運命の人だと思い込み今に至るわけ  
だな！ ロイドを利用するためにセレン嬢に近づ  
いたけど全くの無駄じゃねーか！）

そんな二人の前に渦中のロイドがお茶を淹れて  
戻ってきました。テーブルにこぼさぬようゆっく  
りとカップを置きながら彼は質問します。

「ごめんなさいね、今日マリーさん留守でして



……えっと何か御用ですか？」

「そのマリーとやらの命をもらいに——」

目に光の宿ってないセレンをリホは思いっきり  
制止します。

「ややこしくなるから止めてくれ！ いえねロイド……さん、ちよっと情報が欲しかったんだ」

セレンがほぼ他人と知るやいなや、現状この化  
物に対して命の保証はどこにもないリホは一気に  
余所余所しくなりました。

制止を振り解きセレンは一気にロイドとの距離  
を詰めます。ちよっと身じろぐ彼の態度にリホは  
「勇気あるなお前……」とボソリ。

セレンはリホの言葉もロイドの機微も意に介さず声を大にします。

「ロイド様！ まだ士官学校に入りたいとお思いでですか？」

「あゝはい。今年はダメだったけど来年また――」  
セレンはズイツとロイドへ近寄ります。

「そんなあなたに！ あなたのセレンが！ 朗報を持って馳せ参じました！」

「ろゝろうほう？」

息のかかる距離で手なんか取ったりするセレン。ほぼ密着しているといつていいでしょう。

「はい！ 今街で行方不明の王女様らしき人物が

目撃されていることはご存知ですか？」

「あ、はい。噂では」

近すぎて物理的にも精神的にも喋り辛づらそうな口  
イド。「お怒りを買う前に」とリホは割って入りま  
す。セレンは若干むくれています。気がしてはい  
られません。次の瞬間、肉塊にくかいになってもおかしく  
ないのですから。

「本当か？ ロイド……さん」

「はい。でもこれといった手がかりは残念ながら  
……ごめんなさい」

申し訳ない、というロイドの顔を見てリホは慌  
ててフオローします。

「そっすか！ 気にしなくっていいっすよ！ 謝  
んなくたっていいっすよ！」

「あゝはい……あゝ、あとそんな畏かしこまらなくてい  
いですよりホさん、たぶん同じ年ですよね」

「すんませんした！ あゝじゃない！ ゴメンね！  
ロイドッ！ 命だけは助けろ！」

馴れ馴れしさを絞り出した謝罪という珍妙な態  
度のリホにロイドは柔和な笑みで対応します。そ  
こに今度はセレンが割って入りました。

「その昔失踪した王女様が敵国に政治利用される  
ことやモンスターに殺されることを恐れ最悪の事  
態が起きる前に身柄を確保したいそうです。うま

くいけば報酬として士官学校に編入できるかもつて話ですわ」

「なるほど……こんな弱い僕でも軍人になれるチャンスなんですね」

何を仰るおつしやロイドさん、と思いながりリホは三白眼で彼を見つめます。

（この期に及んで自分が弱いなんて言い張るのか……相手を油断させるための擬態ぎたいっての？ 徹底してやがるぜ）

空恐ろしささえ感じるロイドの徹底っぷり（笑）に戦慄するリホでした。

「で、ロイドさ……はもう何匹モンスターほふ屠って

るんだ」

「あはは、リホさんはやっぱ面白いなあ。倒すは疎おろか遭遇してもいないですよ。あ、そうそう、でも虫は増えたなーなんて思います。暖かくなっただからですかね。最近はなんか四メートルくらいののおっきなイナゴが湧いてますね。追い払うと灰になっちやいますけど」

（それモンスターーあああ！）

リホはセレンのほうを向いて「お前もなんとか言ってくれ」と言わんばかりの表情で目配せしますが、

「まあ、都会には珍しい虫がいるんですのね」

（だからモンスターだっての！ ツッコミ足りねえ！）

セレンにとっては白も赤も山吹色やまぶきも鈍色にびもロイドが黒と言ったたら黒なのです。変わらぬのほほんとしているロイドとセレンを睨みながら彼女は頭の中で絶叫しました。

「モンスターはもつと大きく、三階建ての家屋ぐらいになりますし、すぐ気が付きますよ。第二形態、第三形態と姿を変えるのが主流ですし——」  
やがて聞くのが怖くなったりホは胃痛を感じながらへたりこんでしまいます。

「も、いいですイナゴで……イナゴ万歳、イナゴ



「フォーエバーです」

一方セレンは恋する乙女の濁った目でロイドを見つめます。

「というわけでっ！ とりあえず親睦を深めるために近くの宿屋へ参りましょう！ そして早く編入して私と一緒にの寮に入りましょう！」

「色々落ち着け！ 色々だ！ アタシの胃がもたない！」

ほっといいたら一緒に墓に入りましょうと言いかねないセレンと、モンスターをただの虫と言いつ張るロイド……ポンコツと人外じんがいを相手にするリホは胃のあたりをさすり考えます。

（イナゴ追っ払ってたねえ……おっそろしいなオイ、モンスターをモンスターと思っっていないなんてよお、胃だけじゃねえ頭も痛くなってきやがった）

その時、腹部をさすっているリホに気が付いたロイドは棚から何かを取り出すと彼女の前に差し出します。

「あ、これどうぞ」

「何でしょう……あ、いえ、何だいこれ？」

油紙に包まれた中身は生薬の香る粉が入っていました。リホはそれを胃薬と察するとロイドに問いかけます。

「……………いいのか？ もらっちゃってさ」  
その問いに、いつもの柔和な笑みを携たずさえてロイ

ドは即答します。

「ハイ！ だって友達じゃないですか」

「……………あん？ 友達？」

その友達という単語にリホは怪訝な表情を  
しました。元々彼女は傭兵であり付き合う人間は基本  
ギブアンドテイク、便宜べんぎを図とつてもらうことはあ  
つても無償で何かをもらうということは今まで一  
度もありません。ましてや試験会場で一度会った  
きりの自分に……………そう考える彼女は色々と考え込  
んでしまいます。

（友達ってことはアタシに利用価値があると踏んだ……一体なんだ？ 戦闘面は足元にも及ばないし……まさか体目当て？）

彼女の友達の定義がギブアンドテイク、つまり体という発想に至るのでした。

（こんな貧相な三白眼の義手女に……いや、まて！  
そーいや最初話しかけられたよな、義手カツコ  
いいですか……まさかそーいう性的嗜好しこう？ 貧  
乳好きか！）

そー思ったリホはちらりとロイドを見やると、  
彼は包みを開かず固まるリホの顔を心配そうに覗  
き込んでいるではありませんか。

(……そう考えてみると貧乳好きそうな顔に見えてきた)

どんな顔だと小一時間問い詰めたいですね。さあ、その裏のない慈愛に満ちた表情にリホはそう考え始めました。まあ人間追いつめられると正常な思考回路が飛んでいくことはよくありますし。

(まさかこんな貧相な自分の体がアタシを救ってくれるとは！ ありがとうこんな体に生んだ両親！ ありがとう貧乳の神様！)

さらにとんでもない偶像崇拜すら行い始める次第でした。まあ人間追い詰められたら以下略。

そんな信者が無駄に結束の固そうな事案の塊の宗教を信仰し始めるリホに対し、貧乳好き（笑）な顔を覗き込ませロイドは心配します。

「ほ、ほんとに大丈夫ですか？」

「あ、ああ、大丈夫だ。今ちよつと両親と貧乳の神様に感謝を捧げていたところだ。両方とも会ったことないけどな」

貧乳の神様という謎フレーズに若干引っかかるロイドですが、もう一つ気になる点を彼は聞いてきました。

「ひん……あ、いえ。両親に会ったことないって？」

「ああ、アタシ孤児<sup>こじ</sup>なんだ」

しれっと言いうりホに対して申し訳なさそうに口イドが頭を下げました。

「そ、そうですね。変なこと聞いて」

「あーいいのいいの。もう気にしてねーし生きる  
ので精一杯だからさ」

そんな気に留めてない彼女を見てロイドは心底  
よかったといった表情です。

「よかった……でもなんとなくわかりましたりホ  
さんにシンパシー感じてたのが」

「うん？」

シンパシーという単語にりホは聞き返します。



ロイドは照れくさそうに答えました。

「あ、僕も両親いないんですよ。一緒ですね。それで故郷の村の人たちに拾われて育ちました」

「……そ、そうなのか」

ロイドの表情に嘘はついていないのだろうと感じたりホは所在なげに頭を掻き始めました。

そしてすぐに自戒します。

（いやいやいや騙されるなりホ・フラビン！ 自

分と同じ境遇だっって言って親近感を誘うのは詐欺さぎの常套手段じょうたうしゅんじゆんだろう！ そうやって簡単に人を信じ

てどうなっただか忘れたのか！）

無自覚痛。感覚のない義手の指先がズキリと痛

みます。

（冷静に考えろ、この小悪魔じみた無垢な笑顔、あどけない声音、ぎゅつと抱きしめたくなる小動物的な体軀！いきなり友達と言って懐に入り込んでくる可愛らしさ！すべて相手を油断させる擬態だ！何よりこんな貧乳が好きそうな表情な<sup>いつちよういつせき</sup>んて一朝一夕でできやしない！）  
疑心暗鬼に苛まれたりホは慎重に言葉を選んで対応します。とりあえず断つたら後が怖いと思い胃薬を受け取るに至りました。

「ありがとうございます！本当にありがとうございます！大事に飲みます！五臓六腑ごぞうろつぷに染みわたらせます！」

卒業証書を受け取るように腰をくの字に曲げて  
両手で胃薬を受け取ります。その大仰おおぎょうな姿勢に口  
イドは勘違いをします。

「そんなに胃薬欲しかったんですか？　じゃあも  
っと持ってきてきますね。その薬、マリーさんお手製  
の胃薬だからよく効きますよ。ちよつと奥の部  
屋から取ってきてきます」

いそいそとロイドは奥の部屋へと向かいました。  
どつと汗の出るリホは椅子に全身を預け12ラウ  
ンド戦ったボクサーのように燃え尽きていました。  
（………）  
………こんな化物と住んでる情報屋つ  
てのは一体どんな面してるんだ……いやとにかく

情報引き出して逃げ出して……ロイド君編入させて恩を売って……いや、触らぬ神に崇たたりなし、報酬は自分のために使うのがベストか？

すべての計画が頓挫とんざしたりホは今後の身の振り方を思案しながら情報屋が来るのを待つことにしました。

しばらくくするとリクエストに応えたかのようにマリーが帰ってきました。黒のローブととんがり帽子、高価そうなブローチに加えオリエントルな装飾で雰囲気たっぷり、ひと目で魔女という出で立ちの女性です。

しかしその口から出る言葉は魔女というよりは仕事帰りの女性会社員のような軽口でした。

「いやーまいったまいった全く成果なし。ま、そんな日もあるわねーっと。でもいいわ、今日も口イド君の作ってくれた料理が私を待ってるんだもの。そんでこの前買ったエールを氷魔法でキンキンに冷やして……くう！  
真昼間まっぴるまからエールなんて魔女最高ーうん？」

……失礼、仕事帰りのおっさんです。しかし彼女が意気揚々ようようと店に戻ると、そこには閉店中にもかかわらず妙な来客が二名、椅子に座っていたのですから目を丸くしてしまいます。

奥のほう、胸元の空いた色っぱい三白眼の瘦身そうしん女性  
は軽く会釈をします。そちらはいいのですが  
問題は手前に座る端正たんせいな顔立ちのブロンド女性で  
した。

「スミマセンオジヤマシテマス」  
ブロンドの女性……セレンは無機質にそう言う  
と「クチィ」という音とともに無理やり口角を上  
げました。目は笑っていません。むしろ淀よどんだ深  
い闇を携えています。

「え、あ、はい……」

えも言われぬ圧と底知れぬ闇に、マリーは家主  
なのに居心地が悪くなります。

「立ち話もなんですし……ドウゾオカケニナツテ  
クダサイ」

立ちすくむマリーに座るよう促すセレン、本当  
にどっちが家主かわからない状態です。

「あ、すいません」

全くもって現状がよくわからないマリーはすご  
すごと椅子に座ろうとしました。

コキコキコキコキ………

マリーの動きに合わせてセレンの首が機械のよう  
に音を立てて動きます。マリーは思わず短い悲鳴



を上げてしまいました。

（え？ 私何かした？

完全にターゲットロック

オンされてる？）

身に覚えのない殺意か何かによりマリィは「まさか、偶然そう動いただけよね」と思い、試しに体を左右に動かしてみます。

スツスツ

コキコキ

セレンの首がマリィの動きを完全にトレースしています。

(……………いやいや！ 私なんにも恨まれるようなことしてないわよ！ これは何かの間違いよ！ たまたま私の動きに、 たまたま首が左右に動いただけ！)

もう一度、偶然であることを願いながら、今度は全力で何度も体を左右に動かしてみます。

スツスツスツスツス……………

「何なさっているんですか？ 早くお座りください

い」

「あ、はい」

妙な動きをたしなめられマリーは即座に席に座ります。悪ふざけして怒られている生徒よろしく、彼女が手汗をローブで拭ぬぐいながら妙な空気にいたたまれなくなっている時でした。

「あ、マリーさんお帰りなさい」

ようやく知った人間、ロイドが自室から現れます。

「ロイド君！ た、ただいま！」

マイホームなのにアウエーの空気を感じまくっていたマリーはその見慣れた純朴な少年の登場につい嬉うれしくなつて駆け寄ろうとしました。

「座ってください」

「あ、はい」

そしてなぜか一層深くなるブロンド女性の間にマリーは怯え<sup>おび</sup>、俊敏に椅子に座ります。

妙な間が支配する空間、気を利かせたロイドは共通の友人として二人の紹介を始めました。

「あ、こちらのほうは友達のリホさんとセレンさんです」

「えーとリホです」

リホは控えめに会釈します。マリーに対し値踏みするような視線ですが……それより気になるのはもう片方です。

「ドウモ、『友達』のセレンです」

セレンは友達と言われ乾いた声音で自己紹介し

ました。こちらは値踏みどころか闇を抱えた視線です。

彼女の敵意や闇に疑問を抱きながら、マリ―も自己紹介します。

「ど、どうもマリ―です。イーストサイドの魔女なんて呼ばれています」

「なるほど、マリ―さん death (死) ね」

「はいマリ―です。セレンさん」

「そしてイーストサイドの魔女と呼ばれているの death (死) ね」

「―あのセレンさん、ちよくちよく『です』が別の意味に聞こえるんですけど、『死ね』的な意味の

に」

口元を歪めセレンは否定します。

「それは気のせいだと思いますわ……」

「あ、そうですね……気のせいですよ」

「ところで魔女裁判はいつ頃のご予定ですか？」

（気のせいじゃないっ！ はつきりわかった！

完全に殺意剥むき出しだ！ え？ なんで？ もし

かして昼間から酒飲むのが逆鱗げきりんに触れたの？）

困惑するマリィを見て話が進まないと感じたり  
ホはセレンを制して仕切り直します。

「はいはい、そこまでだセレン嬢。あのな魔女さん、  
アタシたちは上からの依頼で人探しをしていてさ、

ちよつとばかり情報を買いたいですよ」  
マリーはそう言われると徐々に落ち着きを取り戻していきます。

（上？ 情報？ そういえば……）

セレンの闇に気圧されて気がつきませんでした  
が、よくよく奥のリホを見ると着崩してはいますが  
立派な士官候補生の軍服を着ています。そしてな  
んで気が付かなかっただらうと思うくらい無骨  
で大きな義手が目に飛び込んできます。

「女傭兵のリホ・フラビンさんと……もしかして  
呪いのベルト姫のセレン・ヘムアエンさん？」  
「へえ、アタシらのフルネーム知ってんのか」



「このくらい情報屋じゃなくても知ってるわ。メルトファ  
ン大佐に声をかけられた子たちよね」

「そこまで知ってるなら情報屋として期待できそ  
うだな」

リホと会話をしているうちに徐々に彼女の魔女  
らしい仕草が戻ってきました。ほんのりきょうごきょうご仰々しい  
仕事用のマリーになっていきます。

「色々気になる点はあるけれども、お客様なら話  
が早いわ。ウチのロイド君の友達でもあるようだ  
し……いいわ、用事も終わったし今日は営業再開。  
特別に導いてあげるわ」

「マジか！ ついてるぜ！」

リホの喜びをたしなめるかのようにマリーはいつもの口上を述べ始めます。

「ただし、古来より魔女とは望みに応じた相応の対価を求めるものよ。この言葉を聞いてもなお求める情報は何かしら……後悔のないようにね」

「お、わかってるじゃないか。古来より情報料つてのはネタの活き次第で上下するつてもんだよな。ますます期待が持てるねえ」

「あ、うん」

魔女の脅しおど文句が交渉上手な情報屋の謳いうた文句みたいな扱いをされ、でも褒められているからなんも言えないといった複雑な表情のマリーにリホ

は胸元から一枚の写真を取り出します。

そこには幼き頃の王女——つまり十歳前後のマリー——が描かれていました。

「この人を探してるんだけど」

「……………」

マリー——の顔から複雑な表情すら吹っ飛びました。  
あるのは『無』だけです。

「あの？ 魔女さん？」

「やっぱ今日は店じまいで」

無表情のまま逃げようとするマリー——にリホは食  
つてかかります。

「ちよつとオイ！」

なんだもったい勿体つけて特別云々言

ってただらうが」

「きよよ、今日はあれよ！ いいネタが仕入れられなかったのよ！ だから都合につき臨時休業なの！ 気分がのらないの！」

頑固親父のラーメン屋の「今日のスープはイマイチだから店開けない」レベルの無茶な言い訳を押し通そうとするマリィ、魔女らしい仕草は速攻消し飛びました。

そして彼女は見苦しさ満点の言い訳の後、すべてを理解し頭を抱えたのでした。

（わかった！ このセレンって子がガン見してるのが！ 完全にバレてるんだ！ そんでもって最

近戦争を起こそうとしている王家の政治に憤りしきどおが積もりに積もって殺意になってるのね！しかも国が大変なのに昼間っからエールをあおろうとしてるんだもの！キレるわそりゃー！

無論セレンの脳内は政治スペース皆無で、ぎっしり薄皮あんぱんのアンコの如くロイドへの甘い想いが詰まっています。

そしてリホの訝しげな視線を意に介さずマリ―は逡巡していました。

（流石に建国祭の前に……Xデーを迎える前にバレルわけにはいかないわ！まだ例の黒幕がはつきりわかっていないというのに！自分の存在が

バレてしまっっては！)

「そんな言い訳が通用……あのーマリーさん？」  
呼びかけにも答えずマリーは逡巡しています。  
(全力でごまかすしかない！ 希望は捨てない！  
私ならできる！ あのロリババアのもとで辛抱  
してきたあの頃に比べたら………)

「もしもーし。いきなり頭抱えてどうしたんだ魔  
女さんよお」

「大丈夫よ女傭兵さん、希望はまだ捨ててないか  
ら」

「希望……まあいいや……とりあえず情報持つて  
るかどうかくらいは教えてくださいますよ」

マリーはメガネを直し息を整えると精一杯冷静な顔で答えます。

「残念ながら行方不明の王女の情報は扱ってないわ」

「……………王女なんてひと言も言っていないんすけど」

希望は一瞬で雲散霧消うんさんむしようしました。

机に顔を突っ伏すマリー、何かに感づいたりホは軽く「ふーん」と唸ります。

そこにセレンが割って入りました。

「まありホさん、知らないって言っているならし  
ようがないですわ」



「ちよ、セレン嬢……こんな露骨に――」

次の瞬間ギリギリと歯ぎしりしながらマリリーを睨<sup>ね</sup>め付け始めます。血涙でも流さん勢いです。

「それよりも、私、マリリーさんのことが非常に気になるんです。マリリーさんの今の生活、家庭の事情とか………ホーンニンノクチカラジキジキニ」

（バレてる！ 絶対に王女ってバレてる！ 家庭の事情とか気になってるもん！）

圧倒的な闇の圧力に一瞬でマリリーの背筋が伸びました。そして気力を振り絞りなんとかごまかそうと手を揉み始めます。

「あ、あたしはしががないイーストサイドの魔女でゲス。そ

れ以上でもそれ以下でもないでゲス」

「いきなり露骨に語尾変えましたたよね……何か心当たりでも？ それとも……」

狼狽<sup>うろた</sup>えるマリィを横目にリホはニヤリ。

「もしかしてご本人様だとか？」

その時横からロイドが写真を覗き込み柔和な笑みで会話に入ってきました。

「うーん……似てるかもしれませんが……この人、王女様なんですよね」

「あ、ああ。行方不明の王女様だ」

写真をまじまじと見つめるロイド、しかし納得いかないといった表情です。

「言われてみたら似てるかも……でもマリーさんが王女だなんて僕には思えないですよ」

「あらロイド君、私がそんなにガサツってこと？ まったくもう失礼ねっ」

マリーは口でたしなめながら笑顔で両手の親指を立てています。

「言葉と表情があってないツスよ」

リホのツツコミの後ロイドはさらに続けます。

「ふふ、この前なんか酔っ払って台所とお風呂間違えそうになってローブ脱ぎうとしちゃうし、うちの村長に全力で土下座したり頻繁にコーヒーを口や鼻から吹いたりしてるし……顔拭いてあげた

り掃除とか洗濯が大変なんですよ、そんな人が王女だなんて」

「そ、そうよ、こんな私が王女だなんて」

「涙目ツスよ」

色々王女どころか女性らしからぬ悲しいエピソードトークが繰り広げられましたが一

「……………」

その話を聞けば聞くほどセレンの闇は深くなっ  
ていきました。彼女からしてみれば甘い生活のノ  
ロケ話を想い人の口からガツツリ聞かされたよう  
なものです。

「随分と楽しい生活を送ってらっしやるようで

……ちなみに（ロイド様と）ここに住んで何年で  
すか？」

マリリーの耳にはその言葉が「王家のくせに何年  
遊び呆<sup>ほう</sup>けているんだ」という言葉に聞こえ、申し  
訳なさそうに答えます。

「に、二年です」

「二年！ 二年も！ そんな（新婚のようなラブ  
ラブ）生活を！」

深い闇のようなセレンの目から涙が浮かび始め、  
こらえきれず台所へと飛び出していきました。そ  
の悲しげな表情にマリリーはいたたまれない気持ち  
になります。

（そうよね、行方不明になつて五年くらい、ここに住んで二年、民衆からしたら戦争を望む王家の人間がのうのうとしているようなものだもんね……失望もするわ……とても国想いの子なんでしようね）

当然セレンはロイドに実害がなければ王政の失態なぞファミレスの店員のオーダーミス程度にしか思っていないませんが。

さて、その様子を眺めているリホは会話が噛み合っていないことに気が付いていました。そして台所で顔を洗っているセレンに聞こえないようマリーに質問します。

「で、ロイド君はいつからここにやっかいご厄介になつて  
んですか？」

「えっと軍の試験前……」か月半くらい……」

「やっぱそんな感じか……どういうご関係で？」

「甥おいっ子みたいなもの……私のししやう師匠のお孫さん  
のよう……」

「甥……ありがとうございます」

リホはそれだけ聞くとロイドは本当に何も知ら  
ないんだなと察します。ちよūdそその会話が終わ  
った頃にセレンは目を腫はらしながら戻ってきまし  
た。

「憎いです。あなたのご……でも、はつきり



とあなたの口から本当のことを聞きたいんですの……正直にお答えください」

セレンの覚悟が伝わったのか、マリーも本当のことを打ち明けようと覚悟を決めました。

（民の声に正直に答える……そして本当のことを言えばあと数日黙っててもらえれば……）

「お茶ウマイ」

一方リホはこの茶番早く終わんねーかなと思っ  
ています。ロイドもよくわからずきよんととして  
いるだけです。

「わかったわ、嘘偽りなく正直に答えます……」  
今までにない静謐せいひつな雰囲気を纏い出すマリー、

それに何かを感じるのか胸元をギュツと握り締め  
セレンは眼差しを向けます。

「あなたは――」

「そう私は――」

「――ロイド様のお嫁さんですか？」

「おうじ――オウ？」

なんとも言えない空気が部屋中に漂いました。  
外の喧騒だけがその場に流れます。

「あのセレンさん？　何言ってるのかよくわから  
ないのだけけど？」

「このタイミングでとぼけるとはなんてドロボー猫っ！正直に話すと言っておきなから！私に謝るなら今のうちですわ！そしてロイド様！私に過ちを犯すなら今のうちですわ！」

もはやなりふり構わぬセレンです。胸元のボタンをものすごい勢いで外していきます。

「さらっと何言ってるんだセレン嬢！」

略奪愛（笑）を実行せんと脱衣に勤いそしむセレンをリホが制します。その傍らかたわでロイドが小首をかしげました。

「え？あやま？え？」

「あー聞き流してください！なんでもありません

ん！」

「そうですね？ あ、そうだ！ お茶温め直してきますね」

話が長引きそうと察したロイドは気を利かせ台所へと向かいました。大事な話をしている夫に気を使っつて席を外す妻のような振る舞いのソレです。その背を見送った後、リホはセレンを慣れたように諭さとします。

「あのなあセレン嬢、この人はロイドの親戚みたいなもんだ」

「なんてこと！ 親戚同士で！」

「違う違う、つまりここはロイドにとって上京先

で厄介になつてる親戚の家だ」

「でも二年つて」

「それはこのマリィさんがここに住んで二年だ！

ロイドは一か月前からだ！」

「でも！ それでも三十回以上もチャンスがあつて何も無いなんて！」

「何のチャンスだ！」

「だつたらなんで自己紹介の時に過ちは犯していませんと言つてくれなかつたんですか？」

「言うか！ お前だつて『どうもロイド様と一線を超えてないセレンです』つて言わないだろ」

リホの怒濤どとうの説得によつやくセレンが落ち着き

始めました。

「そうですね、一線を越えていたら『どうも口イド様と一線超えた女、セレンです』って言いま  
すもんね」

「うん、社会的も一線超えてるけどな、その自己  
紹介」

徐々にセレンの目に光が戻ってきます。そして  
彼女は申し訳なさそうにマリリーに向くと精一杯の  
謝罪をしました。

「誤解してしまい申し訳ありませんでした」

「あ、いやこちらこそ………なんかごめんね。甥おいみ

たいなもんだから、あの子」

そして和解した二人は「フフフ」と笑い合います。そしてその横でリホも「フフフ」といやらしい笑みを浮かべてマリリーの肩に手を乗せます。もう片方の手で例の写真をヒラヒラさせながら………

「で、本題なんスけど、この人知ってますう？」

「………」

墓穴を掘るまで泳がせたりホ、墓穴を掘り倒してしまつたマリリー、勝敗は決していました。

「さつき『おうじ』まで言いましたよね。あと一文字言つちやつてもいいんじゃないですか？」

「……もしよろしかったら手がかりだけでもいいんですの」



セレンの真剣な（闇を携えていない）眼差しに何かあるなとマリリーは考えます。

「上の指示とはいえ、なんでそこまで必死なのかしら？ よかつたらわけを聞かせてちょうだい」

「それを報告したらロイド様が士官学校に編入できるとは」

マリリーはリホのほうを向きます。彼女は無言で頷きました。

「嘘ではないのね……いい友達を持ったもんだわ」  
「もちろん私は友達のかげにとどまるつもりなんて毛頭ないですわ」

マリリーが色んな意味でどうしたものかと考え出

したその時です。

「おじやましまーす！ 魔女いるか！」

入口からやけに横柄なチンピラが二人、ノックもせずに見れました。二人とも転んで怪我したように肩や手に包帯を巻き付けています。

そう、ひと月前ロイドをカツアゲしようとして逆に返り討ちにあったあのチンピラです。と言っても当然の本人はケガを負わせたなんて欠片も思っていないませんが。

マリーは怪訝な顔で対応します。

「薬を買いに来た……って感じじゃないわね」

「あん？ いるじゃねーのよ！ だったら休業の

看板なんて出してんじやないっての」  
チンピラに聞こえるようにリホはマリーに話しかけます。

「薬なんて買うわけないじゃないですかマリーさん、バカに付ける薬はないんですから」  
ちよつしよつ

ちよつしよつ 嘲笑を向けられたチンピラは一瞬で激高しますが、後ろの舎弟しやていらしきぼうが兄貴分を抑えます。

「兄貴！ 兄貴！ こいつアレですぜ！

あくみよつ 悪名高

い女傭兵のリホですぜ！ やべえ奴です」

「ああ！ だからどうしたってんだ！」

「それにその横は……あの呪いのベルト姫ですぜ、サウスサイドやノースサイドで人探しと言いなが

ら男のムダ毛をむしり取るって噂の」

「ああ！ だからどうしたってんだ！ 逆に興奮するわ！」

「俺もです兄貴！ 逆にやべえ奴ツス」

「な、セレン嬢、聞き込みの際はフツー毛をむしらねーんだ、あーいうのがいるから」

「肝きもに銘めいじますわ」

なんともずれた会話にマリーは戸惑っています  
がチンピラはお構いなしにまくし立てます。

「とにかくよお情報もらいに来たんだよ！」

そしてチンピラは懐から一枚の写真を取り出します。そこには――

「「「え？」」」

三人は驚きました。なぜならリホの手にあるものと全く同じ写真だったからです。

チンピラもそのリホの手にある同じ物を見て、どうやら察したようです。

「へ、てめえらも奴から王女探しの依頼を受けたんだな。こいつは好都合だ！ お前らの知ってる分も洗いざらい喋ってもらうからな！」

どんどん盛り上がる兄貴分を舎弟が必死に抑えます。

「兄貴！ 無茶ですって！ 俺たちまだ完全に怪我治ってませんし！」

弱気な舎弟を兄貴分は叱咤しつたします。

「バツキヤロー！ 何ビビってんだよ！ 俺たちはもつとヤベー奴に喧嘩売って生きてたじゃねーか！ 忘れたのかあの時のことをよー！」

「忘れねえっす！」

「ああ、あれはとんでもなかった。恐ろしい奴だった。人に怪我を負わせることをなんとも思っていないような顔だった。忘れねえよ！ 恐怖って一周すると神秘になるんだな！ 最初は何かと思っただぜあの感情はよ！」

「俺の肩も一周以上しましたしね……」

「でも生きてます！俺たち！生きてるんです！つまりなにも怖くない！」

勝手に盛り上がるチンピラを前にして、マリィは劇団員の小芝居を見ている錯覚に陥ります。ひとしきり盛り上がった後彼らは三人に向き直ると戦闘態勢に。

あくどい顔で懐からナイフを取り出しジリジリとにじり寄って来るのでした。

「というわけだ、俺らはもう『あの子供』以外は怖くねえんだ！はっきり聞き取りやすい口調で喋りやがれ！」



「そうだ！ おとなしく王女の情報を聞いてもないのにベラベラ喋りやがれええ！」

その決意の雄叫びおたけに誘われて、台所から『あの子供』がお茶を温め直して現れました。

「あれ？ またお客さんですか？」  
ズサアアアアア

それはもう見事な土下座だったそうです。

部屋の隅の板の間に、正座でチンピラが固まっている姿を、お茶をすすりながら、セレンらは眺めています。そんなセンスの欠片もないオブジエにリホが話しかけます。

「で、なんでお前らチンピラ風情ふぜいが王女を探して  
るんだ？ 奴つて何よ？」

「依頼をつ！ 顔を隠した男からつ！ 受けまし  
たっ！」

はつきり聞き取りやすい口調で兄貴分が応えま  
す。

「なんでもいいっ！ 見つけ次第、連れてこい！  
死体でも構わないとっ！」

今度は聞いてもいないのに舎弟のほうから不穏  
な単語が飛び出してセレンは顔色を変えます。

「死体でも……ですか？」

「はいっ！ 確かにっ！ それにそれだけじゃナ

イツす！」

「俺たち聞いてしまったんですっ！ 依頼を受けた直後っ！ 依頼人の独り言をっ！」

そしてチンピラたちはベラベラとその時の様子を小芝居を交えながら語り出しました。

「今王女に復帰されては困る、万全のため手は打っておかねば……」

その言葉を聞いてマリイの顔色が変わります。椅子から飛び上がりチンピラに詰め寄ります。

「他には何も言わなかったの？ 見覚えのある男？ なんでもいいから気が付いたことを教えてちょうだい！」

「他には……うわごとのように同じ言葉を繰り返してましたっ」

チンピラが「せーの」で声を揃えて言います。

「この国の平和のために」

「……それって」

リホとセレンが言葉を失っている間、マリーはチンピラに帰るよう促します。

何度も何度も頭を下げながら出ていくチンピラを見送った後、言葉を失っている二人に向き直りました。

「今のチンピラに王女を殺してもかまわないと依頼した奴に心当たりがあるのね」

「まあ……でもよアタシらは保護目的で依頼受けてんだ。殺すなんて毛色が違いすぎる。」  
リホは焦りの表情を隠そうとしません。それはセレンも同じでした。

狼狽える両名の前でマリ―は顎に手を当て頭の中を整理するように独り言ひとりごとちます。

「おそろくそいつが戦争を引き起こそうとしている張本人か……殺しても構わないのは王様を操っている今、戦争反対派の象徴として利用させないため……開戦かいなか、事態は拮抗きつこうしているよね……これはチャンスというべきか」

不穏な単語がつらつらと口から漏れるマリ―に

他の人間は呆気あつけにとられます。

「戦争反対派？　話が全く見えないんだけどよお

……」

「申し訳ないんだけどその人物を教えてほしいの。  
是ぜが非でも教えてもらおうわ」

有う無むを言わさぬ、その態度に気圧されながらリ  
ホは負けじと顔を近づけます。

「つつたく……人に物頼むんだっいたらまず自分が何  
なのかはつきり言っってくださいよ」

「薄うす々うす気が付いているでしょ女傭兵さん……私の  
正体」

リング中央のような睨み合いの中、場にそぐわ

ぬ弱気な声が二人にかけられます。

先ほどまで黙っていたロイドがおもむろに口を開いたのです。

「ごめんなさいマリーさん。僕もマリーさんの正体に薄々気が付いていました」

「ロイド君？」

「もしやとっと思っていましたが……今まで確証がなくて言い出せなかつたんです。マリーさん、いえー」

どことなく恐れ多いといった態度のロイドにマリーは戦慄します。

(……まさかロイド君にも私が王女って気付



かれた？)

写真に王女探し、そして戦争の話。この一連の流れではバレてしまっても致し方なし、頭でそう考えるマリリーですが腹をくくれないでいました。

理由は単純です。この関係を保ちたい……身分がバレることでもロイドの接し方が変わってしまうことが嫌なだけです。

「……あのねロイド君」

身分の差はあれど今まで通りに接してほしい。そう告げようとしたマリリーは――

「この国の英雄……救世主マリリーさん」

「ダレソレ」

――斜め上の謎の単語に白目を剥きました。

予想外すぎて感情の乗らない片言のマリーーに対し「ごまかさないでください」とロイドは一蹴し自身の迷推理を披露し始めるのでした。

「隠さないでもわかるんです。大工さんもイーストサイドの救世主って言っていましたし……」

(棟梁とうりょうっ！ ややこしいことを！ コンチクシヨウ！)

頭の中に浮かんだ、あの笑顔で茶をすする好々爺こうこうやにマリーーは悪態をつきます。

「それだけじゃないんです。最近買い出しとかこの国の色々な所を回って誰かがこの国の為に陰で手を尽くしているって噂を耳にしていました」

（それ大体君よね）

運河や街道を人知を超えた力で復旧させた話を直接本人から聞いたマリ―は半目で無自覚ぼくとっ朴訥少年を見つめるしかありませんでした。迷推理はなおも続きます。

「確証を得られたのはモンスター―の件です。なぜか僕の行く先々でモンスター―が倒された跡が見つかっているんです。一度も襲われなかつたどころか見かけたこともなかつたのも、これはきつとマ

リーさんが僕を助けるために毎回先回りしてくれていたんですよね」

（それ完璧君よね）

そりゃモンスターをモンスターと思わず害虫感覚で退治していたら、行く先々でそんな風になるでしょう。推理披露を終えたロイドは姿勢を正すと丁寧に頭を下げ協力を申し出ます。

「お願いします！ 僕マリーさんに助けてもらった恩返しがしたいんです！ できることならなんでもしますから！」

そしてマリーは頭を抱えます。「なんでも」に反応して後ろでセレンが鼻血を出していますすが気に

してはいられません。

本当ならぎゅっと抱き締めてありがとうと囁ささやきたいマリーですが躊躇ためらってしまいます。アルカにカエルに変えられる恐怖もありますけど……

（利用したならロイド君は村に連れて行かれてしまう。この子の夢が絶たれてしまう……いえ）

目をつぶり嘆息しながら自分の気持ちに正直になります。

（ロイド君と一緒にいたい……か）

そうです。一番の理由はロイドと離れたくないことでした。ほんのひと月程度の間柄ですがマリーは完全に情が移っています。

（どう説明したら納得してくれるかな。まず自分が規格外に強いということを自覚させて、それを利用しちゃダメとあのロリババアに恐喝きょうかつされてるって……今日中にできるかしら？）

と、途方もない苦勞がいると察したマリィは苦肉の策とも言えるある行動に出るのでした。

「バレてしまったわね。そうよ、私が巷ちまたで噂の英

雄……勇者マリィよ」

ある行動、それは説明など面倒事を一切放棄しロイドの勘違いに全力で乗っかることでした。

「その救世主な私の見立てでは……あなたは力不足なの」

遠回しに諦めてほしいマリリーに対し、ロイドは真摯に思いの丈をぶつけ出します。

「僕は確かに非力です。でも僕の目指すカッコいい軍人はこんなことを聞いて見過ごせない人だと思っんです！ 何ができるかはわかりませんが！」

実際一緒ならお釣りが出るくらいなんだけどね、とマリリーは胸中で苦笑いします。

なおも真剣な眼差しで助力を申し出るロイドです。かわいい視線がマリリーの胸に突き刺さります。巨乳のチラ見とか性的な意味ではないですよ。真摯な眼差しで見つめられる彼女は身勝手な自



分を嫌悪しながらも救世主を演じます。

「気持ちには嬉しいのだけど来てはダメ……あなたでは力不足よ。『イーストサイドの救世主』として忠告するわ」

「でも……こんな話聞いて何もできない自分が嫌なんです……わかっています！自分が何の役にも立たないってことぐらい！それでも——」

（全くわかっていないじゃないの、役に立ちまくっているわよ馬鹿）

マリーは心の中でそう思いながらそのいら立ちを別の意味に置き換えてロイドを睨みます。

ロイドもまた負けじと真摯な目でマリーを見据

え言葉を続けます。

「それに王都に来て僕はマリーさんに何度も助けられました！ お世話になりました！ そんな大切な人が困っている時に助けられないのは男として嫌なんです！」

（何言ってるんのよ……助けられてるのはこっちのほうよ……）

父を取り戻すため一人身を隠し機会をうかがっていたマリーにとって弟のようなロイドの存在は久しく忘れていた「家族のぬくもり」を思い出させてくれたのですから。

更には炊事すいじに掃除、洗濯といった家事全般から

お金の管理までやってくれていたことも……  
(もう完全にヒモじゃない！)

胃袋と財布の紐を掴まれていることを実感したマリ―は両手で顔を覆い嘆きます。その嘆きを勘違いしたのか、さらに語気を荒げてロイドは食い下がります。

「なんでもします！　こんな時何もできないなんて僕は……」

伝家の宝刀「なんでもします」の連呼にマリ―はとうとう怒った口調になりました。

「そういうことを言えばいいって思っているの？　なんでもやります。頑張りますで自分の意見が

通ると思っっているの？ そんなことばっか言っ  
たら悪い人間に色々されちゃうわよー！」

「私は悪い人間ではないから色々やっても問題な  
いですわよね」（セレン）

「悪いぞ、頭がな」（リホ）

ギリと奥歯を噛み締めマリィは心の底から吐き  
捨てる気持ちで言い放ちます。

それはロイドに対してではなく。

（本当に……最低ね……）

マリィ自身に対してでした。いつもの弱気を必

死になつて抑え込んで決意をあらわにするロイド、彼の成長の芽を摘むような行為だからです。

「……僕は」

「あなたに來られると私が迷惑なの……」

本当は來てほしいマリリーの辛さを曲解したのが、ロイドはうなだれ扉のほうへと歩いていきます。

「ロイド様？」

セレンの呼びかけにもロイドは目を伏せたままです。擦るほど重い足取りで店の入り口に歩いて行きました。

「ごめんなさい、ちよつと頭冷やしてきます。本当に……ごめんなさい」

いつもの柔らかな雰囲気は影を潜め、ほの暗い冷たさすら感じる声音でロイドは外へと出て行ってしまいました。

ばたりと寂しげな音を立て閉まる扉。マリーはそれを物憂げものうに見送った後、深呼吸して気持ちを切り替えます。

「で、申し訳ないんだけど色々と聞かれた以上あなたたちには協力してもらおうわ。王家を利用し戦争を引き起こそうとする不逞ふていの輩やからの排除ね——」  
とんがり帽子を脱ぐマリー。そこには写真の少女の面影を残す人物が立っていました。

「アザミ王国の王女、マリア・アザミがお願いします

るわ」

「王女様……ですの」

「この流れで気が付いてなかったのかベルト姫……まあいいや」

三白眼をひっさげリホはマリーに近寄ります。

「やっと正直に言ってくれたな王女様。でもよお腑ふに落ちねえ点が山ほどあるんだ。それ片付けなきやいくら王族でも協力はしないぜ」

「いいわ、まず戦争反対派や一連の——」

「んなの後回しだ！　なんでロイドの協力を断つた！　嘘ついてこき下ろしてまで！　目に涙浮かべてたぜ！　同居までしている人間があいつの強



さ知らないわけないだろ！」

「そうですねわ王女様！ ロイド様がいれば百人力！ しかもなんでもするなんてこんな素晴<sup>す</sup>ば<sup>ば</sup>しいキャンペーンを見逃すなんてそれでもあなた王族ですよ！」

「あーセレン嬢……怒るポイントが違うぜ……」  
別ベクトルの憤りのセレンにリホがツツコミます。

その光景を見てマリーはちよつと笑いました。

「悪名高いと聞いていたけど存外優しいのね……」

ロイド君のために怒ってくれてありがとね」

自覚のあるリホは「なあっ！」と大げさに反応

してしまいます。

「色々あるのよ。一個一個教えていくわね……実は――」

沈痛な面持ちでマリィはロイドがコンロンの村の出身であることを二人に告げます。

険しい顔で聞いていた彼女らも面食らった表情に早変わり、そしてその驚きの表情も彼の心当たりありすぎる人並み外れた素行にすぐさま得心した顔つきになりました。

「というわけで、彼を今回の件に関わらせたら私カエルにされちゃうのよね」

「別にカエルになっても問題ないではないですか。

むしろ水陸両用になれる、かつ皮膚呼吸、肺呼吸と選べるようになって、さらには両生類として男女問わずより取り見取りとざっと六倍はお得になりますわ、だから今すぐロイド様を連れ戻しななくてもしてくれるそのなんでもについて一晩じっくり問い詰めたいのですが」

セレンはロイドのぶっ飛んだ出自については納得できても「なんでもします」のほうは納得いかないようです。気負った新入社員の初めての企画会議が如く、カエルに対する熱いプレゼンを展開し始めました。

「あと、ばれたらロイド君は村に連れ戻されて会

えなくなっちやうけどいいの？」

「よく考えたらカエルは夏場なんか夜の窓に張り付いたりして気持ち悪いことこの上ないですわね、大問題ですわ。やっぱナシで」

そして手のひらの返しっぷりもまた、付和雷同ふわらいどうな新入社員のようでした。

一方リホは複雑な表情でした——しまった普通の田舎者いなかもものだったら素直に利用しとけばよかった！

という感情ともう一つ、  
「じゃあ親がいなくて話は本当か……いや、あの優しさもこんなアタシを友達って言ったことも全部罫でも芝居でもなく——」

——「シンパシーを感じていた」、その言葉も嘘ではなかったことがなんとなく嬉しく思えたようです。もちろんそんなことマリーにはわかりませぬ。ちよつと嬉しそうな顔をしているリホが気にはなりません。が先ずは本題と言わんばかりに協力を要請します。

「で、申し訳ないんだけど手伝ってくれるかしら？ 大事にしたたら何をしでかすかわからないから少数精鋭で上手く対処したいの」

「まあいいぜ王女様」

「やけにあっさり引き受けたけどいいの？」

「王族に貸し作るチャンスってのもあるけど……」

強<sup>し</sup>いて言うならシンパシーを感じたっつよ。  
あえて憎まれ役を買って出たあんたの気持ちも汲<sup>く</sup>んでな」

一方セレンは落ち着いた様子で同意します。

「私も協力しますわ。この国の為なら軍属に籍を置く以上喜んで平和のために尽力します」

「……ありがとう」

「そして！ 事が済んだ暁には王女様の権力をもつてロイド様を士官学校に編入！ 寮で私と同じ部屋！ そしてロイド様のなんでもします券の発行を要求しますわ！」

明らかに後半のセリフの熱量が違いました。

「……前向きに善処します」

ロリババアに匹敵する傾倒っぷりにデジャヴ&めまいが生じ、政治家のような玉虫色の発言で切り抜けます。

マリーーはめまいを振り切って元のシリアス顔に戻ると二人を見据えます。

「じゃ、早速当日の話をしましよう……事なきを得てまた笑顔であの子を——」

後戻りはできない、マリーーの眼差しは二人に伝<sup>でん</sup>搬<sup>ぱん</sup>し真摯な顔つきで頷くのでした。

夕日に赤く染まったイーストサイドの雑貨屋。



二人が帰った後、マリーは疲れて重くなつた体を椅子に預けます。クロムの手引きも優秀な協力者も得たというのにどことなく気が重いのはおそろくロイドのことが引っかかっているからなのでしよう。

（気持ち切り替えましょう、マリア。これで黒幕の邪魔を防いで父さんの呪いを解くことに集中できる……ルーン文字は邪魔が入ってしまったら私じゃ連発できなもんね……）

そしてまた頭の中では「ロイド君がいたら」と考えてしまいます。協力を得られたらどれだけ楽か、という気持ちだけでは十分理解してい

ました。無意識のうちにもらったブローチを握ってしまふのでした。

マリ―は脳裏に焼き付いたロイドの悲しげな表情を振り払うと、夕焼け映はえる町並みを窓越しに眺めます。

（そう、明日決着がつく、父を解放し元の生活に戻れるかも知れない……でも……）

ため息一つと共にボソリと不安を口にします。

「死ぬかも知れない……か」

マリ―はそう考えると、この窓の風景すらも愛おしく思えてくるようです。目を細め薄汚れた通りを眺め初めてこの店を開いた日のことを思い出

します。粗野だけど優しい街の人、そして視界に飛び込んでくるびしょ濡れのアルカー――

「つてなんでびしょ濡れの師匠がいるんですか！」  
窓の外にいる予想外の姿をした師匠にマリーは  
たまらず大声を上げます。アルカはゆらりと歩き  
出し律儀に入口から店に入り、水を滴したたらせたまま  
椅子に腰をかけるのでした。

ビシヤっという音とともにアルカはマリーに話  
し出します。

「……話は聞かせてもらった。ワシやロイドを巻  
き込まないという約束はなんとか果たせそうじゃ  
の」

また面妖めんような術で人の会話を聞いていたのだろうと察したマリ―は申し訳なさそうにします。

「ご心配おかけしまして申し訳ございません。この事件はなんとか自力で解決してみせます……」

「うむ、よくぞ踏みとどまったの。人間同士の勢力争いにコンロンの村が関わってはいけません。いいし身が持たないし面倒くさー人は成長しないからのお」

アルカの本音混じりの言葉にもマリ―はツツコムことなく頭を下げました。

「お気使いありがとうございます……私自らの手で決着つけますから」

殊勝しゅしょうなマリィにアルカは不満げな御様子です。

「うーむ調子狂うのう。これが魔王やら人知を  
超えた輩が関わっていたら手を貸すんじゃないが、ま、  
気負うことなく頑張るんじゃないよ、マリィア王女」

「はい」

店内が重い空気になり始めた時、アルカは話題  
を変えます。

「……はてはて、それはさておき」

濡れたローブの裾を絞りながら、アルカは憎々  
しげに言い放ちます。まるでこれが本題かのよう  
な口ぶりでした。

「あの水晶が瞬間移動のゲートだと知っていな

がら、なぜ井戸に沈めたのかのお……マリーちゃ  
ん？」

「あ」

マリーはついこの前の勢いに任せてやった行為  
を思い出したのでした。

「年とし甲しが斐がいもなく驚いてしもうたよ……よくぞ踏み  
とどまったとねぎらいにすっ飛んで来たら井戸の  
中だったんじゃないかな」

「い、勢いに任せてやってしまいました。今は反  
省しています」

謝罪のテンプレートに対しアルカは満面の笑み  
で答えます。

「……何を怯えておるのじゃ？　ワシは怒ってないぞマリ―」

「し、師匠」

師匠の寛容な態度にホロリと涙がこぼれそうになるマリ―。

「……もうすでに十回に一回の割合で語尾に『ニヤ』が付く呪いかけといたたからもう怒ってないからのお」

「アンタ！　これから大事な決着って時になんてことしてるんだニヤ！」

そしてマリ―は自分の語尾に顔を赤くして身悶みもだえします。ホロリどころかマジ泣きです。



「うわあああ！ 年頃の娘に何させるんだニヤ！」  
「あらら、十回に一回の割合なのに二回連続なんてお主はついとるぞ」

「ツイテナイ！ あんたに会ったことも含めてついでにいない！」

「ま、ロイドを悲しませた罰でもあるんじゃない、甘んじて受け入れるがいい」

身悶えするマリィをアルカは楽しげに眺めます。

「おおそうじゃ、お祭り当日のロイドはワシに任せなさい。ちゃんと面倒見ておくから安心して決着つけに行くんじゃないよ。死んだら骨は拾って燃えないゴミに出しておくからの」

そしてマリーに「それ、お祭りの日にロイド君と遊びたいだけじゃ」と言う暇も与えず颯爽さつそうとアルカは水晶の中へと消えていってしまいました。

「このオニロリババアアアアアアア！」

うっすら星が見えてきた黄昏たそがれどき時に魔女の咆哮ほうこうが轟とどろいたそうです。